

東アジア日本研究者協議会

East Asian Consortium of Japanese Studies

2021 동아시아일본연구자협의회 제5회국제학술대회

2021 東アジア日本研究者協議会 第5回国際學術大會

2021 东亚日本研究者协会 第五届国际学术大会

2021 東亞日本研究者協會 第五屆國際學術大會

# 東アジア日本研究者協議会 第5回国際学術大会

East Asian Consortium of  
Japanese Studies  
Fifth International Conference



- ・日時 | 2021年 11月 26日(金)~11月 28日(日)
- ・場所 | オンライン(zoom)開催
- ・主催 | 東アジア日本研究者協議会, 高麗大学校グローバル日本研究院, 高麗大学校4段階BK21中日語文学教育研究団
- ・協催 | 高麗大学校, 高麗大学校日語日文学科, 高麗大学校大学院中日語文学科
- ・助成 | 独立行政法人国際交流基金, 公益財団法人東芝国際交流財団

## 目次

### 東アジア日本研究者協議会 第5回学術大会 概要

・大会日程および全体プログラム	— 10
-----------------	------

### 【特別企画】協議会ラウンドテーブル・JFラウンドテーブル

■ ラウンドテーブル: グローバルな日本研究、どうなるべきか(11月26日)	
・東南アジアにおける日本研究 … Karl Ian Cheng Chua (The Japanese Studies Association in ASEAN, Assistant Professor, Ateneo de Manila University)	— 40
・グローバルな日本研究、どうなるべきか … Rowena Ward (Senior Lecturer, University of Wollongong, Australia)	— 47
・グローバルな日本研究、どうなるべきか: 欧州における日本研究のグローバルな日本研究としての可能性 … アンドレイ・ベケシュ(Andrej Bekeš) (European Association for Japanese Studies, Professor Emeritus, University of Ljubljana)	— 50
・トランス・リージョナルであること、デジタル時代に向き合うこと … 日比嘉高 (東アジア同時代日本語文学フォーラム、名古屋大学教授)	— 63
・比較研究を通じたグローバル日本研究の活性化 … 朴喆熙 (東アジア日本研究者協議会、ソウル大学国際学研究所長)	— 65
■ JFラウンドテーブル: 東アジアの日本研究: その研究・教育での連携の可能性を探る(11月28日)	— 69
… 鄭炳浩(高麗大学文科大学学長、韓国日本学会会長)	
… 周異夫(北京日本学研究中心主任)	
… 徐興慶(台湾・中国文化大学学長)	
… 園田茂人(東京大学東洋文化研究所 教授)	

### 【第1部】企画パネルおよび分科別学術発表

【パネル1】中国文化大学日本語文学科・元智大学応用外国語学科 多様化のニーズに対応する日本語教育の在り方: AI・AR・認知・対称の視点から	— 75
【パネル2】国際日本文化研究センター 航路からみた近代: 日本・東アジア・アメリカ大陸間の人・モノ・動植物の交換	— 77
【パネル3】中国国際問題研究院 日本における発展途上国政策と中国との関係	— 79
【パネル4】慶應義塾大学日本研究プラットフォーム 選挙区からみる日本政治の現在地	— 81
【パネル5】高麗大学校 流動する「変態」: 1920～30年代日韓の探偵小説	— 83
【パネル6】日本文学と東南アジア(南洋)研究チーム 日本における東南アジアの表象とその周辺	— 85
【パネル7】国際日本文化研究センター 20世紀前半の東アジアにおける異文化間交渉: 文学・宗教・思想	— 87
【パネル8】高麗大学グローバル日本研究院 東アジアの交流	— 89
【パネル9】国立台中科技大学・日本研究センター 日本の国際分業と日台産業連携	— 92
【パネル10】ソウル大学日本研究所×植民地美術研究会 国境を超えて移動していた芸術家とその表象	— 93
【パネル11】「訳官使・通信使とその周辺」研究会 釜山と対馬をつなぐ道	— 95
【パネル12】(次世代)総合研究大学院大学 日本文化における舶来表象と権威	— 97
【分科1】東アジアにおける歴史認識問題 ・日本赤十字社と大韓帝国 … 松田利彦 — 99 ・「広島復興」はいかに記述されてきたか: 「復興」をめぐる歴史認識の内破のために … 西井麻里奈 — 100 ・ベルナルド・クーパーの番組制作比較研究: 米軍占領期の日本本土と巨済島戦争捕虜収容所での実践を事例として … 松本章伸 — 101	
【分科2】日本の古典文学と東アジア ・危険社会と神国思想の様相 : 軍記物語と植民地期朝鮮の日本語文献の神功皇后記事を中心に … 韓采旼 — 102	

・平安京をめぐる人の移動と場 … 久葉智代	— 103
・古浄瑠璃に見る近世期の東アジア観と日本の神国思想 … 松波伸浩	— 105
・『女郎花物語』と『仮名列女伝』の関連性：『女郎花物語』の作者をめぐる … 陳羿秀	— 106
<b>【分科3】東アジアにおける人・物の移動と表象</b>	
・中国インターネット上のアニメツーリズム情報から見た行動特徴及び観光地イメージ … 段乃璋	— 107
・「シャングリラ」から「香格里拉」： 1990年代以降における中国雲南省中甸県の観光化をめぐる … BAI LU	— 108
・バナナ表象から見る東アジア文化史：帝国主義の時代から冷戦期まで … 岸川あゆみ	— 110
・日本の老人文学に於ける用語定義の提言：前期高齢者・後期高齢者・超高齢者を中心に … 房京姫	— 111

#### 【分科4】「世界文学」の中の日本文学 1

・森崎和江における朝鮮の受容と表出の様相 … 反町真寿美	— 112
・『妖怪作品『墓場鬼太郎』における水木しげるの異界観と戦争体験』 … 王喬丹	— 113
・穆時英の作品における「ステッキ」について： 日本で現れた「ステッキ・ガール」との関わりを中心に … 再念周	— 114
・日本学者コンラドと韓国 … 塚本善也	— 115

## 【第2部】企画パネルおよび分科別学術発表

#### 【パネル13】高麗大学校グローバル日本研究院

東アジアにおける日本語資料・文献の諸相	— 116
---------------------	-------

#### 【パネル14】近代満洲における技術導入と社会変容

「近代満洲」における医療・衛生管理技術の導入と社会変容	— 118
-----------------------------	-------

#### 【パネル15】シニア経済と高齢社会の対応(1)

シニア産業の交流	— 120
----------	-------

#### 【パネル16】高麗大学グローバル日本研究院 社会災難安全研究センター

‘災害共存の時代’の相互協働と東アジア共同体へ	— 122
-------------------------	-------

#### 【パネル17】漢陽大学 日本学国際比較研究所

日本古典文学の想像力	— 124
------------	-------

#### 【パネル18】国立台中科技大学・日本研究センター

アジアにおける日本企業の発展とビジネスモデル	— 125
------------------------	-------

#### 【パネル19】韓国外国語大学・統一研究院(沖縄と東アジアの平和)

東アジアの平和と沖縄問題	— 126
--------------	-------

#### 【パネル20】ソウル大日本研究所・大阪市立大人権問題研究所

日本の「民主主義」を再考する	— 128
----------------	-------

#### 【パネル21】東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター

COVID-19パンデミック下の日本社会の経験と社会科学的研究	— 130
---------------------------------	-------

#### 【パネル22】翰林大学日本学研究所・人文韓国プラス支援事業

国民国家と歴史認識その限界・解決の模索	— 132
---------------------	-------

#### 【パネル23】(次世代)アジアにおける人の移動を考える会

COVID-19がもたらしたアジアにおける移動と労働への影響	— 134
--------------------------------	-------

#### 【パネル24】(次世代)徐承元教授研究室

トランス-東アジア研究の模索：北東アジア-東南アジア連結性の現在と展望	— 136
-------------------------------------	-------

#### 【分科5】東アジアにおける日本語研究の諸問題

・動的な観点から見た後置文 … 汪聞君	— 138
・中国語の結果複合動詞と日本語の有対自他動詞との対照研究 … 郭帥	— 140
・オンライン日本語授業の試み：航空日本語を中心に … 陳姿菁	— 141
・翻訳者は本当に不要か：オンラインツールに出力された訳文の対照 … 薛芸如	— 142

#### 【分科6】日本研究と日本語教育

・日本語文ディクテーションの認知メカニズムに関する基礎研究： 日本語学習者の作動記憶容量, 文の種類の見点から … 邵雲彩	— 144
・反転授業の導入による学生の自律学習及び協同学習への試み： 「中級日本語」での実践を例に … 黄馨儀	— 145
・東京2020大会に向けた全国外大連合の取り組みの成果と課題 … 朴ジョンヨン	— 146

#### 【分科7】「世界文学」の中の日本文学 2

・戦後児童文化における戦時下の機械兵器描写：小松崎茂の画業を中心に … 河盛皓	— 148
・現代日本文学における〈悪女〉論について … 孫于恵	— 149
・エッセイ形式の震災マンガにおける「3. 11」表象の両義性 … 杉本章吾	— 150

#### 【分科8】「世界文学」の中の日本文学3

・19世紀における長崎派南画家の中国画学習：鉄翁の縮図を手がかりに … 王紫沁	— 151
・植民地期朝鮮の料理書にみる伝統食概念の形成： 方信榮『朝鮮料理製法』の改訂過程を例に … 大橋利光	— 152
・撫でるしぐさの意味：民話導入部に注目して … 茶園直人	— 153
・『土佐日記』の異界観：天文気象に関する記述から … 永原順子	— 154

## 【分科9】東アジアにおける思想交流史

- ・天心と湖南：近代期日本の中国絵画受容史 … 姜希妍 — 155
- ・現代支那への注目：1920年代『改造』における中国イメージ … 崔雪 — 156
- ・1920年代の朝鮮における青年読本と日本の出版界 … 田中美佳 — 157
- ・19世紀の東アジア国際情勢の変動と公家の対外認識：明治維新の特徴と普遍性 … 齊藤紅葉 — 158

## 【第3部】企画パネルおよび分科別学術発表

### 【パネル25】高麗大学グローバル日本研究院

- 東アジアにおける植民地の文化政治と感染症の表象 — 159

### 【パネル26】シニア経済と高齢社会の対応(2)

- 高齢社会対策の交流 — 161

### 【パネル27】高麗大学

- 日本語学習者の「言いさし表現」の普遍性と個別性を考える — 163

### 【パネル28】中国文化大学日本語文学科・神戸市外国語大学

- 日本語における語彙の言語的特徴:コーパスと対照の視点から — 165

### 【パネル29】戦後日本の市民運動と「朝鮮問題」

- 1960年代後半の日本の市民運動のなかの「朝鮮問題」をめぐる理論と実践 — 167

### 【パネル30】嘉泉大学アジア文化研究所

- 映像メディアと文化ナショナルリズム — 169

### 【パネル31】グローバル社会における疫病—儀礼と教育の影響

- コロナ禍における祭りと儀礼 — 171

### 【パネル32】翰林大学日本学研究所 HK+事業団

- 1950～1951年刊行『日本及日本人』からみる「戦後」日本における帝国の欲望と葛藤 — 173

### 【パネル33】韓国・国立外交院日本研究センター

- 米中競争時代のなかの韓国・日本外交 — 175

### 【パネル34】漢陽大学 日本学国際比較研究所 II

- 日本古典文学の想像力II — 177

### 【パネル35】東京外国語大学

- COVID-19と加速する危機・グローバル資本主義・デジタル・モノポリー：  
マルクス『資本論』の読み直しにもとづく東アジアの地政学的分析の試み — 178

### 【パネル36】ソウル大学日本研究所

- 100歳時代・ベビーブーマー世代の孤立と社会参加 — 180

### 【パネル37】ソウル大学国際学研究所

- 自民党一党優位再構築の光と影 — 182

## 【分科10】帝国日本の支配と植民地社会の変容

- ・大正デモクラシーの制度論 … 清水唯一朗 — 183
- ・戦前期における日本～朝鮮半島を結ぶ航路形成：京都府・舞鶴港を中心に … 長沢一恵 — 184
- ・〈日の丸の下で働きたい〉：戦前・終戦直後のブラジル日系社会の言論界における  
「大東亜共栄圏再移住論」の言説と南米永住論を中心に … ソアレス・モッタフェリッペ・アウグスト — 185
- ・コッコジ(韓国いけ花)の成立：日韓文化交流の視点から … 小林善帆 — 186

## 【分科11】戦争と日本文学

- ・讃歌と異音：満洲国作家爵青の現代詩を中心に … 王晴 — 187
- ・戦時下における抒情 … 佐藤元紀 — 189

## 【分科12】東アジアにおける政治と国際関係 1

- ・新型コロナウイルス対策の評価と影響：追跡能力不足と日本の政策選択 … 徐博晨 — 190
- ・大阪市の公害問題対策 … リョウ キンイ — 191
- ・自己責任ディスコースをめぐる政治的・文化的実践：  
記号イデオロギーに着目した言語人類学的分析 … 青山俊之 — 193
- ・2010年から2020年までの日フィリピン貿易のマクロ評価 … Ivan Kaye F. Bantigue — 194

## 【分科13】東アジアにおける政治と国際関係 2

- ・戦後日本における地域の軍事化と警察の社会史 … 渡邊啓太 — 197
- ・沖縄への自衛隊移駐期における自衛隊支援活動に関する一考察：  
沖縄県防衛協会の設立を中心に … 中原雅人 — 198
- ・対米バンドワゴン政策？日本の戦略選択に影響を与える要因分析 … 楊雯婷 — 199



東アジア日本研究者協議会 第5回学術大会 概要

# 大会日程および 全体プログラム



## [ 全体の日程 ]

(韓国時間)

日時	内容
11月26日 (金)	<p>開会式 <span style="float: right;">司会：兪在眞(高麗大学 教授)</span></p> <p>▶ 開会の辞：蔡盛植(高麗大学 グローバル日本研究院 院長)</p> <p>▶ 歓迎の辞：鄭炳浩(高麗大学 文科大学 学長)</p> <p>▶ 祝辞：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 中條一夫(駐韓日本国大使館 公報文化院長)</li> <li>• 佐藤百合(国際交流基金 理事)</li> <li>• 大森圭介(公益財団法人 東芝国際交流財団 専務理事)</li> </ul> <p>▶ 発起人ご挨拶</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 李康民(漢陽大学日本学国際比較研究所 所長)</li> <li>• 小松和彦(国際日本文化研究センター名誉教授)</li> <li>• 徐一平(北京外国語大学 教授)</li> <li>• 徐興慶(台湾-中国文化大学 学長)</li> </ul>
	<p>15:00~ 17:30</p> <p>ラウンドテーブル：グローバルな日本研究、どうなるべきか</p>
11月27日 (土)	<p>パネル・個人発表</p> <p>(第1部：10:30~12:30 / 第2部：14:00~16:00 / 第3部：16:30~18:00)</p>
11月28日 (日)	<p>10:00~ 12:00</p> <p>JFラウンドテーブル：東アジアの日本研究：その研究・教育での連携の可能性を探る</p> <p>▶ 登壇者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 鄭炳浩(高麗大学 文科大学学長、韓国日本学会会長)</li> <li>• 周異夫(北京日本学研究中心主任)</li> <li>• 徐興慶(台湾-中国文化大学 学長)</li> <li>• 園田茂人(東京大学東洋文化研究所 教授) <span style="float: right;">※モデレーター</span></li> </ul>
	<p>12:00~ 12:30</p> <p>閉会式 <span style="float: right;">司会：兪在眞(高麗大学 教授)</span></p> <p>▶ 閉会の辞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 蔡盛植(高麗大学 グローバル日本研究院 院長)</li> <li>• 加藤剛(日本国際交流基金 ソウル文化センター 所長)</li> </ul> <p>▶ 次期協議会の主体側の挨拶</p>
	<p>12:30~</p> <p>運営委員会</p>

## [ オンライン会場の案内 ]

(韓国時間)

会場	第1部 (10:30~12:30)	第2部 (14:00~16:00)	第3部 (16:30~18:00)	場所
本部会場	11月26日(金)開会式・11月28日(土)閉会式			<p>▶ オンラインアクセス各会場へのURLおよびプロシーディングは、大会ウェブサイト「お知らせ」(<a href="http://eacjs2021.net">http://eacjs2021.net</a>)にてご確認ください。</p>
第1会場	パネル1	パネル13	パネル25	
第2会場	パネル2	パネル14	パネル27	
第3会場	パネル3	パネル15	パネル26	
第4会場	パネル4	パネル16	パネル28	
第5会場	パネル5	パネル17	パネル29	
第6会場	パネル6	パネル18	パネル30	
第7会場	パネル7	パネル19	パネル31	
第8会場	パネル8	パネル20	パネル32	
第9会場	パネル9	パネル21	パネル33	
第10会場	パネル10	パネル22	パネル34	
第11会場	パネル11	パネル23	パネル35	
第12会場	パネル12	パネル24	パネル36	
第13会場	分科1	分科5	パネル37	
第14会場	分科2	分科6	分科10	
第15会場	分科3	分科7	分科11	
第16会場	分科4	分科8	分科12	
第17会場		分科9	分科13	

## [ 学術大会プログラム ]

(韓国時間)

11月26日(金)

時間	内容
14:00~15:00	<p>開会式</p> <p style="text-align: right;">司会：兪在眞(高麗大学 教授)</p> <p>▶ 開会の辞：蔡盛植(高麗大学 グローバル日本研究院 院長)</p> <p>▶ 歓迎の辞：鄭炳浩(高麗大学 文科大学 学長)</p> <p>▶ 祝辞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 中條一夫(駐韓日本国大使館 公報文化院長)</li> <li>• 佐藤百合(国際交流基金 理事)</li> <li>• 大森圭介(公益財団法人 東芝国際交流財団 専務理事)</li> </ul> <p>▶ 発起人ご挨拶</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 李康民(漢陽大学日本学国際比較研究所 所長)</li> <li>• 小松和彦(国際日本文化研究センター名誉教授、国際日本文化研究交流財団理事長)</li> <li>• 徐一平(北京外国語大学 教授、北京日本学研究中心 前主任)</li> <li>• 徐興慶(台湾・中国文化大学 学長)</li> </ul>
15:00~17:30	<p>ラウンド・テーブル：グローバルな日本研究、どうなるべきか</p> <p style="text-align: right;">司会：徐承元(高麗大学 教授)</p> <p>▶ 登壇者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Karl Ian Cheng Chua(The Japanese Studies Association in Southeast Asia (JSA-ASEAN), Assistant Professor, Ateneo de Manila University)</li> <li>• Rowena Ward(Senior Lecturer, University of Wollongong, Australia)</li> <li>• アンドレイ・ベケシュ(Andrej Bekeš) (European Association for Japanese Studies, Professor Emeritus, University of Ljubljana)</li> <li>• 日比嘉高(東アジア同時代日本語文学フォーラム、名古屋大学教授)</li> <li>• 朴喆熙(東アジア日本研究者協議会、ソウル大学国際学研究所長)</li> </ul>

11月27日(土)

1部 10:30~12:30

パネル1：中国文化大学日本語文科学科・元智大学応用外国語学科

時間	責任者	テーマ
10:30~ 12:30	徐興慶 (中国文化大学)	多様化のニーズに対応する日本語教育の在り方 : AI・AR・認知・対称の視点から 司会：方献洲(中国文化大学)
		<ul style="list-style-type: none"> <li>黄金堂(中国文化大学) AIの「知」と「創」の視点から大学のカリキュラムを考える — 知識と創造を育つ大学の授業を中心に</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>呉翠華・黄怡錚・林淑璋(元智大学) 絵本におけるAR要素導入による初級日本語学習 — 多領域人材育成の試み</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>陳順益(中国文化大学) 台湾人学習者に対応する日本語文法教育 — 対照と認知の視点からの一提案</li> </ul>
		▶ 討論者：徐興慶(中国文化大学) 越川次郎(中部大学)

パネル2：国際日本文化研究センター

時間	責任者	テーマ
10:30~ 13:00 <sup>1)</sup>	根川幸男 (国際日本文化 研究センター)	航路からみた近代 : 日本・東アジア・アメリカ大陸間の人・モノ・動植物の交換 司会：鶴戸聡(明治大学)
		<ul style="list-style-type: none"> <li>橋本順光(大阪大学) アッサム茶のブラジル移植をめぐる神話の形成 — 英領インドと日本のアジア主義</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>ガラシーノ・ファクンド(JICA緒方貞子平和開発研究所) ブラジル・アマゾン流域における黄麻栽培の確立</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>酒井佑輔(鹿児島大学) 胡椒のブラジル・アマゾン移植における日本人の南洋ネットワーク</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>ファン・ハイ・リン(ハノイ国家大学) 仏領ベトナムにおける人力車の研究</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>ホワニシャン・アストギク(ロシア・アルメニア大学) 移動と病い—トラホームを中心に</li> </ul>
		▶ 討論者：根川幸男(国際日本文化研究センター)

1) 発表者が5名のパネルは・休憩時間を30分割いて150分で運営

パネル3：中国国際問題研究院

時間	責任者	テーマ
10:30~ 13:00	姚錦祥 (中国国際問題 研究院)	日本における発展途上国政策と中国との関係 司会：姚錦祥(中国国際問題研究院)
		<ul style="list-style-type: none"> <li>スティーブン R. ナギ(国際基督教大学) ルールに基づく日中協力に向けて？開発協力の限界と可能性</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>ニコライ・ムラシキン(JICA緒方貞子平和開発研究所) 新シルクロード？日本の中央アジアとの開発協力と中国との関係</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>孫文竹(中国国際問題研究院) 第三者市場での日中協力：進展と課題</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>姚錦祥(中国国際問題研究院) 中国は中東で日本から何を学ぶことができますか？</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>李明儒(同志社大学) 日本におけるアフリカ研究の発展</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>張騰飛(武漢大学) 国家ブランドと競争力のあるアイデンティティ — 東南アジアにおける日本の文化政策</li> </ul>
		▶ 討論者：姚錦祥(中国国際問題研究院)

パネル4：慶應義塾大学日本研究プラットフォーム

時間	責任者	テーマ
10:30~ 12:30	清水唯一朗 (慶應義塾大学)	選挙区からみる日本政治の現在地 司会：古谷知之(慶應義塾大学)
		<ul style="list-style-type: none"> <li>鎌原勇太(横浜国立大学) 「一人一票」の「一人」とは誰なのか？ — 議員定数不均衡指標から考察する選挙区人口に関する 理論的・実証的考察</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>飯田健(同志社大学) 世代、支持政党、選挙区特性による有権者のイデオロギー理解の違い — 自由記述回答のテキスト分析</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>重村壮平・品田裕(神戸大学)・宋財滋(関西大学) 選挙ポスターは投票参加を促すか：2021年うるま市市長選の事例から</li> </ul>
		▶ 討論者：大村華子(関西学院大学) 古谷知之(慶應義塾大学)



パネル5：高麗大学校

時間	責任者	テーマ
10:30~ 12:30	兪在真 (高麗大学)	流動する「変態」 : 1920~30年代日韓の探偵小説  司会：朴輪貞(東京大学)
		• 韓程善(釜山大学)
		• 李炫熹(高麗大学) 近代探偵小説をめぐる科学的想像力 — 夢野久作の変格探偵小説を中心に
		• 兪在真(高麗大学) 在朝日本人の変格探偵小説：「顛倒」への欲望
		• 鄭惠英(慶北大学) 植民地朝鮮の変格探偵小説と「幻想」の領域  ▶ 討論者：李志炯(淑明女子大学) 洪潤杓(誠信女子大学)

パネル6：日本文学と東南アジア(南洋)研究チーム

時間	責任者	テーマ
10:30~ 12:30	鄭炳浩 (高麗大学)	日本における東南アジアの表象とその周辺  司会：鄭炳浩(高麗大学)
		• ロウリ・エステル(インドネシア大学) 『ジャワ・バル』雑誌の表紙におけるインドネシアの女性と子ども像
		• アントニウス・プジョ(アイルランガ大学) 南方徴用作家富沢有為男のジャワ体験
		• 李佳呖(高麗大学) 帝国日本における南洋認識：山田毅『南洋大観』(1934)を中心に
		• 朴祉侯(高麗大学) 「大正期」南洋文学の可能性 — 芥川龍之介の『桃太郎』を南洋文学で読み解く  ▶ 討論者：金孝順(高麗大学) 嚴仁卿(高麗大学)

パネル7：国際日本文化研究センター

時間	責任者	テーマ
10:30~ 12:30	藤本憲正 (国際日本文化 研究センター)	20世紀前半の東アジアにおける異文化間交渉 : 文学・宗教・思想  司会：稲賀繁美(京都精華大学)
		• ゴウランガ・C・プラダン(国際日本文化研究センター) 夏目漱石の「翻訳論」：「翻訳不可能性」論の視点から
		• 片岡真伊(東京大学) 鶴見祐輔と日本文学世界化構想 — 着想の契機と拓かれた可能性を中心に
		• 藤本憲正(国際日本文化研究センター) 魚木忠一の「日本基督教」の再考 — 宗教の解釈と受容の制約をめぐって
		• 谷雪妮(京都大学) 文化交渉の視点からみる橘樸の「王道」論 — 生存権のデモクラシーと東アジア  ▶ 討論者：稲賀繁美(京都精華大学)

パネル8：高麗大学グローバル日本研究院

時間	責任者	テーマ
10:30~ 12:30	宋浣範 (高麗大学)	東アジアの交流  司会：宋浣範(高麗大学)
		• 羅京洙(学習院女子大学) 在日コリアン・コミュニティの比較研究：歴史・変容・「共生」
		• 李芙鏞(江原大学) 日本古典文学における獅子舞の表象
		• 李基原(江原大学) 申維翰と荻生徂徠：1719年朝鮮通信使と徂徠との出会い
		• 村上菜菜(奈良女子大学) 新羅と古代日本の地方行政における村の位置  ▶ 討論者：趙明哲(高麗大学) 金靜希(嘉泉大学) 許芝銀(西江大学) 李壯雄(漢城百濟博物館)

パネル9：国立台中科技大学・日本研究センター

時間	責任者	テーマ
10:30~ 12:30	黎立仁 (国立台中科技大学)	日本の国際分業と日台産業連携 司会：李嗣堯(国立台中科技大学)
		• 曾耀鋒(国立台中科技大学) FTA/EPAが日本への対内直接投資に与える影響に関する研究
		• 李嗣堯(国立台中科技大学) ジプズの成功要因の一考察：戦略ストーリーの視点から
		• 林冠汝(真理大学) 日本の東海地域と台湾の産業連携とイノベーション
		• 張銘今(国立台中科技大学) 顧客満足度と顧客ロイヤルティの比較：エバー航空と全日空を例として
		▶ 討論者：林冠汝(真理大学) 亀井大樹(同志社大学) 葉東哲(国立台中科技大学) 李嗣堯(国立台中科技大学)

パネル10：ソウル大学日本研究所x植民地美術研究会

時間	責任者	テーマ
10:30~ 12:30	盧ユニア (ソウル大学)	国境を超えて移動していた芸術家とその表象 司会：盧ユニア(ソウル大学)
		• 申ミンジョン(韓国外国語大学) 海を渡る舞姫：芸術家たちによる朝鮮美人の表象
		• カク・イケン(国立台湾美術館) 村上無羅作《満洲所見》について
		• ヤン・ユー(九州大学) 帝国のまなざし：桑原甲子雄の満洲写真
		• 田代裕一郎(獨協大学) 朝鮮民族美術展覧会(1921年)と李朝陶磁器展覧会(1922年)
		▶ 討論者：コウオージェイ・マグダレナ(東洋英和女学院大学) 金智英(個人研究者)

パネル11：「訳官使・通信使とその周辺」研究会

時間	責任者	テーマ
10:30~ 12:30	池内敏 (名古屋大学)	釜山と対馬をつなぐ道 司会：池内敏(名古屋大学)
		• 石田徹(島根県立大学) 対馬における『潜商』とその取締
		• 片山まび(東京藝術大学) 抜荷と贈答品の中身：「判事茶碗」の生産と終焉をめぐって
		• 李炯周(名古屋大学) 倭館における裁判役の音物贈答と饗応
		▶ 討論者：程永超(東北大学)

パネル12：(次世代)総合研究大学院大学

時間	責任者	テーマ
10:30~ 12:30	虞雪健 (総合研究大学院大学)	日本文化における舶来表象と権威 司会：児島啓祐(総合研究大学院大学)
		• 上杉幹(総合研究大学院大学) 和漢の囲碁と権威性：中古文学作品を中心に
		• 虞雪健(総合研究大学院大学) 宝劔の夢想に対する宋学的・禅宗的批判 — 西源院本『太平記』巻二十六「從伊勢国進宝劔事付黄梁夢事」を中心に
		• 伊藤美幸(総合研究大学院大学) 渡辺幽香《幼児図》の制作背景 — 幕末維新期の太閤記物の流行に着目して
		▶ 討論者：黄昱(国文学研究資料館)

■ 個人発表(4分科)

分科1: 東アジアにおける歴史認識問題

司会：李賢京(東海大学)

時間	部門	発表者	テーマ
10:30~ 11:00	個別論文	松田利彦 (国際日本文化 研究センター)	日本赤十字社と大韓帝国
11:00~ 11:30	個別論文	西井麻里奈 (大阪大学文学)	「広島復興」はいかに記述されてきたか：「復興」をめぐる歴史認識の内破のために
11:30~ 12:00	個別論文	松本章伸 (大阪大学)	ベルナルド・クーパーの番組制作比較研究：米軍占領期の日本本土と巨済島戦争捕虜収容所での実践を事例として

分科2: 日本の古典文学と東アジア

司会：梁誠允(高麗大学)

時間	部門	発表者	テーマ
10:30~ 11:00	次世代論文	韓采旼 (高麗大学)	危険社会と神国思想の様相：軍記物語と植民地期朝鮮の日本語文献の神功皇后記事を中心に
11:00~ 11:30	次世代論文	久葉智代 (総合研究 大学院大学)	平安京をめぐる人の移動と場
11:30~ 12:00	次世代論文	松波伸浩 (名古屋大学)	古浄瑠璃に見る近世期の東アジア観と日本の神国思想
12:00~ 12:30	個別論文	陳羿秀 (静宜大学)	『女郎花物語』と『仮名列女伝』の関連性：『女郎花物語』の作者をめぐって

分科3: 東アジアにおける人・物の移動と表象

司会：金旭(ソウル大学日本研究所)

時間	部門	発表者	テーマ
10:30~ 11:00	次世代論文	段乃璋 (駒沢大学)	中国インターネット上のアニメツーリズム情報から見た行動特徴及び観光地イメージ
11:00~ 11:30	次世代論文	BAI LU (駒沢大学)	「シャングリラ」から「香格里拉」：1990年代以降における中国雲南省中甸県の観光化をめぐって
11:30~ 12:00	次世代論文	岸川あゆみ (名古屋大学)	バナナ表象から見る東アジア文化史：帝国主義の時代から冷戦期まで
12:00~ 12:30	次世代論文	房京姫 (高麗大学)	日本の老人文学に於ける用語定義の提言：前期高齢者・後期高齢者・超高齢者を中心に

分科4: 「世界文学」の中の日本文学 1

司会：李文鎬(高麗大学)

時間	部門	発表者	テーマ
10:30~ 11:00	次世代論文	反町真寿美 (高麗大学)	森崎和江における朝鮮の受容と表出の様相
11:00~ 11:30	次世代論文	王喬丹 (東京外国語大学)	『妖怪作品『墓場鬼太郎』における水木しげるの異界観と戦争体験』
11:30~ 12:00	次世代論文	冉念周 (一橋大学)	穆時英の作品における「ステッキ」について：日本で現れた「ステッキ・ガール」との関わりを中心に
12:00~ 12:30	個別論文	塚本善也 (中国文化大学)	日本学者コンラドと韓国

● 昼休憩：12:30~14:00

**2部 14:00~16:00**

パネル13：高麗大学校グローバル日本研究院

時間	責任者	テーマ
14:00~ 16:00	嚴仁卿 (高麗大學)	東アジアにおける日本語資料・文献の諸相 司会：松田利彦(国際日本文化研究センター)
		・ 嚴仁卿(高麗大学) 韓国における植民地期日本語文献資料化の現況について
		・ 呉佩軍(華南師範大学) 中国における戦前日本語定期刊行物の保存状況
		・ 陳延媛(中央研究院) 近年台湾における日本植民統治資料の発掘と整理
		・ 加藤聖文(国文学研究資料館) 日本における植民地関係資料の現状
		▶ 討論者：松田利彦(国際日本文化研究センター) 鄭炳浩(高麗大学)

パネル14：近代満洲における技術導入と社会変容

時間	責任者	テーマ
14:00~ 16:00	上田貴子 (近畿大学)	「近代満洲」における医療・衛生管理技術の導入と社会変容 司会：上田貴子(近畿大学)
		・ 西澤泰彦(名古屋大学) 満鉄大連医院本館が持つ社会的意味
		・ 財吉拉胡(内蒙古民族大学) 巡回診療の地政学 — 近代日本が内モンゴル東部で実施した巡回診療を中心に
		・ 小都晶子(摂南大学) 「満洲国」の畜産政策：防疫を中心に
		・ 坂部晶子(名古屋大学) 帝国の周辺領域における少数民族の記憶の地層 — フルンボイル地域の近代から
		▶ 討論者：蘭信三(大和大学) サヴェリエフ・イゴリ(名古屋大学)

パネル15：シニア経済と高齢社会の対応(1)

時間	責任者	テーマ
14:00~ 16:00	宋浣範 (高麗大学)	シニア産業の交流 司会：李東祐(高麗大学)
		・ 都賢奎(高麗大学) シニア創業の現状と展望
		・ 彭希哲(復旦大学) 中国シルバー経済と高齢社会の対応
		・ 遊間和子(国際社会経済研究所) 日本におけるヘルスケア分野のDX
		・ 朴英蘭(江南大学) 韓国の高齢化産業とGerontechnology
		▶ 討論者：黄徳海(清華大学) 西下彰俊(東京経済大学) 朴昌東(高麗大学) 遊間和子(国際社会経済研究所)

パネル16：高麗大学グローバル日本研究院 社会災難安全研究センター

時間	責任者	テーマ
14:00~ 16:00	金暎根 (高麗大学)	「災害共存の時代」の相互協働と東アジア共同体へ 司会：金暎根(高麗大学)
		・ 金暎根(高麗大学) 〈レジリエンス〉という問いと災害研究10年 — 未災学のための試論
		・ 河村和徳・遠藤勇哉(東北大学) 復興五輪とALPS処理水 — 福島復興をめぐるメッセージフレームと国民意識
		・ 全成坤(翰林大学) 脆弱性(vulnerability)理論の誕生と災害
		▶ 討論者：金京姫(韓国外国語大学) 山泰幸(関西学院大学) 李權熙(韓国外国語大学)

パネル17：漢陽大学 日本学国際比較研究所

時間	責任者	テーマ
14:00~ 16:00	李康民 (漢陽大学)	日本古典文学の想像力 司会：李康民(漢陽大学)
		• 木場貴俊(京都先端科学大学) 江戸怪談の普遍と特殊
		• 金小英(釜山大学) 紫式部の想像力、「源氏物語」の構想力
		▶ 討論者：X. Jie Yang(カルガリー大学) 趙恩鶴(崇実大学)

パネル18：国立台中科技大学・日本研究センター

時間	責任者	テーマ
14:00~ 16:00	黎立仁 (国立台中科技大学)	アジアにおける日本企業の発展とビジネスモデル 司会：黎立仁(国立台中科技大学)
		• 吳嘉鎮(名城大学) 世界情勢の中の台湾半導体産業と日本半導体産業との連携について
		• 亀井大樹(同志社大学) 兼営織布企業の金巾製織会社と綿織物輸出市場との関係
		• 木村多嘉子(京都外国語大学) 長野県下伊那郡における満洲農業移民と養蚕農家との関係
		▶ 討論者：黎立仁(台中科技大学) 張銘今(国立台中科技大学) 曾耀鋒(国立台中科技大学)

パネル19：韓国外国語大学・統一研究院(沖縄と東アジアの平和)

時間	責任者	テーマ
14:00~ 16:00	李昌玟 (韓国外国語大学)	東アジアの平和と沖縄問題 司会：李昌玟(韓国外国語大学)
		• 上原こずえ(東京外国語大学) 変革する主体を求めて：戦後沖縄の民衆闘争の歴史的区分と変遷
		• 森啓輔(専修大学) 沖縄における基地問題をめぐる政治的機会構造の理論的考察 — 1990年代から現在までを評価するために
		• 大城章乃(フリードリヒ・アレクサンダー大学) 米軍占領期沖縄における沖縄人基地労働者：戦後復興を再考する
		▶ 討論者：岡坂健太郎(共同通信ソウル支局) 崔恩美(峨山政策研究院) 李奇泰(統一研究院)

パネル20：ソウル大日本研究所・大阪市立大人権問題研究所

時間	責任者	テーマ
14:00~ 16:00	金孝眞 (ソウル大学)	日本の「民主主義」を再考する 司会：金孝眞(ソウル大学)
		• 鄭知喜(ソウル大学) 戦後民主主義のポスト戦後の読解 — 文部省教科書『民主主義』と冷戦自由主義
		• 朴一(大阪市立大学) 在日コリアンからみた日本の民主主義
		• 吳承嬉(ソウル大学) 価値志向の日本外交と中国
		▶ 討論者：徐東周(ソウル大学) 古久保さくら(大阪市立大学)



パネル21：東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター

時間	責任者	テーマ
14:00~ 16:00	石田賢示 (東京大学)	COVID-19パンデミック下の日本社会の経験と社会科学的研究 司会：王帥(東京大学)
		<ul style="list-style-type: none"> <li>王帥(東京大学) 東アジアにおける研究発信拠点の構築 — 東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターの取り組み</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>石田賢示(東京大学) コロナ禍における社会的孤立 — 東大社研パネル調査(JLPS)のWEB調査の試みと分析</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>大崎裕子(東京大学) コロナ禍における中高生と保護者の社会意識 — 子どもの生活と学びに関する親子調査(JLSCP)から</li> </ul>
		▶ 討論者：竇心浩(上海外国語大学) 湯玲玲(シンガポール国立大学)

パネル22：翰林大学日本学研究所・人文韓国プラス支援事業

時間	責任者	テーマ
14:00~ 16:00	徐禎完 (翰林大学)	国民国家と歴史認識：その限界・解決の模索 司会：鄭美愛(世宗研究所)
		<ul style="list-style-type: none"> <li>楊子震(南臺科技大学) 日台関係のなかの朝鮮半島出身者</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>金炫我(翰林大学) 記憶と変化の錯綜する靖国神社の戦後</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>権妍李(翰林大学) 日韓の市民社会の成長と歴史認識問題</li> </ul>
		▶ 討論者：天江喜久(長榮大学) 今井勇(東京外国語大学) 木村幹(神戸大学)

パネル23：(次世代)アジアにおける人の移動を考える会

時間	責任者	テーマ
14:00~ 16:00	齋藤あおい (一橋大学)	COVID-19がもたらしたアジアにおける移動と労働への影響 司会：飯尾真貴子(一橋大学)
		<ul style="list-style-type: none"> <li>齋藤あおい(一橋大学) パンデミック下での中国都市における家事労働者たち</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>高橋加織(お茶の水女子大学) Covid-19が国際移住労働者に与えた影響 — マレーシアのホテル業を事例に</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>山崎哲(一橋大学) コロナ禍における中国帰国者介護施設</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>張雅晴(一橋大学) コロナ禍における台湾人労働者の不安定性の顕在化</li> </ul>
		▶ 討論者：飯尾真貴子(一橋大学) 齋藤あおい(一橋大学) 高橋加織(お茶の水女子大学) 山崎哲(一橋大学) 張雅晴(一橋大学)

パネル24：(次世代)徐承元教授研究室

時間	責任者	テーマ
14:00~ 16:00	許元寧 (高麗大学)	トランス-東アジア研究の模索 ：北東アジア-東南アジア連結性の現在と展望 司会：佐藤太久磨(漢陽大学)
		<ul style="list-style-type: none"> <li>許元寧(高麗大学) ODAからみた東南アジアと北東アジアの連結性 — 東南アジアODA投資の日韓比較を中心に</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>金承賢(ワシントン大学) 防衛空間の拡大：21世紀の日本の海洋戦略</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>蔡捷(高麗大学) 海洋を通じて見た東南アジアと東北アジアの連結性 — 南シナ海問題と中国海洋力強化への対応を中心に</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>李承煥(高麗大学) 東北アジア地政学の変化 — 韓国のTHAAD配置問題と地政学的影響を中心に</li> </ul>
		▶ 討論者：尹錫貞(韓国国立外交院) 朴敬珉(高麗大学)

■ 個人発表(5分科)

分科5: 東アジアにおける日本語研究の諸問題

司会：渡辺昭太(法政大学)

時間	部門	発表者	テーマ
14:00~ 14:30	次世代論文	汪聞君 (大阪大学)	動的な観点から見た後置文
14:30~ 15:00	次世代論文	郭帥 (上海外国語大学)	中国語の結果複合動詞と日本語の有対自他動詞との対照研究
15:00~ 15:30	個別論文	陳姿菁 (開南大学)	オンライン日本語授業の試み：航空日本語を中心に
15:30~ 16:00	個別論文	薛芸如 (元智大學)	翻訳者は本当に不要か：オンラインツールに出力された訳文の対照

分科6: 日本研究と日本語教育

司会：野田高広(啓明大学)

時間	部門	発表者	テーマ
14:00~ 14:30	次世代論文	邵雲彩 (広島大学)	日本語文ディクテーションの認知メカニズムに関する基礎研究 ：日本語学習者の作動記憶容量, 文の種類の見点から
14:30~ 15:00	個別論文	黄馨儀 (中国文化大学)	反転授業の導入による学生の自律学習及び協同学習への試み：「中級日本語」での実践を例に
15:00~ 15:30	個別論文	朴ジョンヨン (神田外語大学)	東京2020大会に向けた全国外大連合の取り組みの成果と課題

分科7: 「世界文学」の中の日本文学 2

司会：柳政勳(高麗大学)

時間	部門	発表者	テーマ
14:00~ 14:30	次世代論文	河盛皓 (高麗大学)	戦後児童文化における戦時下の機械兵器描写：小松崎茂の画業を中心に
14:30~ 15:00	次世代論文	孫于恵 (広島大学)	現代日本文学における〈悪女〉論について
15:00~ 15:30	個別論文	杉本章吾 (高麗大学)	エッセイ形式の震災マンガにおける「3. 11」表象の両義性

分科8: 「世界文学」の中の日本文学 3

司会：李相赫(高麗大学)

時間	部門	発表者	テーマ
14:00~ 14:30	次世代論文	王紫沁 (総合研究 大学院大学)	19世紀における長崎派南画家の中国画学習: 鉄翁の縮図を手がかりに
14:30~ 15:00	次世代論文	大橋利光 (東京大学)	植民地期朝鮮の料理書にみる伝統食概念の形成：方信榮『朝鮮料理製法』の改訂過程を例に
15:00~ 15:30	次世代論文	茶圓直人 (大阪大学)	撫でるしぐさの意味：民話導入部に注目して
15:30~ 16:00	個別論文	永原順子 (大阪大学)	『土佐日記』の異界観：天文気象に関する記述から

分科9: 東アジアにおける思想交流史

司会：石原和(立命館大学)

時間	部門	発表者	テーマ
14:00~ 14:30	次世代論文	姜希妍 (ソウル大学)	天心と湖南：近代期日本の中国絵画受容史
14:30~ 15:00	次世代論文	崔雪 (広島大学)	現代支那への注目：1920年代『改造』における中国イメージ
15:00~ 15:30	個別論文	田中美佳 (九州大学)	1920年代の朝鮮における青年読本と日本の出版界
15:30~ 16:00	個別論文	齊藤紅葉 (国際日本文化 研究センター)	19世紀の東アジア国際情勢の変動と公家の対外認識：明治維新の特徴と普遍性

● 休憩：16:00~16:30

**3部 16:30~18:00**

パネル25：高麗大学グローバル日本研究院

時間	責任者	テーマ
16:30~ 18:30 <sup>2)</sup>	金孝順 (高麗大学)	東アジアにおける植民地の文化政治と感染症の表象 司会：金泰暉(慶熙大学)
		<ul style="list-style-type: none"> <li>星名宏修(一橋大学) 帝国を移動する：青山純三とその軌跡</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>金孝順(高麗大学) 植民地時期朝鮮の日本語文学における結核表象</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>宋恵敬(高麗大学) 植民支配初期、在朝鮮日本人社会における花柳病認識に関する一考察</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>李貞和(高麗大学) 植民地期朝鮮でのハンセン病認識と報道様態</li> </ul>
▶ 討論者：李文茹(淡江大学) 松田利彦(国際日本文化研究センター) 金京里(建国大学)		

パネル26：シニア経済と高齢社会の対応(2)

時間	責任者	テーマ
16:30~ 18:30	宋浣範 (高麗大学)	高齢社会対策の交流 司会：庄英甫(清華大学)
		<ul style="list-style-type: none"> <li>王天夫(清華大学) 人口の高齢化と家族介護の挑戦</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>朴昌東(高麗大学) 2000年以降における高齢者に関する研究の動き分析</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>金楨根(江南大学) 文化的な価値観がGeron-Tech受容力に与える影響 — 韓国とアメリカの高齢層を中心に</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>何妨容(高麗大学) 高齢夫婦への生活支援の観点から見る日本の介護保険制度の限界</li> </ul>
▶ 討論者：吉田修(広島大学) 彭希哲(復旦大学) 西下彰俊(東京経済大学)		

2) 発表人数の関係上・パネル司会者の裁量で最大30分まで延長して運営

パネル27：高麗大学

時間	責任者	テーマ
16:30~ 18:00	曹英南 (高麗大学)	日本語学習者の「言いさし表現」の普遍性と個別性を考える 司会：中村有里(仁川大学)
		<ul style="list-style-type: none"> <li>迫田久美子(広島大学) 依頼のロールプレイに見られる「言いさし表現」の特徴 — 英・仏・西・中・韓・土の日本語学習者のデータに基づいて</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>永田良太(広島大学) 日中接触場面における「ケドの言いさし」の特徴 — ターン・テーキングとトピック展開に着目して</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>曹英南(高麗大学) Eメールに見られる「言いさし表現」の特徴 — 韓・中・英の日本語学習者と日本語母語話者のデータに基づいて</li> </ul>
		▶ 討論者：金志宣(梨花女子大学) 小松奈々(高麗大学) 小此木江利菜(高麗大学)

パネル28：中国文化大学日本語文学科・神戸市外国語大学

時間	責任者	テーマ
16:30~ 18:00	林孟蓉 (中国文化大学)	日本語における語彙の言語的特徴 ：コーパスと対照の視点から 司会：林孟蓉(中国文化大学)
		<ul style="list-style-type: none"> <li>岩男考哲(神戸市外国語大学) 日本のミステリー小説に見られる言語的特徴</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>蔡珮菁(中国文化大学) 漫画データベースにおける2字漢語名詞の語彙特徴 — 書き言葉との比較を通して</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>鍾季儒(中国文化大学) 「微解封」からみた台湾の中国語の造語力</li> </ul>
		▶ 討論者：林淑璋(元智大学) 陳順益(中国文化大学)

パネル29：戦後日本の市民運動と「朝鮮問題」

時間	責任者	テーマ
16:30~ 18:00	李英美 (立教大学)	1960年代後半の日本の市民運動のなかの「朝鮮問題」をめぐる理論と実践 司会：李美淑(立教大学)
		<ul style="list-style-type: none"> <li>山口祐香(九州大学) 市民運動としての古代史研究 — 「東アジアの古代史を考える市民の会」の実践から</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>李英美(立教大学) 日本の市民運動のなかの「朝鮮問題」 — 雑誌『朝鮮人』の刊行を中心に</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>潘炯尧(ハーバード大学) 左翼日本人法律家の在日人権論 — 「在日朝鮮人の人権を守る会」の法廷闘争を中心に</li> </ul>
		▶ 討論者：森類臣(摂南大学)

パネル30：嘉泉大学アジア文化研究所

時間	責任者	テーマ
16:30~ 18:00	任ダハム (嘉泉大学)	映像メディアと文化ナショナルリズム 司会：井口有子(仁荷大学)
		<ul style="list-style-type: none"> <li>金静希(嘉泉大学) アニメーションにおけるナショナリズム：〈鬼滅の刃〉を中心に</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>任ダハム(嘉泉大学) 『京城日報』の製作映画：〈死の輝き〉(1922)を中心に</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>梁仁實(岩手大学) 李学仁映画の東アジア連帯の可能性をめぐって — 「在日」自己表象の外延</li> </ul>
		▶ 討論者：趙柱喜(誠信女子大学) 李賢珍(高麗大学) 咸忠範(韓国映像大学)

パネル31：グローバル社会における疫病—儀礼と教育の影響

時間	責任者	テーマ
16:30~ 18:00	タマシ・ カルメン (兵庫県立大学)	コロナ禍における祭りと儀礼 司会：タマシ・カルメン(兵庫県立大学)
		<ul style="list-style-type: none"> <li>タマシ・カルメン(兵庫県立大学) コロナ時代の天神祭</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>田中キャサリン(兵庫県立大学) パンデミックにおける新機能アマビエ</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>荒川裕紀(明石工業高等専門学校) コロナ禍における都市祭礼の催行継続について — 西宮まつりと十日戎開門神事福男選びから</li> </ul>
		▶ 討論者：ドラガン・アンジェラ(「ディミトリエ・カンテミル」キリスト教大学)

パネル32：翰林大学日本学研究所 HK+事業団

時間	責任者	テーマ
16:30~ 18:00	徐禎完 (翰林大学)	1950~1951年刊行『日本及日本人』からみる「戦後」日本における帝国の欲望と葛藤 司会：林聖淑(翰林大学)
		<ul style="list-style-type: none"> <li>宋錫源(慶熙大学) 『日本及日本人』を通してみる1951年日本政治の自画像</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>石珠熙(翰林大学) 『日本及日本人』からみる戦後日本の「平和」と愛国</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>金雄基(翰林大学) 少年サトーハチローが出会った「保守」人脈の日常像</li> </ul>
		▶ 討論者：関根英行(嘉泉大学) 秋山肇(筑波大学)

パネル33：韓国・国立外交院日本研究センター

時間	責任者	テーマ
16:30~ 18:00	曹良鉉 (韓国国立 外交院)	米中競争時代のなかの韓国・日本外交 司会：曹良鉉(韓国国立外交院)
		・ 富樫あゆみ(東洋英和女学院大学) 米中対立下での日米韓、日韓安全保障協力のあり方
		・ 趙恩一(韓国国防研究院) 米中競争時代の韓日関係と韓米日協力
		▶ 討論者：林泉忠(武漢大学) 尹錫貞(韓国国立外交院)

パネル34：漢陽大学 日本学国際比較研究所 II

時間	責任者	テーマ
16:30~ 18:00	李康民 (漢陽大学)	日本古典文学の想像力II 司会：權桃楹(漢陽大学)
		・ 岳遠坤(北京大学) 秋成文学における宮木像の系譜
		・ 韓京子(青山学院大学) 浦島伝説の近世的変容：「日本意識」のあらわれ
		▶ 討論者：梁誠允(高麗大学) 李市俊(崇実大学)

パネル35：東京外国語大学

時間	責任者	テーマ
16:30~ 18:00	友常勉 (東京外国語 大学)	COVID-19と加速する危機・グローバル資本主義・デジタル・モノポリー ：マルクス『資本論』の読み直しにもとづく東アジアの地政学的分析の試み 司会：友常勉(東京外国語大学)
		・ 友常勉(東京外国語大学) 東アジアのグローバリゼーションと『資本論』：問題提起として
		・ 浅川雅己(札幌学院大学) 利子生み資本と現代資本主義
		・ 中村勝巳(中央大学)
		・ 崎山政毅(立命館大学)
		・ スカーレット・コーネリッセン(ステレンボッシュ大学)
▶ 討論者：崎山政毅(立命館大学) スカーレット・コーネリッセン(ステレンボッシュ大学)		

パネル36：ソウル大学日本研究所

時間	責任者	テーマ
16:30~ 18:00	趙寛子 (ソウル大学)	100歳時代・ベビーブーマー世代の孤立と社会参加 司会：趙寛子(ソウル大学)
		・ 大和三重(関西学院大学) QOLの視点から高齢者の地域生活を考える — 人生100年時代を迎えて
		・ 徐永娥(東亜日報) 取材の現場で見た韓国と日本の100歳時代
		▶ 討論者：山泰幸(関西学院大学) 朴承賢(啓明大学)

パネル37：ソウル大学国際学研究所

時間	責任者	テーマ
16:30~ 18:00	朴喆熙 (ソウル大学)	自民党一党優位再構築の光と影 司会：朴喆熙(ソウル大学)
		・ 具裕珍(東京大学) 自民党支持基盤としての保守市民社会：自民党と日本会議の関係について
		・ 孫哲衣(世宗大学) 政党システムの変化と自民一公明間選挙協力の変遷
		▶ 討論者：李奇泰(統一研究院) 金崇培(忠南大学) 前田健太郎(東京大学)



■ 個人発表(4分科)

分科10: 帝国日本の支配と植民地社会の変容

司会：李豪潤(ソウル基督大学)

時間	部門	発表者	テーマ
16:30~ 17:00	個別論文	清水唯一朗 (慶應義塾大学)	大正デモクラシーの制度論
17:00~ 17:30	個別論文	長沢一恵 (天理大学)	戦前期における日本~朝鮮半島を結ぶ航路形成：京都府・舞鶴港を中心に
17:30~ 18:00	個別論文	ソアレス モッタ フェリッペ アウ グスト (大阪大学)	〈日の丸の下で働きたい〉：戦前・終戦直後のブラジル日系社会の言論界における「大東亜共栄圏再移住論」の言説と南米永住論を中心に
18:00~ 18:30	個別論文	小林善帆 (立命館大学)	コッコジ(韓国いけ花)の成立：日韓文化交流の視点から

分科11: 戦争と日本文学

司会：杉本章吾(高麗大学)

時間	部門	発表者	テーマ
16:30~ 17:00	次世代論文	王晴 (一橋大学)	讃歌と異音：満洲国作家爵青の現代詩を中心に
17:00~ 17:30	個別論文	佐藤元紀 (千葉大学)	戦時下における抒情

分科12: 東アジアにおける政治と国際関係 1

司会：許元寧(高麗大学)

時間	部門	発表者	テーマ
16:30~ 17:00	次世代論文	徐博晨 (東京大学)	新型コロナウイルス対策の評価と影響：追跡能力不足と日本の政策選択
17:00~ 17:30	次世代論文	リョウ キンイ (東京外国語 大学)	大阪市の公害問題対策
17:30~ 18:00	次世代論文	青山俊之 (筑波大学)	自己責任ディスコースをめぐる政治的・文化的実践 記号イデオロギーに着目した言語人類学的分析
18:00~ 18:30	次世代論文	Ms. Ivan Kaye F. Bantigue (サントマス 大学)	2010年から2020年までの日フィリピン貿易のマクロ 評価

分科13: 東アジアにおける政治と国際関係 2

司会：吳承燾(ソウル大学日本研究所)

時間	部門	発表者	テーマ
16:30~ 17:00	次世代論文	渡邊啓太 (東京外国語 大学)	戦後日本における地域の軍事化と警察の社会史
17:00~ 17:30	次世代論文	中原雅人 (神戸大学)	沖縄への自衛隊移駐期における自衛隊支援活動に関する一考察：沖縄県防衛協会の設立を中心に
17:30~ 18:00	個別論文	楊雯婷 (国立政治大)	対米バンドワゴニング政策？日本の戦略選択に影響 を与える要因分析

11月28日(日)

時間	内容
10:00~12:00	JFラウンドテーブル：東アジアの日本研究：その研究・教育での連携の可能性を探る ▶登壇者 ・鄭炳浩(高麗大学 文科大学学長、韓国日本学会会長) ・周異夫(北京日本学研究中心主任) ・徐興慶(台湾-中国文化大学 学長) ・園田茂人(東京大学東洋文化研究所 教授) ※モデレーター
12:00~12:30	閉会式 司会：兪在眞(高麗大学 教授) ▶閉会の辞 ・蔡盛植(高麗大学 グローバル日本研究院 院長) ・加藤剛(日本国際交流基金 ソウル文化センター 所長) ▶次期協議会の主体側の挨拶
12:30~	運営委員会

[特別企画] 協議会ラウンドテーブル・JFラウンドテーブル

11月26日：ラウンドテーブル

グローバルな日本研究、どうなるべきか

11月28日：JFラウンドテーブル

東アジアの日本研究  
：その研究・教育での連携の可能性を探る



## 東南アジアにおける 日本研究

Karl Ian Uy Cheng Chua  
kchengchua@gmail.com

### Steering Committee

- Takashi Terada (Doshisha University)
- Thang Leng Leng (National University of Singapore)
- Hendrik Meyer-Ohle (National University of Singapore)
  
- Kitti Prasirtsuk (Thammasat University)
- Sirimonporn Suriyawongpaisal (Chulalongkorn University)
  
- Steering Committee
- Minh Hang Hoang (Vietnamese Academy of Social Sciences)<sup>2</sup>
- Phan Hai Linh (Vietnam National University – Hanoi)
  
- Ricardo Trota Jose (University of the Philippines - Diliman)\*
- Karl Ian Uy Cheng Chua (Ateneo de Manila University)<sup>2</sup>

(\*) 今年に退職 (2) 2代目

- Steering Committee
- Md. Nasrudin Md. Akhir (University of Malaya)\*
- Asmadi Bin Hassan (University of Malaya)<sup>2</sup>
  
- I Ketut Surajaya (University of Indonesia)
- Julian Aldrin Pasha (University of Indonesia)<sup>2</sup>

(\*) 今年に退職 (2) 2代目

### New Members

- Fadjar Ibnu Thufail (Indonesian Institute of Sciences) since 2019
- (National University of Laos) since 2019

### JSA-ASEANについて

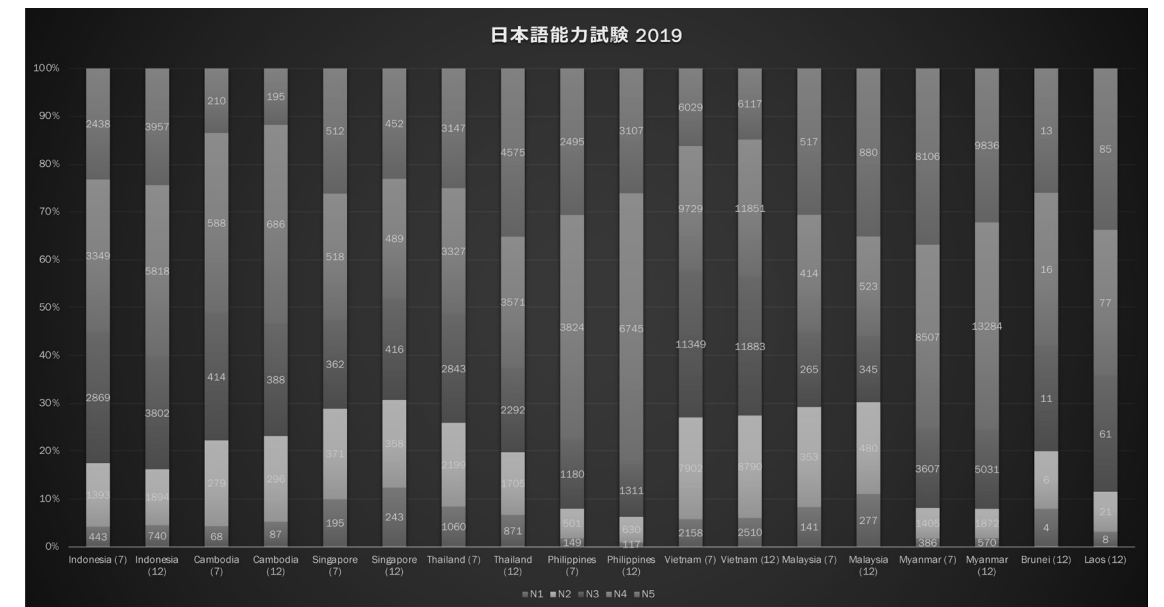
- 2005年に成立
- 会費がない: 東南アジアの多様な経済(+); 会員のアイデンティティ(-)
  
- ビエンナール国際学会: シンガポール(2006) ベトナム(2009)マレーシア(2012)タイ(2014) フィリピン (2016) インドネシア(2018)ラオス\*(2021)
- 参加費がない; バイリンガルで(英語・日本語)

### 多言語

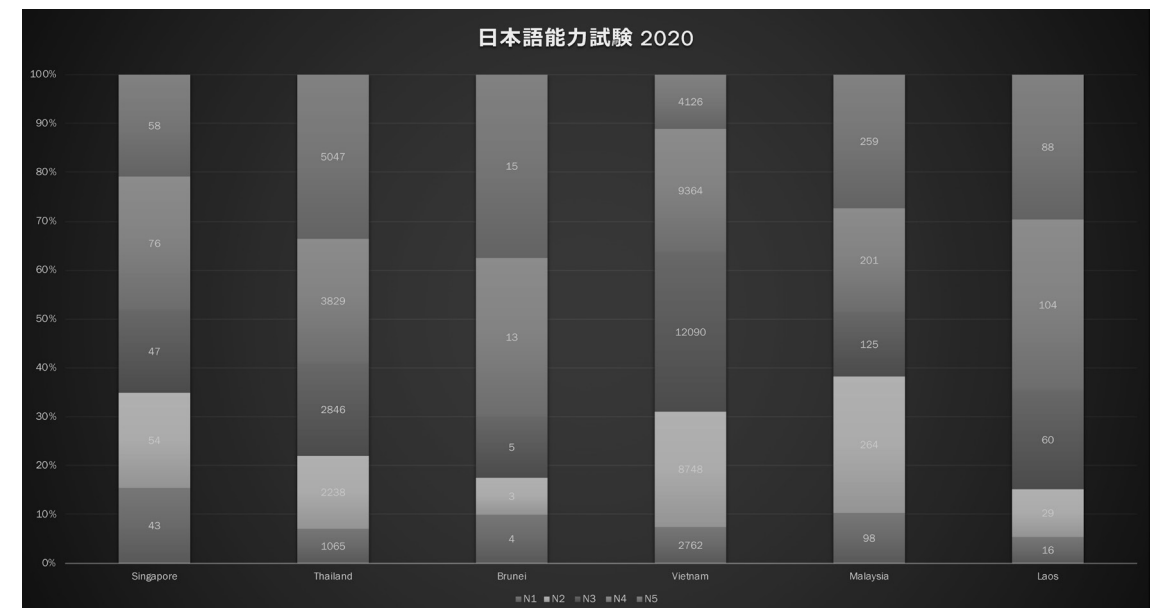
- Brunei: Malay, indigenous Austronesian languages
- Cambodia: Khmer, Vietnamese, Chamic languages
- East Timor: Tetun, Mambae, Makasae, Tukudede, Bunak, Galoli, Kemak, Fataluku, Baikeno, other Austronesian and Papuan languages
- Indonesia: Indonesian, Acehnese, Batak, Sundanese, Javanese, Sasak, Tetum, "Dayak"

languages, Minahasa, Toraja, Buginese, Halmahera, Ambonese, Ceramese, and many Papuan languages

- Laos: Lao, Hmong, Miao, Mien, Dao, Shan, and other Tibeto-Burman derived languages
- Malaysia: Malay, various indigenous languages (of the Orang Asli and indigenous peoples of Sabah and Sarawak)
- Myanmar: Burmese, Shan dialects, Karen dialects, Rakhine, Kachin, Chin, Mon, hilltribe languages
- Philippines: Filipino, English, Tagalog, Cebuano, Hiligaynon, Waray-Waray, Ilokano, Kapampangan, Pangasinan, Bicolano, Maranao, Maguindanao, Tausug, Kinaray-a, Chavacano (Spanish-based creole), other Philippine languages and dialects.
- Singapore: Malay, English, Standard Chinese, Tamil, various Chinese languages
- Thailand: Thai, Isan, Shan, Lue, Phutai, Khmer, Mon, Mein, Hmong, Karen, Malay
- Vietnam: Vietnamese, Tay, Muong, Khmer, Nung, Hmong, Tai Dam, Malay, French creole



<http://www.jlpt.jp/statistics/archive.html>



<http://www.jlpt.jp/statistics/archive.html>

## 英語能力

Singapore	611	Japan	487	Afghanistan	445
Philippines	562	Nepal	480	Cambodia	435
Malaysia	547	Pakistan	478	Uzbekistan	430
South Korea	545	Bangladesh	476	Thailand	419
Hong Kong, China	542	Vietnam	473	Kazakhstan	412
China	520	Sri Lanka	466	Myanmar	411
Macau, China	505	Indonesia	453	Kyrgyzstan	405
India	496	Mongolia	446	Tajikistan	381

<http://www.ef.com/epi/?mc=we>

## 修士論 博論 データベース

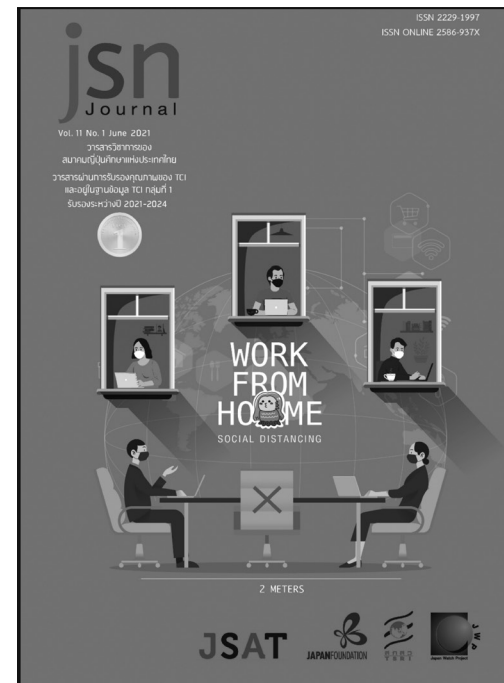
- National University of Singapore: <http://scholarbank.nus.edu.sg/> (英語, ダウンロード可)
- Vietnam Academy of Social Sciences: <http://en.vass.gov.vn/noidung/anpham/Pages/Default.aspx> (ベトナム語, ダウンロード可)
- Vietnam National University, Hanoi: <http://repository.vnu.edu.vn/> (ベトナム語, ダウンロード可)
- University of Malaya: <http://www.diglib.um.edu.my/umtheses/#sthash.ivTwEnTz.dpbs> (マレー語 / 英語, 検索可)
- Thammasat University: <http://library.tu.ac.th/> (タイ語, ダウンロード可)
- Chulalongkorn University: <https://library.car.chula.ac.th/> (タイ語, ダウンロード可)
- Ateneo de Manila University: <http://bit.ly/2s6mFOO> (英語, 検索可)
- De La Salle University: <http://lib1000.dlsu.edu.ph/> (英語, 検索可)
- University of the Philippines, Diliman: <http://ilib.upd.edu.ph/> (英語/フィリピン語, 検索可)
- University of Indonesia: <http://www.lib.ui.ac.id/#horizontalTab2> (インドネシア語, ダウンロード限)



*International Journal of East Asian Studies*  
Vol. 10, No. 1, 2021

Contents

1	Editorial Note: Special Issue on Covid-19 and Japan <i>Asmadi Hassan and Geetha Govindasamy</i>	1
2	Tokyo Gubernatorial Election During Pandemic: Democracy VS "Demo" Crazy <i>Asmadi Hassan and Muhammad Danial Azman</i>	3
3	Leadership in Time of Crisis: The Covid-19 Pandemic in Japan and Reflections for Malaysia <i>Muhammad Danial Azman and Asmadi Hassan</i>	19
4	COVID-19 Strengthens the Solidarity and Association of Southeast Asian Nations – Japan Cooperation <i>Mohd Ikbal Mohd Huda and Siti Noor Adillah Masrol</i>	44
5	The Disruption of the 1940 and 2020 Tokyo Olympics: Sports Diplomacy During War and Pandemic <i>Md Nasrudin Md Akhir, Geetha Govindasamy, and Rohayati Paidi</i>	61
6	COVID-19 Pandemic Management: Best Practices and Lessons From China, Japan and South Korea <i>Geetha Govindasamy, Md Nasrudin Md Akhir, and Rohayati Paidi</i>	82
7	Challenges and Opportunities in the Inbound Tourism of Japan After Disaster and Pandemic <i>Rohayati Paidi, Mohd Najmuddin Suki, Md Nasrudin Md Akhir, Geetha Govindasamy, and Siti Fatimah Abdul Alim</i>	99
8	Global Pandemic, Technology Booms and New Business Trends: The Case of Japan <i>Soo Kee Tan</i>	120
9	Coronavirus Impact on Online Purchases Behavior in Japan <i>Alias Abdullah, Mohd Sharizat Azhari, and Atini Aqilah Mohamad</i>	141
10	COVID-19 Implications on Small and Medium Enterprises (SMEs) in Japan <i>Alias Abdullah, Wee Bee Seng, Mohd Ikbal Mohd Huda, and Noor Azlina Musa</i>	157



jsn Journal 第 11 巻第 1 号 2021 年 6 月 25 日

สารบัญ	หน้า
บรรณาธิการแถลง	iv
บทความวิจัย	
ปัญหาและแนวทางการพัฒนาการศึกษาของนักศึกษาต่างชาติในศูนย์ นอร์มอล: กรณีศึกษาที่ศึกษาภาษาและวัฒนธรรมญี่ปุ่น มหาวิทยาลัยโอซาก้า <i>KATO Hitoshi &amp; FUJIBARA Manami</i>	2
บทความวิจัย	
The Development and Evaluation of a Self-efficacy Scale for Japanese Language Assistants: Targeting "NHONGO Partners" Dispatched to Thailand <i>FURUBEPFU Hiburu, OTA Yoshie, YAMASHITA Junko</i>	13
Cheap and Dispensable : Foreign Labor in Japan via the Technical Intern Training Program <i>Piyada Chonlavitorn</i>	33
การควบคุมเป็นทางเลือกในการจัดการความเสี่ยงสำหรับผู้ชายในญี่ปุ่น <i>ซังอิชิโร ฮะมา และ ฮิโรชิ โทโม</i>	50
การศึกษาคุณลักษณะนิคมในภาษาญี่ปุ่น: กรณีศึกษาที่นิคมนิคมในช่วงต้นปี พ.ศ. 2563 <i>ปรีชญารัตน์ สัตถะพงษ์วิบูลย์</i>	69
บทวิจารณ์หนังสือ	
บทวิจารณ์หนังสือ ตำรามาที่สอนกันในเรือสำราญญี่ปุ่น <i>เสียนันท์ กฤษดาธรรมะ</i>	84
บทวิจารณ์หนังสือ 24 ฝ่าวิกฤต <i>ปัทมาภรณ์ มหาวชิรัมย์</i>	89

<https://jsat.or.th/jsn-journals/>





**Kyoto Review of Southeast Asia**

HOME ISSUE 21 ISSUE 20 REVIEWS ARCHIVE Y.A.V. VIDEOS ABOUT US EDITORIAL COMMITTEE CONTACT

CENTER FOR SOUTHEAST ASIAN STUDIES, KYOTO UNIVERSITY

BAHASA INDONESIA	日本語	ภาษาไทย	TIẾNG VIỆT
Atas Nama Rakyat: Sihir dan Kekuatan misteri dalam Tata kelola Kesehatan di Thailand	国民の名において：タイにおけるヘルス・ガバナンスの魔術と謎	ในนามของประชาชน: โสียดศาสตร์กับปริศนาของการปกครองแนวสุขภาพในประเทศไทย	Nhân danh Nhân dân: Ma thuật và Bí ẩn của Quản trị Y tế ở Thái Lan
Wilayah dan Pemukiman: Pengabdian kerajaan, pengkulturan roh dan geobody (badan-bumi)	土地と王権：国王崇拜、種痘信仰と地理的身体	เจ้ากับความเป็นเจ้า: ความจงรักภักดี การนับถือ ศรัทธาและภูมิกาย	Đất đai và chủ quyền: Sùng kính Hoàng gia, thờ cúng thần linh và thực thể địa lý
"Raya Kita": Muslim Melayu di Selatan Thailand dan Sang Raja	"Raya Kita": タイ南部のマレー系ムスリムと国王	"ราชา ของเรา" มลายูมุสลิมในภาคใต้ของประเทศไทยกับพระมหากษัตริย์	"Raya Kita": Người Hồi giáo Malay ở Nam Thái Lan và Đức Vua
Natal yang muram: Doktrin Katolik di Thailand setelah era Raja Bhumibol	クリスマスの陰影：プミポン亡き後のタイにおけるカトリック信仰	พิธีไว้อาลัยในวันคริสต์มาส: ศาสนาคริสต์นิกายโรมันคาทอลิกในประเทศไทยหลัง ส. 9	Một Noel tang tóc: Kito giáo ở Thái Lan hậu Bhumibol
Berkabung yang Baik dan Bersih di Bumi Thailand yang Kosmopolitan	タイのコスモポリタンな地域における上等で清潔な葬儀	การไว้อาลัยประเพณีและวิสัยทัศน์ในการวางสวดแบบไทย	Đức hạnh, tang lễ sạch ở một Thái Lan mang tính thế giới

## 「グローバルな日本研究、どうなるべきか」



**Dr Rowena Ward**  
ロウィーナ・ウォード  
roward@uow.edu.au



## パンデミックの不自由 と 日本語・日本研究

### JSAAの役員

会長(2021-2023): Associate Professor David Chapman  
University of Queensland  
David.chapman@uq.edu.au

書記 Dr Satoshi Nambu  
Monash University  
Satoshi.Nambu@monash.edu

Global Network for Japanese Language Education (GN) 日本語教育グローバル・ネットワークのリエゾンA/Professor Ikuko Nakane (inakane@unimelb.edu.au); Dr Emi Otsuji (emi.otsuji@uts.edu.au)  
<http://www.nkg.or.jp/kenkyusha/network>  
<http://gnforjle.wiki.fc2.com/>

## オーストラリアにおける日本語および日本研究の現状

- ▶ 日本語を教えている大学数:26
- ▶ 学生数:11,353 (専攻や副専攻を含む)(Japan Foundation 2020)
- ▶ 問題点:コロナウイルスのため日本語プログラムを閉鎖した大学が出てきた (e.g. Swinburne University of Technology)
  - ▶ 学費を増やす政策(Jobs Ready Package)
  - ▶ 教員を減らしている傾向
  - ▶ STEM(科学、テクノロジー、工学と数学に力を入れている)

## 学会

- ▶ 2年に1回(次回は2023年にシドニーで開催)
- ▶ 発表は日本語でも英語でも構わない
- ▶ JSAAの学会が開催されない年にはASAA(オーストラリアのアジア研究学会がある:2022年度はメルボルンにあるモナシュ大学で行う。ハイブリッド形式)

ウェブサイト:

<https://monasharts.cventevents.com/event/e7785594-d756-45a9-bdea-d9f45ec88bac/summary>



学術誌(英語のみ)

Taylor & Francis出版

年に3回発行

査読付き

## グローバルなネットワークを構築する提案

小規模なワークショップを開催

- ▶ 学問分野別によるワークショップ(オンラインかハイブリッド形式)
- ▶ 大学院生の支援

## 参考資料と出版物

Japan Foundation, 2020. Survey Report on *Japanese Language Education Abroad 2018*, available online at: <https://www.jpf.go.jp/e/project/japanese/survey/result/> (accessed 20/10/21).

Hayes, C., I. Nakane, N. Fukui, M. Nagami, M. Ogino & E. Otsuji. 2021. 'Are 'Advanced' Japanese Language Programs sustainable? A look at Australia, New Zealand and Singapore' available online at: <https://melbourneasiareview.edu.au/are-advanced-japanese-language-programs-sustainable/> (accessed 18/10/21).

## 出版物

ANJel (法学関係のポッドキャスト)Japanese Law in Context Podcast Series [https://www.youtube.com/playlist?list=PLO4EFZ7-JT3a-gXuIV3Xp4qy7\\_X7qPJrs](https://www.youtube.com/playlist?list=PLO4EFZ7-JT3a-gXuIV3Xp4qy7_X7qPJrs)

Clark, Laura Emily and Carol Hayes (Forthcoming), *Japanese Studies in Australia – Japanese Studies Association Report* (JSAA), Japan Foundation.

Suter, R. (2021). 'The current state of Japanese Studies in Australia in 2020'. *Asian Currents* available online at: <https://asaa.asn.au/author/rebecca-sutersydney-edu-au/> (accessed 19/10/21)

# グローバルな日本研究、どうなるべきか： 欧州における日本研究のグローバルな日本研 究としての可能性

Andrej BEKEŠ (アンドレイ・ベケシュ)  
EAJS直前会長、リュブリャナ大学名誉教授

流れ：

0. はじめに
  - 0.1 東アジアの日本研究をめぐる個人的感想
  - 0.2 グローバルというキーワード
1. 欧州\*における日本語教育・日本研究の輪郭
  - 1.1 世界の中の欧州における日本研究・日本語教育
  - 1.2 欧州の日本語教育状況の詳細
  - 1.3 欧州における日本研究の状況
2. 地域内のネットワーキング：日本語教育
3. 地域内のネットワーキング：日本研究
4. 日本研究のグローバルなネットワークに向けて
5. おわりに

## 0. はじめに

### 0.1 東アジアの日本研究をめぐる個人的感想

- ・ 2003年 韓国日本学会 (Kaja) 国際大会に参加する機会  
日本語研究：  
コーパス研究において、凄まじい発展  
韓国中国合同プロジェクト  
日・韓・中パラレルコーパス  
日本語古典原文参照可能コーパス
- ・ 2011年 北京人民大学  
「国際提携と日本学研究」東アジア日本語文学文化国際シンポジウム  
日本文学関連の諸発表：印象的
- ・ 2016 KAJA ソウル市聖心大学にて スロベニアの日本研究を紹介機会をいただいた

### 0.2 グローバルというキーワード

- ・ 英 globalization (直訳=地球化)、仏 mondialisation (直訳=世界化)

- > マイナスの側面 起源：15世紀以降の帝国主義
- > プラスの側面 地球規模の交流、協力の可能性

==> 現在でもアンビグアス

マイナスの側面：様々な対応、最近目立つ閉鎖的ナショナリズムの事例

- > 日本の初期のコロナ・エピデミック対応：  
→ 条件反射的に 在留資格者を含む外国人全面的入国禁止令 (OECDで唯一)

・ プラスの側面：

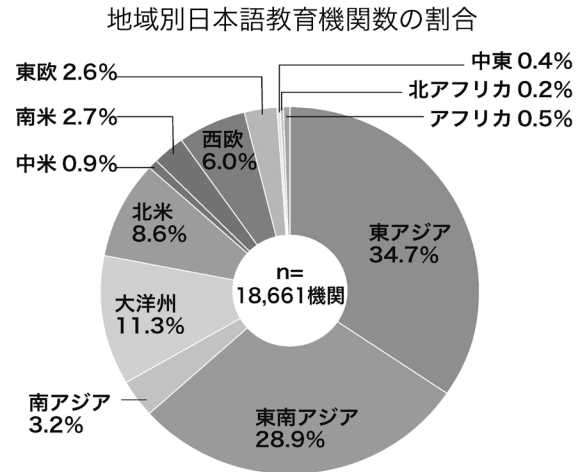
- > 日本研究におけるグローバルな視点 (問題意識共有) のポテンシャル

- > 日本における様々な動向を地域的、  
またはグローバルな文脈で理解しようとする必要性

1. 欧州\*における日本語教育・日本研究の輪郭

1.1 世界の中の欧州における日本研究・日本語教育

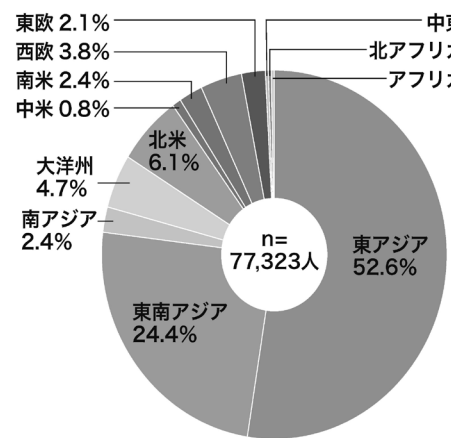
(<https://www.jpff.go.jp/e/project/japanese/survey/result/survey18.html>による) (トルコを含まない!)



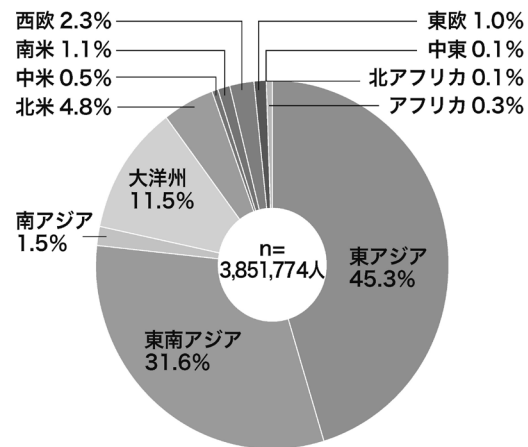
\*国際交流基金の調査データの揺れ:

トルコ、旧ソ連中央アジア諸国が含まれたり、含まれなかったりする

地域別日本語教師数の割合



地域別日本語学習者数の割合



1.2 欧州の日本語教育状況の詳細

・ご参考まで：欧州の48カ国全体の日本語教育状況の詳細

国・地域	機関数	教師数	学習者数	学習者/10万	教育段階の構成(学習者数)					学校教育以外	人口
					初等	中等	高等	高等/10万人	高等/全体数		
フランス	229	763	24150	37.6	175	5634	12321	19.16	0.51	6020	64300821
イギリス	288	646	20040	31.6	3878	4494	7678	12.11	0.38	3990	63379787
ドイツ	157	473	15465	19.3	18	1736	7043	8.78	0.46	6668	80219695
ロシア	169	633	11764	8.2	1059	3257	3497	2.44	0.30	3951	143436145
スペイン	141	325	8495	18.1	5	36	1743	3.72	0.21	6711	46815915
イタリア	62	235	7831	13.2	0	706	5639	9.49	0.72	1486	59433744
ポーランド	48	200	4483	11.8	0	308	2364	6.21	0.53	1811	38044565
トルクメニスタン	9	35	3259	72.7	0	1590	1669	37.23	0.51	0	4483251
スイス	72	194	3008	37.4	4	120	676	8.41	0.22	2208	8035391
アイルランド	44	67	2803	58.9	1	2194	503	10.56	0.18	105	4761865
ウズベキスタン	15	85	2288	11.5	10	182	868	4.38	0.38	1228	19810077
ウクライナ	20	97	2174	4.5	209	465	809	1.68	0.37	691	48240902
ハンガリー	39	95	1906	19.2	139	328	949	9.55	0.50	490	9937628
スウェーデン	29	57	1769	18.7	55	353	1186	12.51	0.67	175	9482855
キルギス	19	47	1606	31.4	503	410	388	7.60	0.24	305	5107640
オランダ	16	40	1496	9	0	0	1079	6.48	0.72	417	16655799
ルーマニア	14	87	1389	6.9	25	50	585	2.92	0.42	729	20039141
ブルガリア	8	40	1347	18.3	400	539	142	1.93	0.11	266	7364570
チェコ共和国	21	73	1246	11.9	0	51	651	6.24	0.52	544	10436560
ベルギー	5	20	960	8.7	0	0	353	3.21	0.37	607	11006638
オーストラリア	14	28	800	9.5	0	41	632	7.52	0.79	127	8401940
セルビア	23	35	797	11.1	167	171	378	5.26	0.47	81	7186862
デンマーク	15	23	751	13.5	0	187	174	3.13	0.23	390	5560628
ラトビア	2	4	697	33.7	163	405	129	6.23	0.19	0	2070371
ポルトガル	14	28	682	6.6	0	0	185	1.80	0.27	497	10282306
ノルウェー	9	17	640	12.9	0	210	389	7.81	0.61	41	4979955
ギリシャ	11	29	608	5.6	0	0	0	0.00	0.00	608	10816286
カザフスタン	10	35	451	2.8	0	48	149	0.93	0.33	254	16009597
ベラルーシ	9	27	415	4.4	0	0	136	1.43	0.33	279	9503807
エストニア	14	25	390	30.1	0	120	129	9.97	0.33	141	1294455
ジョージア	6	18	385	10.4	0	0	111	2.99	0.29	274	3713804
リトアニア	11	17	373	12.3	10	112	167	5.49	0.45	84	3043429
スロベニア	6	19	312	15.1	0	10	145	7.03	0.46	157	2062874
フィンランド	6	11	284	5.3	0	0	158	2.94	0.56	126	5375276
スロバキア	8	16	259	4.8	0	0	46	0.85	0.18	213	5397036
アゼルバイジャン	5	12	255	2.9	46	50	95	1.06	0.37	64	8922447
ルクセンブルク	6	6	218	42.5	0	160	0	0.00	0.00	58	512353
アルメニア	6	21	217	7.6	9	43	45	1.57	0.21	120	2871771
アルバニア	1	1	200	7.1	0	0	200	7.14	1.00	0	2800138
クロアチア	7	19	199	4.6	7	0	45	1.05	0.23	147	4284889
タジキスタン	2	4	186	2.5	0	0	186	2.46	1.00	0	7564502
モルドバ	1	3	115	4.1	0	0	0	0.00	0.00	115	2805194
アイスランド	4	5	99	31.4	0	53	41	12.99	0.41	5	315556
ボスニア・ヘルツェゴビナ	1	1	65	1.8	0	0	0	0.00	0.00	65	3531159
北マケドニア	2	2	49	2.4	0	0	30	1.48	0.61	19	2022547
マルタ	1	2	15	3.6	0	0	0	0.00	0.00	15	417432
モンテネグロ	1	1	9	1.5	0	0	0	0.00	0.00	9	620029
モナコ	0	0	0	0	0	0	0	0.00	0.00	0	38000
欧州全体	33.3	4621.0	126950.0	15.4	6883.0	24063.0	53713.0	5.54	0.36	42291.0	803391632.0



・ご参考まで：欧州48カ国中の上位12カ国と東アジア各国の比較

(西欧  )

国・地域	機関数	教師数	学習者数	学習者/10万	教育段階の構成(学習者数)						学校教育以外	人口
					初等	中等	高等	高等/10万人	高等/全体数	人口		
フランス	229	763	24150	37.6	175	5634	12321	19.16	0.51	6020	64300821	
イギリス	288	646	20040	31.6	3878	4494	7678	12.11	0.38	3990	63379787	
ドイツ	157	473	15465	19.3	18	1736	7043	8.78	0.46	6668	80219695	
ロシア	169	633	11764	8.2	1059	3257	3497	2.44	0.30	3951	143436145	
スペイン	141	325	8495	18.1	5	36	1743	3.72	0.21	6711	46815915	
イタリア	62	235	7831	13.2	0	706	5639	9.49	0.72	1486	59433744	
ポーランド	48	200	4483	11.8	0	308	2364	6.21	0.53	1811	38044565	
トルクメニスタン	9	35	3259	72.7	0	1590	1669	37.23	0.51	0	4483251	
スイス	72	194	3008	37.4	4	120	676	8.41	0.22	2208	8035391	
アイルランド	44	67	2803	58.9	1	2194	503	10.56	0.18	105	4761865	
ウズベキスタン	15	85	2288	11.5	10	182	868	4.38	0.38	1228	19810077	
ウクライナ	20	97	2174	4.5	209	465	809	1.68	0.37	691	48240902	

国・地域	機関数	教師数	学習者数	学習者/10万	教育段階の構成(学習者数)						学校教育以外	人口
					初等	中等	高等	高等/10万人	高等/全体数	人口		
中国	2435	20220	1004625	75.0	3892	90109	575455	42.95	0.57	335169	1339724852	
韓国	2998	15345	531511	1040.8	480	411255	39774	77.88	0.07	80002	51069375	
台湾	846	4106	170159	721.4	2574	54551	70433	298.58	0.41	42601	23588932	
香港	70	575	24558	334.7	927	2031	5694	77.61	0.23	15906	7336585	
モンゴル	128	363	11755	444.1	2755	3845	2738	103.43	0.23	2417	2647199	
マカオ	6	63	1502	240.1	0	0	658	105.17	0.44	844	625674	

・欧州全体と東アジア全体における日本語教育状況の比較

国・地域	機関数	教師数	学習者数	学習者/10万	教育段階の構成(学習者数)						学校教育以外	人口
					初等	中等	高等	高等/10万人	高等/全体数	人口		
欧州全体	1600	4621	12695	15.4	6883	24063	53713	5.54	0.36	42291	803,391,632	
東アジア全体	6483	40672	1744110	122.4	10628	561791	694752	48.75	0.40	476939	1,424,992,617	

-> 欧州対東アジア

欧州：東アジアの

- 人口比: 0.57 (6割)
- 学習者比: 0.07 (1割弱)
- 10万人あたりの学習者比: 0.13(1割強)
- 10万人あたりの高等教育での学習者比: 0.11(1割強)

違いの背景：日本との関わり具合が異なっている

ご参考まで：貿易相手国上位10カ国(輸出入総額)

日本との貿易高 (2019)  
EU 対 東アジア：  
187.000億円 572.000億円

EU：東アジアの1/3

地域等	金額(億円)	割合(%)
アジア	787,398	50.6%
ASEAN	233,349	15.0%
EU	186,775	12.0%
中国+香港	370,261	23.8%

年	2019年
総額	1,555,312億円
1	中国 331,357億円 (21.3%)
2	米国 238,947億円 (15.4%)
3	韓国 82,709億円 (5.3%)
4	台湾 76,162億円 (4.9%)
5	オーストラリア 65,374億円 (4.2%)
6	タイ 60,557億円 (3.9%)
7	ドイツ 49,277億円 (3.2%)
8	ベトナム 42,479億円 (2.7%)
9	香港 38,905億円 (2.5%)
10	アラブ首長国連邦 36,382億円 (2.3%)

[www.customs.go.jp/toukei/sui/html/data/y3.pdf](http://www.customs.go.jp/toukei/sui/html/data/y3.pdf)

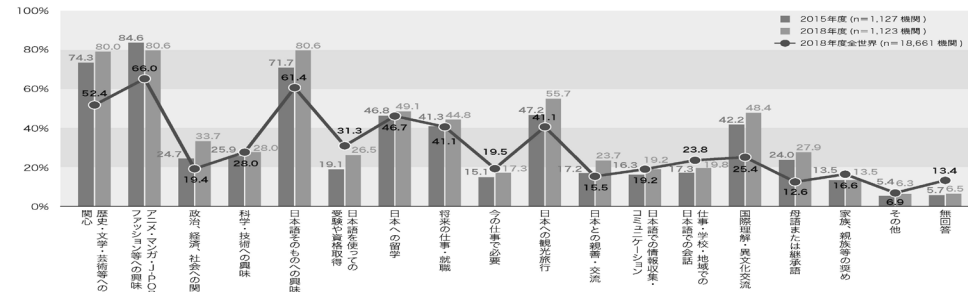
・ご参考まで：地域別日本語教師数・母語教師数

地域	教師(人)	学習者(人)	教師1人あたりの学習者(人)	日本語母語教師(人)	日本語母語教師(%)
東アジア	40,672	1,744,110	42.9	4,582	11.3
東南アジア	18,845	1,215,835	64.5	2,917	15.5
南アジア	1,820	57,356	31.5	359	19.7
大洋州	3,663	443,215	121.0	1,086	29.6
北米	4,683	186,394	39.8	3,623	77.4
中米	642	17,367	27.1	253	39.4
南米	1,838	42,226	23.0	629	34.2
西欧	2,969	90,114	30.4	2,247	75.7
東欧	1,652	36,836	22.3	365	22.1
中東	176	4,948	28.1	94	53.4
北アフリカ	147	2,569	17.5	50	34.0
アフリカ	216	10,804	50.0	47	21.8
全世界	77,323	3,851,774	49.8	16,252	21.0

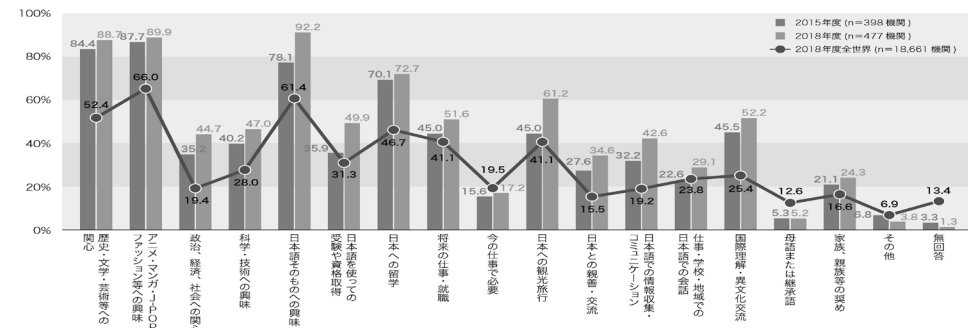


・欧州における日本語学習者の動機付け → 歴史・文化・アニメ・ファッション (世界的平均と同様)

西  
欧



東  
欧



### 1.3 欧州における日本研究の状況

・日本研究機関、日本研究専門家

Japanese Studies in Europe pt. I, pt. II, Japan Foundation 2008を参照

日本研究専門家(教員、研究者): ~1000 (2008現在)

日本研究機関\*: ~500 (2008現在)

\*: 一つの大学に、学部、センター、図書館等という、日本研究が行われているいくつかのサブ機関がある場合が多い。

> - 日本研究が行われている機関の種類:

科学(芸術)アカデミー  
国立図書館、地域図書館、各種研究センター等

- 研究と教育機関: 大学、大学院大学

> もう一つの評価:

EAJS2021国際大会の発表者出身機関: 123

大学 102  
科学アカデミー 2  
研究機関 18

(過少評価: 約1/3の機関からの発表者はいない)

### 2. 地域内のネットワーキング: 日本語教育

・三つのタイプ: (i) 各国の日本語教師会

フランス、英国、ドイツ、ロシア、イタリア、…(スロベニア等の小国を除く)

(ii) ヨーロッパ日本語教師会 (AJE)

(iii) 「桜ネットワーク」

・AJE: ヨーロッパ日本語教師会 (Association of Japanese Language Teachers in Europe) 2009~  
<https://www.eaje.eu/>

Albania, Andorra, Armenia, Austria, Azerbaijan, Azores	Latvia, Liechtenstein, Lithuania, Luxembourg
Balearic Islands, Belarus, Belgium, Bosnia Herzegovina, Bulgaria	Macedonia, Madeira, Malta, Moldova, Monaco, Montenegro
Canary Islands, Corsica, Croatia, Cyprus, Czech Republic	Netherlands, Norway
Denmark	Poland, Portugal
Estonia	Romania, Russia
Faroe Islands, Finland, France	San Marino, Serbia, Slovakia, Slovenia, Spain, Sweden, Switzerland
Georgia, Germany, Gibraltar, Greece, Greenland	Tajikistan, Turkey, Turkmenistan
Hungary	Ukraine, United Kingdom, Uzbekistan
Iceland, Irish Republic, Italy	Vatican City State
Kazakhstan, Kosovo, Kyrgyzstan	

・国際交流基金の「桜ネットワーク」

> 国際交流基金が運営

> 日本語教育が行われている48カ国中の「桜ネットワーク」に加盟した機関がある欧州32カ国:

国・地域		国・地域	
Iceland	アイスランド	Czech Republic	チェコ共和国
Ireland	アイルランド	Denmark	デンマーク
U.K.	イギリス	Germany	ドイツ
Italy	イタリア	Hungary	ハンガリー
Ukraine	ウクライナ	Finland	フィンランド
Estonia	エストニア	France	フランス
Austria	オーストリア	Bulgaria	ブルガリア
Netherlands	オランダ	Belarus	ベラルーシ
Greek	ギリシャ語	Belgium	ベルギー
Croatia	クロアチア	Poland	ポーランド
Switzerland	スイス	Bosnia and Herzegovina	ボスニア・ヘルツェゴビナ
Sweden	スウェーデン	Portugal	ポルトガル
Spain	スペイン	Latvia	ラトビア
Slovakia	スロバキア	Lithuania	リトアニア
Slovenia	スロベニア	Romania	ルーマニア
Serbia	セルビア	Russia	ロシア

### 3. 地域内のネットワーキング：日本研究

#### ・三つのレベルおよびタイプ

(i) 各国国内の日本研究のまとめ役：各国の日本研究関連の学会・日本語教育関連の学会／教師会  
フランス、ドイツ、イギリス、ロシア、イタリア、…（スロベニアのような小国を除く）

#### (ii) 欧州規模の専門家組織

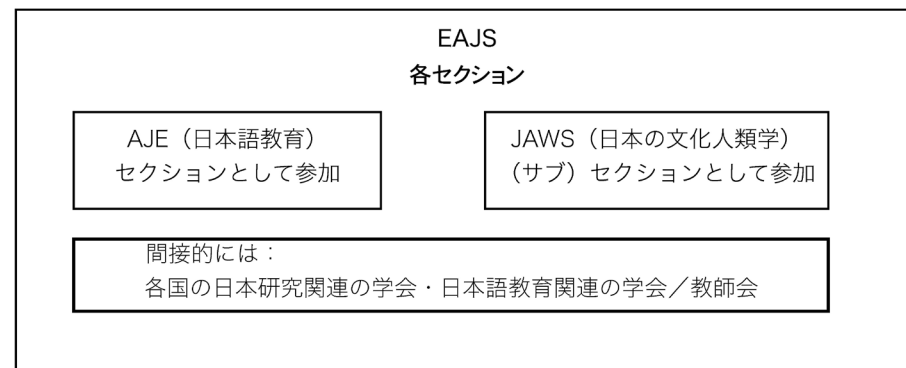
- ・ AJE ヨーロッパ日本語教師会 (Association of Japanese Language Teachers in Europe)  
<https://www.eaje.eu/>
- ・ JAWS Japan Anthropology Workshop (日本文化人類学を中心とする学会に相当する活動)  
<https://www.japananthropologyworkshop.org/>

#### (iii) 欧州規模の日本研究全体のまとめ役：

EAJS ヨーロッパ日本研究協会 (European Association for Japanese Studies)  
一時的URL <https://www.geschkult.fu-berlin.de/e/oas/japanologie/institut/projekte/EAJS/index.html>

- ・ 1973設立 事務局 ベルリン自由大学 (ドイツ)
- ・ 会長 Verena Blechinger Talcott ベルリン自由大学教授 (任期 2020~23)

#### ・ EAJSと姉妹組織によるEAJS国際大会の共同運営



#### ・ EAJS: 多様な中身

広義での日本研究全体をカバー

> 第16回EAJS国際大会 (2021年)

> 発表者数：819

> 14のセッション

Anthropology and Sociology	人類学と社会学
Economics, Business and Political Economy	経済学、ビジネスおよび政治経済学
History	歴史
Intellectual History and Philosophy	思想史と哲学
Japanese Language Teaching (AJE)	日本語教育 (AJE)
Language and Linguistics	言語と言語学
Media Studies	メディア研究
Modern Literature	現代文学
Performing Arts	近代以前の文学
Politics and International Relations	舞台芸術
Pre-modern Literature	政治と国際関係
Religion and Religious Thought	宗教と宗教思想
Urban, Regional and Environmental Studies	都市、地域、環境研究
Visual Arts	視覚芸術

#### ・ EAJSの活動内容

##### ・ 国際学術大会

- > EAJS国際大会  
開催：原則として3年ごと
- > EAJS日本大会  
開催：原則として3年ごと、EAJS国際大会の前の年

##### ・ 若手の日本研究者の育成

- > EAJS Workshop for Doctoral Students (EAJS PhD ワークショップ)
- > EAJS Publication Workshop (EAJS 出版ワークショップ)
- > 東芝国際交流財団 (TIFO) フェローシップ (欧州分) を運営
  - TIFO フェロー選抜
  - TIFO フェロー同窓会 ネットワーク

##### ・ ただし、学会誌は発行しない

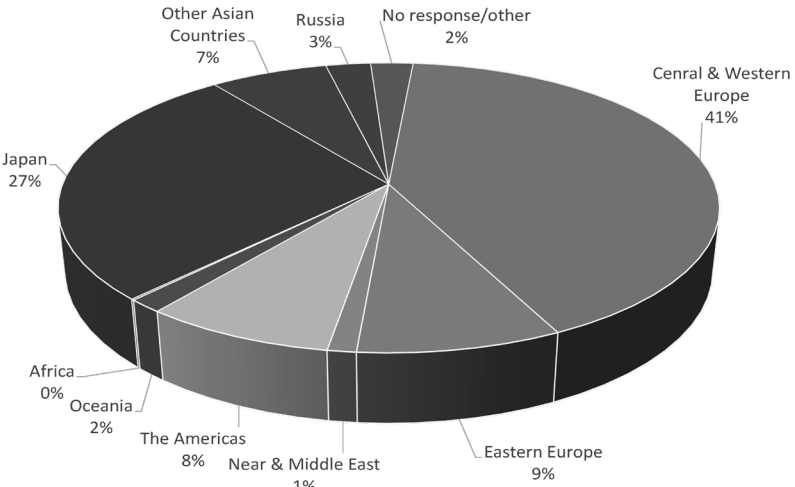
理由：カバーされている分野の幅  
国際学術雑誌の評価：狭い分野への焦点が重視されている

ご参考まで：設立以来のEAJS国際大会一覧

開催年	開催地	発表数
2021	ONLINE (次回は2023年)	819
2017	Lisbon / Portugal	
2014	Ljubljana / Slovenia	
2011	Tallinn / Estonia	
2008	Lecce / Italy	
2005	Vienna / Austria	
2003	Warsaw / Poland	
2000	Lahti / Finland	
1997	Budapest / Hungary	
1994	Copenhagen / Denmark	
1991	Berlin / Germany	
1988	Durham / UK	
1985	Paris / France	
1982	The Hague / Netherlands	
1979	Florence / Italy	
1976	Zurich / Switzerland	
1973	Oxford, London / UK	
<b>EAJS日本大会</b>		
2019	筑波大学	
2016	神戸大学	
2013	京都大学	

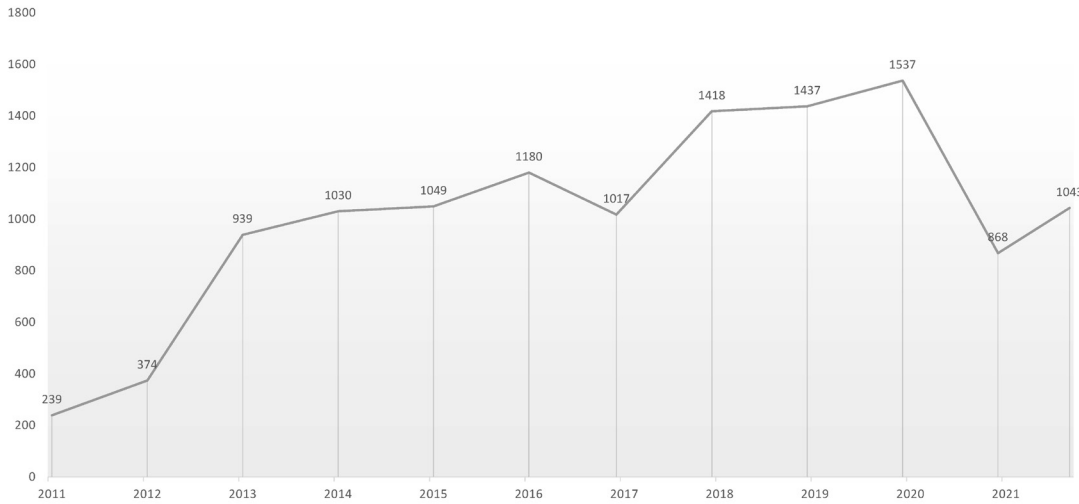
・EAJS：国際性豊かな会員構成

EAJS Membership by World Region as of March 2020



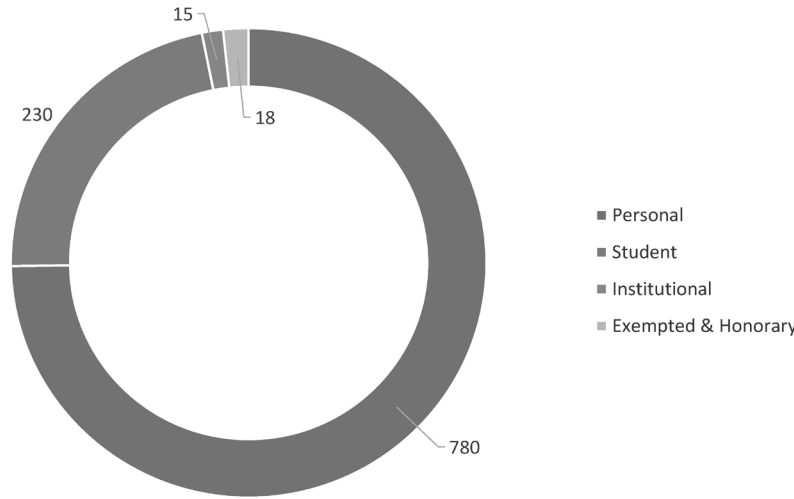
・EAJS：会員の推移

EAJS membership development 2011-2021 (as of Aug 2021)



・EAJS：会員の種類

EAJS members by membership type (as of August 2021)



#### 4. 日本研究のグローバルなネットワークに向けて

##### ・日本研究のグローバルなネットワークの必要性

- 日本研究の文脈
- 日本研究への多眼的アプローチ

==> 必要：支配ではなく協力に基づくグローバルな視点

##### ・いくつかのステップが必要：

###### (i) 情報共有：

- 各地域的組織との情報共有のメカニズムの確立
- 様々なイベントの案内の体系的に共有
- 会員の出版物の案内を体系的に共有

###### (ii) 各地域的組織が合同で活動する可能性を追求：

- EAJSの経験をいかすことは可能性
- EAJS日本大会：一つの合同イベントの可能なモデルの可能性は？
- 規模は大きくならない方がいい（数百名程度）

###### (iii) 人的交流

#### 5. おわりに

##### ・欧州と東アジアにおける日本研究・日本語教育の比較：

- 規模： 欧州、東アジアの約1/10  
人口、経済関係の密度、地理的条件が要因であろう
- 組織： 欧州内、各国レベルの組織と地域全体の組織（EAJS, AJE, JAWS）
- EAJS： 欧州での重要なまとめ役であるながら、地域を超えているところがある

##### ・グローバルな日本研究

- 高い重要性
- 実現：三つのステップ 情報共有、合同活動、人的交流

## トランス・リージョナルであること、 デジタル時代に向き合うこと

日比 嘉高 HIBI Yoshitaka

東アジアと同時代日本語文学フォーラム

(名古屋大学 hibi@nagoya-u.jp)

### 1. はじめに

(ア) 自己紹介

(イ) この報告の概要——日本在住の日本文学研究者の視角から

### 2. 日本における日本関連「教育」および「研究」の主な現状および診断

(ア) 教育

① 〈文学部縮小廃止論〉以後

- i. 学生の関心はさほど変わらず
- ii. 初等中等教育における学習指導要領の実学シフト

② 日本人大学院生の減少と留学生「依存」

(イ) 研究

① 日本文学研究系学会の課題——大学院生の減少。修了した留学生をどう学会に呼び戻すか

② ポップカルチャーとアカデミアの間柄。日本の大学組織の硬直性。

### 3. 日本研究のグローバルなネットワークを構築するための歩みと提言

(ア) 「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」の紹介、それに関わってきた経験

(イ) 「つなぐ」技術も人も機会もある。では「隔てる」ものは何か？

① つなぐ——研究対象、学知の枠組み(理論、資料、研究史)、共通言語、人脈、学会、研究会、オンラインツール、データベース

② 隔てる——見える評価基準(業績カウント法)、見えない評価基準(誰に向かって研究し、誰から見られていると感じるか)、言語圏別のデータベース、心理(めんどくさい)

(ウ) 提言——均質なグローバル化ではなく、複数の地域を架橋するトランス・リージョナル(trans-regional)な取り組みを。

### 4. その他の構想または提言

(ア) デジタル・ヒューマニティーズの現状——最近の話題から

① 人をつなぐオンラインツール——パンデミックの思わぬ果実？

② 資料のデジタル化

1. 著作権法の改正(平成30[2018]年)——柔軟化(データベース化の許諾、図書館による著作物の海外送信など)

2. 「国立国会図書館が保有するデジタル化資料 247万点・2億2300万枚超の全文テキストデータ化」(2021.7.15 ニュース・リリース)

③ 分析方法とデータサイエンス

1. AIくずし字認識アプリ「みを miwo」

2. KH Coderによる計量テキスト分析

(イ) その他

## 比較研究を通じた グローバル日本研究の活性化

朴喆熙 (Park, Cheol Hee)

ソウル大学国際学研究所長

### 東アジア地域の日本研究の現状

- ▶ 研究者の数が多くて、研究の質も高い
  - ▶ 国内の市場が発達して海外との連携が相対的に弱い
  - ▶ 研究の質が高いが、英語で紹介されない傾向がある
    - ▶ Seoul Journal of Japanese Studiesの狙い
- ▶ 人文学と社会科学の分離
  - ▶ 各領域の研究者の数が豊富で融合の必要性が足りない
  - ▶ 学際的研究の低調：教育と研究の単位の壁が厚い
- ▶ 世代間の交流や共同研究が足りない
  - ▶ 同世代との交流は比較的活発であるが、世代横断的ネット枠は弱い

☞ 東アジア日本研究者協議会の設立

: 越境 + 融合 + 次世代



## なぜグローバルな日本研究が必要か

- ▶ 一国中心主義の克服して“越境”する日本学
  - ▶ グローバルな観点
  - ▶ 自己相対化
  - ☞ 客観的視点の確保
- ▶ 日本研究の学際的可能性の拡大
  - ▶ 人文学と社会科学の相互浸透と通渉
  - ▶ 広い脈絡と細かい資料の混在
  - ☞ 広範囲な適応が可能で境界を超える研究
- ▶ 次世代を含む日本学への関心増大
  - ▶ 過去ー現在ー未来の対話
  - ▶ 未来への含意
  - ☞ 日本学・東アジア研究の振興

## グローバルな日本研究のための「比較」の観点

- ▶ 他者としての日本ではなく、自己の中の日本
  - ▶ 日本関連の主題は自国でも適応される普遍性のあるもの
    - ▶ 政治的安定、経済的成長と分配、社会福祉と格差問題
    - ▶ 高齢化や少子化など人口学的変化と社会変動
    - ▶ 隣の国との関係と地域的ネット枠
  - ▶ 日本と欧米の並立型比較・日本と東アジアの並立型比較
- ▶ 国家を超えた成功と失敗の教訓
  - ▶ 自民党一党優位の安定性 (G.Curtis; K.Calder; T.J.Pempel)
  - ▶ 高度経済成長の秘密 (C. Johnson ; D. Okimoto)
  - ▶ 社会的安定のための制度的枠組み
  - ☞ 「日本型」社会・経済の特質

- ▶ 歴史的状況に対する適応方式の比較
  - ▶ 近代国家や近代化への転換
    - ▶ Bernard Silberman
  - ▶ 戦争と平和
    - ▶ Carol Gluck, H. Bix, John Dower
  - ▶ 日本のガバナンス
    - ▶ G. Curtis, J.A.A.Stockwin, B.Richardson
  - ▶ 社会変化と地域共同体
    - ▶ Theodore Bestor
  - ▶ 危機の時の戦略的談論
    - ▶ Richard Samuels

## 安倍時代研究のための「比較研究」の提言

- ▶ 通時的(Cross-Temporal)比較:歴史制度的接近法
  - ▶ 1955年体制と安倍時代の自民党優位体制
  - ▶ 「分権型」権力構造と「集権型」権力構造
  - ▶ 保革の対立と右派連合の登場
  - ▶ ミドルパワー外交と大国指向の外交安保
- ▶ 国家間(Cross-National)比較:比較戦略・比較制度分析
  - ▶ 成熟社会と低成長経済の運営
  - ▶ 少子化・高齢化時代の社会・労働・福祉改革
  - ▶ ポピュリズムとナショナリズムの流行り
  - ▶ 中国浮上への対応

## 東アジア日本研究者協議会の可能性

- ▶ 共同研究の振興：東アジア的融合
  - ▶ 韓国・日本・中国・台湾の研究集団の連携
  - ▶ 東アジアと北米・欧州・東南アジア・オセアニアの連携
- ▶ 学際的研究の複合的進行
  - ▶ 人文学者と社会科学者の連携
  - ▶ 開かれた問題意識の共有
- ▶ 東アジアの中の比較可能性の試し
  - ▶ 韓国・日本・中国・台湾の並行・並立的比較
  - ▶ 東アジア共通の特徴・特質の発見

## 国際交流基金主催ラウンドテーブル

### 東アジアの日本研究 ：その研究・教育での連携の可能性を探る

#### 1. 趣旨

日本研究の国際化が進み、研究者の学際的なネットワーク形成の重要性が強調されるようになって久しい。このような問題意識のもとに立ち上げられた東アジア日本研究者協議会も、今回で開催5回目となった。この間、協議会は東アジアの日本研究者ネットワークを発展させるとともに、一貫して次世代の研究者育成に重点を置いてきた。国際交流基金も、主催事業「次世代日本研究者協働研究ワークショップ」等を開催するなど、国際的・学際的ネットワークの形成と次世代研究者育成の重要性を意識して日本研究支援を展開している。

本ラウンドテーブルでは、「次世代の日本研究者育成」を主題とし、日本研究者を志す学生たちの声も紹介しながら、4か国・地域からの登壇者が、次の問いに関連したディスカッションを行う。地域に特徴的な研究をどのように進めていけるか？東アジア域内での共同研究をどのように進めていくか？そして、これまでに培ってきた研究者のネットワークを活かし、いかに若手研究者を育成していけるだろうか？

これらの問いに向き合いつつ、地域や専門分野を超え協働して研究者を育てていく方法

を模索し、東アジアにおける日本研究の今後の展望を描く。モデレーターは、前述の基金主催事業「次世代日本研究者協働研究ワークショップ」のアドバイザー・園田茂人先生(東京大学)が務める。

## 2. 日時

11月28日(日)

午前10:00~12:00 (韓国時間)

## 3. 言語

日本語

## 4. 登壇者

鄭炳浩先生(日本近代文学)

韓国日本学会会長、高麗大学教授／文化大学学長

周異夫先生(日本近代文学)

北京日本学研究センター主任

徐興慶先生(文化交流史)

中国文化大学学長

園田茂人先生(社会学) ※ モデレーター

東京大学東洋文化研究所 教授

以上

The poster features logos for JAPAN FOUNDATION, KOREA UNIVERSITY (고려대학교), CHINESE CULTURE UNIVERSITY (中國文化大學), and THE UNIVERSITY OF TOKYO (東京大学). The title is '東アジアの日本研究：その研究・教育での連携の可能性を探る'. The host is '司会：園田茂人 (東京大学東洋文化研究所／北京外国語大学北京日本学研究中心)'.

## 本ラウンドテーブルの趣旨 (1)

背景)

1. 「国際日本学」的アプローチの高まり
2. 越境による知の刷新：次世代日本研究者協働WSの試み
3. アジア域内に潜在する協力の可能性の発掘



## 本ラウンドテーブルの趣旨 (2)



### 目的)

- 1) 東アジア各地の日本研究をめぐる研究・教育の強み／弱みを確認する
- 2) その上で、どのような連携が可能なのかについて討論を行い、将来を展望する

## ラウンドテーブルのスケジュール

10:10-10:40

参加者から各地の日本研究の特徴、強味／弱みの紹介

11:15-11:50

域内での若手研究者の共同育成をどう進めたらよいかについての討論

10:40-11:15

域内での共同研究をどのように進めていったらよいかについての討論

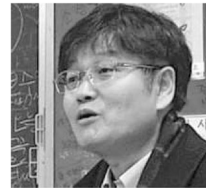
11:50-12:00

フロアからの質問／総括討論

## ラウンドテーブル参加者



國田茂人  
東京大学教授



鄭炳浩  
高麗大教授



周異夫  
北京外国語大学教授



徐興慶  
台湾・中國文化大學校長

# 企画パネルおよび 分科別学術発表



## 1部

### パネル1

#### 多様化のニーズに対応する日本語教育の在り方： AI・AR・認知・対称の視点から

中国文化大学日本語文学科  
元智大学応用外国語学科

### パネル構成

	座長：徐興慶(中国文化大学)
	司会：方献洲(中国文化大学)
発表1	AIの「知」と「創」の視点から大学のカリキュラムを考える — 知識と創造を育つ大学の授業を中心に 黄金堂(中国文化大学)
発表2	絵本におけるAR要素導入による初級日本語学習 — 多領域人材育成の試み 呉翠華・黄怡錚・林淑璋 (元智大学)
発表3	台湾人学習者に対応する日本語文法教育 — 対照と認知の視点からの一提案 陳順益(中国文化大学)
討論：徐興慶(中国文化大学) 越川次郎(中部大学)	



## パネル概要

今の時代には多領域(i.e.学際的)に跨る人材を必要としている。日本研究に関しても同じである。近年多くの研究アプローチや教育の実践報告が掲載され、台湾における日本語教育も変わりつつあり、進んで来ている。単一の領域より、AI技術やAR、VRなどといった多領域の視点を取り入れた研究は近年増えつつある。それに加え、日本語学習者のニーズも多様化しつつある。学習者ニーズ及び日本研究の多様化になりつつある現状から、従来の日本語教育は果たして対応できるのかは問題であろう。

そのような学習者ニーズの多様化に対応するために、教育者もそれに合わせ、今までの専攻とは別に新たな副専攻を身につけなければならないと迫られている。多領域を跨る人材を育成するために、教育者もそれに合わせ、さらに多くの分野の基本知識を身につけなければならないと自覚しなければならないのではないだろうか。一方、大学のカリキュラムもそれに応じて多様化する必要があると思われる。現在台湾における各学校の日本語関連の学科も積極的に新しい授業科目を取り入れようとしている。本セッションの発表もその一環になるといえよう。

## パネル2

### 航路からみた近代： 日本・東アジア・アメリカ大陸間の人・モノ・動植物の交換

国際日本文化研究センター

#### パネル構成

座長：根川幸男(国際日本文化研究センター)	
司会：林聖淑(翰林大)	
発表1	アッサム茶のブラジル移植をめぐる神話の形成 — 英領インドと日本のアジア主義 橋本順光(大阪大学)
発表2	ブラジル・アマゾン流域における黄麻栽培の確立 ガラシーノ・ファクンド (JICA緒方貞子平和開発研究所)
発表3	胡椒のブラジル・アマゾン移植における日本人の南洋ネットワーク 酒井佑輔(鹿児島大学)
発表4	仏領ベトナムにおける人力車の研究 ファン・ハイ・リン(ハノイ国家大学)
発表5	移動と病い—トラホームを中心に ホワニシャン・アストギク (ロシア・アルメニア大学)
討論：根川幸男(国際日本文化研究センター)	

#### パネル概要

近代化の過程で、移民の送付・受入れは、人口や経済問題解決の手段と考えられ、グローバルな人流・物流を作り出した。これらの流通を担った移民船は、東アジア域内のみならず、新大陸を含む広域間に人・モノ・動植物の交換を生み出した。中でも注目すべき事象は、アジアとアフリカ、南米を経由して地球を一周した日本の移民船による広域交換であ

る。19世紀末～1970年代に南米へ30万人以上の日本人を運んだ移民船によって、中継地の農産物である茶や胡椒、黄麻といった、後にブラジルの輸出産品となる植物が移植された。また、ブラジルからは、1910年以降、復航移民船によってコーヒーが日本に輸出され、1920～30年代には朝鮮や満洲など帝国の勢力圏内に流通した。そして、この航路の寄港地であるベトナムでは、日本から香港経由で輸入された人力車が瞬く間に普及し、東南アジア各地や南アフリカでも現地化していった。一方、日本の移民船によってブラジルに移植された茶、胡椒、黄麻は世界市場を席卷し、アジア産品の優位を脅した。これらの移植と生産拡大の過程を追うことによって、近代日本の移民事業とアジアから南米に至る農業や交通のシステム開発との関連性を解明することができる。さらに、近年感染症のパンデミックが人類に脅威を与えているが、病原菌は船によって移民とともに世界各地に運ばれた。日本人の移民先であったハワイや米国、ブラジルでも感染者の上陸は禁止され、多くのトラホーム患者が含まれていた日本人の受入れにおいてしばしば問題化した。このように、日本をハブとし、日本の移民船航路によって、さまざまなモノや動植物の交換が東アジアと新大陸の間で成立した。こうした移民船による交換を手がかりに、東アジアの内外を連絡する、「航路からみた新たなグローバルヒストリー」構築の可能性を提示したい。

### パネル3

## 日本における発展途上国政策と中国との関係

中国国際問題研究院

### パネル構成

座長：姚錦祥(中国国際問題研究院)	
司会：姚錦祥(中国国際問題研究院)	
発表1	ルールに基づく日中協力に向けて？開発協力の限界と可能性 スティーブン R. ナギ(国際基督教大学)
発表2	新シルクロード？日本の中央アジアとの開発協力と中国との関係 ニコライ・ムラシキン (JICA緒方貞子平和開発研究所)
発表3	第三者市場での日中協力：進展と課題 孫文竹(中国国際問題研究院)
発表4	中国は中東で日本から何を学ぶことができますか？ 姚錦祥(中国国際問題研究院)
発表5	日本におけるアフリカ研究の発展 李明儒(同志社大学)
発表6	国家ブランドと競争力のあるアイデンティティ — 東南アジアにおける日本の文化政策 張騰飛(武漢大学)
討論：姚錦祥(中国国際問題研究院)	

### パネル概要

第二次世界大戦後、日本は発展途上国(中国では第三世界とも呼ばれる)を対象とした外交を重視してきた。東南アジア、ラテンアメリカ、中東・北アフリカなどの地域で、日本は文化的資源と経済力を利用し、その影響力と存在感を強め続けてきた。日本における発展途上国との

外交動機・外交戦略をどのように評価するか、そこから得られた経験や教訓は何だろうか。

近頃、日本が中東に自衛隊の艦艇を派遣する等、アメリカとイランの間で調整役を果たそうとしている姿が見られる。大国間の競争時代を迎え、日本が発展途上国に対する外交目的は変わっただろうか。今後、日本はこれらの地域に積極的に関与し、政治面・外交面でより大きな役割を果たすことになるだろうか。

中国も発展途上国との外交を重要視し、「発展途上国が中国の外交方針における基礎である」という出張が頻繁に外交の書類で現れることはその証明となる。「一带一路」という構想が提唱されて以来、中国が発展途上国に対する政策はますます活発になっている。また、新型コロナウイルス感染症発生以来、中国は発展途上国に対し積極的に支援を行っており、特にマスクやワクチンなどの医療用品の分野に力を入れている。そこで、将来これらの地域における日中関係は協力か競争かのどちらになるだろうか。

今年のG7サミットにて各国首脳は発展途上国でのインフラ整備の需要に応えるため、新たな構想を立ち上げることに合意したということである。そこに、「一带一路」という構想に対抗するという明確な意図がある。この新たな構想は日本の外交政策にどう影響するか。

「バイデン時代」の中、日中が発展途上国における相互協力は難しくなるだろうか。

## パネル4

### 選挙区からみる日本政治の現在地

慶應義塾大学日本研究プラットフォーム

#### パネル構成

座長：清水唯一朗(慶應義塾大学)	
司会：古谷知之(慶應義塾大学)	
発表1	「一人一票」の「一人」とは誰なのか？ — 議員定数不均衡指標から考察する選挙区人口に関する理論的・実証的考察 鎌原勇太(横浜国立大学)
発表2	世代、支持政党、選挙区特性による有権者のイデオロギー理解の違い — 自由記述回答のテキスト分析 飯田健(同志社大学)
発表3	選挙ポスターは投票参加を促すか：2021年うま市市長選の事例から 重村壮平・品田裕(神戸大学)、宋財沄(関西大学)
討論：大村華子(関西学院大学) 古谷知之(慶應義塾大学)	

#### パネル概要

日本政治が政治改革に取り組んで25年が過ぎた。小選挙区比例代表並立制の導入により、政権交代の可能性が担保され、与党のガバナンスは強化され、政治と統治のありようは大きく変化した。

民意を表出する空間的制度である選挙区にも、2020年に行われた国勢調査に基づいて、10増10限という選挙区の大規模な書き換えが行われる。選挙区は日本政治にどのような影響をもたらしているのか、本パネルでは3つの視点から論じていく。

第一報告「「一人一票」の「一人」とは誰なのか？」(鎌原勇太・横浜国立大学)は、いわゆる「一票の格差」を論じる際に用いられる「議員定数不均衡」指標が、データとして選挙区人

口、有権者人口、投票者数のいずれに寄るかで差が生じる問題に着目し、これを数理的に考察し、他国との比較を通じて日本の現状を明らかにする。選挙区研究の重要な基礎をなす研究である。議員定数不均衡指標

第二報告「世代・支持政党による有権者のイデオロギー理解の違い」(飯田健・同志社大学)は、近年指摘される世代間のイデオロギー理解の相違について、地域、すなわち選挙区レベルでの相違がどのようにあるのかを視野に論じる。選挙区を事例として分析することの意義と可能性を示す。

第三報告「ポスター掲示場が投票参加に与える効果」(重村壮平・神戸大学、宋財滋・関西大学、品田裕・神戸大学)は、選挙区において有権者に情報を伝えるうえで大きな手段となっている選挙ポスターを対象に、それが撤去された事例を用いて、選挙区のなかにおける情報の差がどのような効果と影響をもたらすかを分析する。

討論は、地理情報分析を専門とする古谷知之(慶應義塾大学)(司会兼任)と日本政治を専門とする大村華子(関西学院大学)が務め、分析の多角化と東アジアにおける日本研究の交流に努める。

## パネル5

### 流動する「変態」 1920~30年代日韓の探偵小説

高麗大学校

#### パネル構成

座長： 兪在真(高麗大学)	
司会： 朴輪貞(東京大学)	
発表1	韓程善(釜山大学)
発表2	近代探偵小説をめぐる科学的想像力：夢野久作の変格探偵小説を中心に 李炫熹(高麗大学)
発表3	在朝日本人の変格探偵小説：「顛倒」への欲望 兪在真(高麗大学)
発表4	植民地朝鮮の変格探偵小説と「幻想」の領域 鄭惠英(慶北大学)
討論： 李志炯(淑明女子大学) 洪潤杓(誠信女子大学)	

#### パネル概要

探偵小説とは近代の法秩序を元に探偵(Detective)が科学的根拠と合理的推理によってミステリー(犯罪)の真相を暴く小説で近代以降西洋で形成された大衆小説の一ジャンルである。近代初期探偵小説は、近代「知」・制度と共に日本に流入され、明治初期の翻案・翻訳の時代を経た後、1920年代には大衆文学の一軸を成すほどに隆盛した。しかし、この時期日本で創作され享受された探偵小説は西洋の探偵小説とは異なる、「科学」「合理」と背反するかのように見える幻想的で怪奇的な作風の人間の異常心理を主眼とする所謂「変格探偵小説」なる小説群が流行る。「変態心理」や「変態性欲」を基調とした物語は徐々に「エロ・グロ・ナンセンス」という時代の文化コードとして1920~30年代に日本で量産された。こ



のような現象は日本に留まらず「外地」であった朝鮮の日本語・韓国語の文学界にまで広まりを見せたのである。

このパネルでは、このように1920年代から30年代にわたって西洋とな異なる様相をみせた日本と朝鮮における探偵小説のあり様を通時的に考察することを試みる。変格探偵小説を大衆小説のメインストリームに定着させた決定的な作家と言える江戸川乱歩の通俗長編小説から変格探偵小説の雄と言われた夢野久作の変格探偵小説が内包している科学的想像力を考察して変格探偵小説の生成過程と特質を窺う。さらにこのような変格探偵小説が帝国主義拡張と共に如何に朝鮮に流入されたのか、在朝日本人の探偵小説と朝鮮を代表する金来成の変格探偵小説を通して考察する。以上のは考察をとおして「近代の産物」と言える探偵小説がアジアでは如何に変容されたのかを確認し、このような変容の要因を究明することを目的とする。

## パネル6

### 日本における東南アジアの表象とその周辺

日本文学と東南アジア(南洋)研究チーム

#### パネル構成

	座長: 鄭炳浩(高麗大学)
	司会: 鄭炳浩(高麗大学)
発表1	『ジャワ・バル』雑誌の表紙におけるインドネシアの女性と子ども像 ロウリ・エステル(インドネシア大学)
発表2	南方徴用作家富沢有為男のジャワ体験 アントニウス・プジョ(アイルランガ大学)
発表3	帝国日本における南洋認識: 山田毅一『南洋大観』(1934)を中心に 李佳炫(高麗大学)
発表4	「大正期」南洋文学の可能性 — 芥川龍之介の『桃太郎』を南洋文学で読み解く — 朴祉侯(高麗大学)
討論: 金孝順(高麗大学) 嚴仁卿(高麗大学)	

#### パネル概要

近代国民国家の形成期以降、日本の文化人たちは文学的テキストを通じて東南アジア(南洋)に関する多様な言説を作り上げた。これらの言説は、当時の日本国民に特定の南洋認識を植えつけることに一役買い、ひいては朝鮮のような植民地に受容、変容され、東アジアにおける東南アジア表象の成立に少なからず影響を与えた。したがって、近代日本の文学テキストの中で「南洋」表象を捉えるということは、日本文学のアジア表象において東南アジア地域をどのように位置づけるのかという問いと軌を一にしており、同時に、東アジア文学に描かれた東南アジアを理解するための土台的作業であるとも言える。



このような学問的意識に基づき、本パネルは日本文学、文化的テキストを基本とし、日本文学と東南アジア言説の実体を把握することを試みる。そして、多少日本中心に研究が行われていた「南洋」を、アジアのみにとどまらず、より広い視野の中で再検討するため、インドネシア研究者と韓国人研究者により発表者を構成し、「トランス東アジア」という時代の流れに沿った、いわゆる「南洋研究」における新たな可能性を模索する。

次に南方徴用作家であった富沢有為男のジャワ体験を通じて、戦争期に南洋を強制的に経験した作家の言説を検討し、徴用作家にとっての南洋が持つ意味について把握する。つまり、南洋文学の歴史の中で最も短期間であったものの、一方で最も活発であった時期における一断面を集中的に考察することで、戦争と南洋、そして文学者の関係を探索することを目指す。

三つ目は南洋に関する政治、経済、社会、文化などの分野にわたって叙述された一種の「南洋総合書」である『南洋大観』の中の南洋認識について考察する。本書は文学作品ではないが、南洋に関する民族誌としての性格を持っているため、文学テキストの中に描かれた南洋表象を理解するにあたっての、貴重な第1次資料となる。

最後の発表は、南洋文学史の中で過渡期と考えられる大正時代に焦点を当て、その時期に刊行された芥川龍之介の『桃太郎』を南洋文学の定義に合わせて分析を試みる。これを通して「南洋文学で読み解く」という一節の中に隠された意味を逆に追跡し、南洋文学の特徴について小考する。

以上の発表およびタイトル、そしてパネル構成をまとめると以下の通りである。

## パネル7

### 20世紀前半の東アジアにおける異文化間交渉： 文学・宗教・思想

国際日本文化研究センター

#### パネル構成

座長：藤本憲正(国際日本文化研究センター)	
司会：稲賀繁美(京都精華大学)	
発表1	夏目漱石の「翻訳論」：「翻訳不可能性」論の視点から ゴウランガ・C・プラダン (国際日本文化研究センター)
発表2	鶴見祐輔と日本文学世界化構想：着想の契機と拓かれた可能性を中心に 片岡真伊(東京大学)
発表3	魚木忠一の「日本基督教」の再考：宗教の解釈と受容の制約をめぐって 藤本憲正(国際日本文化研究センター)
発表4	文化交渉の視点からみる橘樸の「王道」論：生存権のデモクラシーと東アジア 谷雪妮(京都大学)
討論：稲賀繁美(京都精華大学)	

#### パネル概要

異文化の接触と文化の再創造は、いつの時代にも起きてきた人間の営みの一つであり、多くの人を魅了してきた学問的テーマでもある。しかし、何が異文化でありどのようにそれを解釈するのかは、当事者の文脈に依存している。そこで本パネルでは、近代東アジアの異文化接触に焦点を絞り、そこにおいて異文化がどのように解釈され、自文化と結びつけられて、新しいまたは変容された文化が生み出されたのかについて検討する。とくに日本と中国の人々が、当時の政治関係に触発されつつ西洋文化をどう扱ったのかをめぐって4つの事例を取り上げる。そして、異文化接触における時代的背景や制約を明らかにしつつ、それら事例に

見出しうる現代的な可能性を提示する。

ゴウランガ・C・プラダンは、明治日本を代表した文学者である夏目漱石が論じた他文化を鑑賞できる方法としての翻訳の限界について考える。近年では再注目されつつある翻訳不可能論を提示した上で、当の日本の知識人が示した翻訳論を明示し、翻訳の問題を再考する。片岡真伊は、1920-30年代に日本文学の世界化を構想した鶴見祐輔に焦点をあてる。鶴見の接した欧米の翻訳文化、国際関係から着想の背景を明らかにし、その構想の限界と鶴見の試みが拓いた可能性について考察する。藤本憲正は、1930年代にキリスト教類型論を提示した魚木忠一を取り上げ、同時代の海老名弾正の進歩主義的な視点と比較して、両者の背景にある西洋思想の違いを明らかにする。それにより、類型論の提示において魚木が本来持っていた比較宗教学的な関心と意図を再検討する。谷雪妮は、「満洲国」のイデオログと目されてきた橘樸の王道論の根底には、第一次世界大戦後に流行していた社会政策論と生存権論が置かれていることを明らかにする。そのうえで、橘がいかに中国の伝統思想と文化と交渉しながら、そこに西洋の社会理念を織り込み、「東洋」のデモクラシーを創造しようとしたのかを考察する。

## パネル8

### 東アジアの交流

高麗大学グローバル日本研究院

#### パネル構成

	座長：宋浣範(高麗大学)
	司会：宋浣範(高麗大学)
発表1	在日コリアン・コミュニティの比較研究：歴史・変容・「共生」 羅京洙(学習院女子大学)
発表2	日本古典文学における獅子舞の表象 李芙鏞(江原大学)
発表3	申維翰と荻生徂徠：1719年朝鮮通信使と徂徠との出会い 李基原(江原大学)
発表4	新羅と古代日本の地方行政における村の位置 村上菜菜(奈良女子大学)
討論：趙明哲(高麗大学) 金静希(嘉泉大学) 許芝銀(西江大学) 李壯雄(漢城百濟博物館)	

#### パネル概要

本セッションには5本の発表が予定されている。各々の要約を提示することにより概要とする。

在日コリアン・コミュニティの比較研究：歴史・変容・「共生」

本研究の目的は、人の移動やディアスポラ(diaspora)論を理論的枠組みとしつつ、日本の各地に散在する主なコリアン・コミュニティに焦点を当て、その形成の歴史的背景と変遷、現状、そして今後の課題と展望に関する総合的な比較考察を通して、在日コリアン・コミュニテ

ィの「全体像」を描き出すことにある。具体的な研究対象としては、東京の新大久保コリアタウン、神奈川の川崎コリアタウン、大阪の生野コリアタウン、京都のウトロ地区コリアン・コミュニティなど、代表的な4地域を想定している。また、在日コリアン・コミュニティを中心としつつ、他の在日外国人コミュニティと比較分析し、その類似性と相違性を考察することも目指す。

#### 日本古典文学における獅子舞の表象

獅子舞は、韓・中・日、ベトナムなど、東アジアの国々に広く伝わっている舞であるが、各文化の中で展開されてきた具体的な姿はさまざまである。新羅の『東京雑記』には、唐への留学を経験した崔致遠の郷楽雑詠の五首があり、その中で狻猊には、「遠涉流沙萬里來」とあり、獅子舞の他文化からの伝来を象徴する表現が見える。ところで、日本において獅子舞はどのように語られたのであろうか。本発表においては、平安文学を中心に、獅子舞の登場する場面を詳しく分析し、それをめぐる文化的意味を考察しようとする。研究対象としては、『枕草子』、『栄花物語』、『十訓抄』などを取りあげる。例えば、『枕草子』の「見物は」段には、五月の行幸における還御の際、その御輿の先に「獅子、狛犬など舞ひ、あはれさる事のあらむ」とあり、行列の前で獅子舞や狛犬が演じられていたことが記される。また、『栄花物語』の「おむがく」巻には、法成寺金堂供養の際、楽所の乱声が響く中、獅子が子獅子を引き連れて舞い出る場面が印象的に描かれている。さらに、『十訓抄』第十卷第十六話には、鳥羽天皇の治世の時、待賢門院の衣が失われた事件に言及され、後にその衣を被って獅子舞を舞う者たちが出現するという説話が載せられている。このように、獅子舞は、平安時代の様々な行事において、興趣を添える役割を果たし、親しみやすく、幅広い階層の中で享受されてきたのである。文学に取り入れられた獅子舞について、当時の歴史的状況を踏まえながら、平安文学における獅子舞の表象を分析し、日本文化における獅子舞の展開とその文化的特徴を取り出すことを試みる。

#### 申維翰と荻生徂徠：1719年朝鮮通信使と徂徠との出会い

本報告では、前近代日本における「教養」とは何かを考える。特に一般庶民が学んだ「教養」のあり方の問題、つまりどのテキストから「教養」を得てきたのか、そして多く読まれたテ

キストが持つ意味と、それらのテキストを通じて産み出される「知識」を東アジアの中から考える。東アジアの「知的交流と移動」を視野へ入れながら、前近代日本の「教養」の問題を考えるたい。

#### 新羅と古代日本の地方行政における村の位置

「村」という語は、3世紀に撰述された『三国志』に初めて登場し、中国の南北朝時代にかけて一般化する。その後、「村」は朝鮮半島の金石文や木簡にも散見されるようになる。日本でも、文献史料のみならず、木簡にも「村」が多く記された。東アジアでは「村」が広く用いられていたが、国によって地方行政における「村」の位置づけは異なる。各国の地方行政における村の位置を比較史的に追究することで、各国の村と地方行政の特質を解明できよう。本報告はその一過程として、日本の村の検討を踏まえつつ、新羅の村と地方行政の特質を把握することを目標とする。

## パネル9

### 日本の国際分業と日台産業連携

国立台中科技大学・日本研究センター

#### パネル構成

座長：黎立仁(国立台中科技大学)	
司会：李嗣堯(国立台中科技大学)	
発表1	FTA/EPAが日本への対内直接投資に与える影響に関する研究 曾耀鋒(国立台中科技大学)
発表2	ジンズの成功要因の一考察：戦略ストーリーの視点から 李嗣堯(国立台中科技大学)
発表3	日本の東海地域と台湾の産業連携とイノベーション 林冠汝(真理大学)
発表4	顧客満足度と顧客ロイヤルティの比較：エバー航空と全日空を例として 張銘今(国立台中科技大学)
討論：林冠汝(真理大学) 亀井大樹(同志社大学) 葉東哲(国立台中科技大学) 李嗣堯(国立台中科技大学)	

#### パネル概要

日本は、高齢少子化により国内市場の縮小及び労働力不足などの問題をもたらす一方、アジアの凄まじい経済成長と地球規模のグローバル化がいつそう進行しているなか、国際分業の中で優位性を再構築することは重要不可欠な課題といえよう。ここで、日本の伝統的な産業輸出のレビーをしながら、自由貿易・投資の体制の中でFTA/EPAの締結が日本への対内直接投資にどれだけ影響を与えるかのを、検討する。

一昨年より地球規模でいたるところにコロナウィルス感染が広がっている。それにより、リスク分散のため、サプライチェーンの調整や再構築が急がれている。そうした中、日台産業連携においては産業連携の強化や調整によって一定の変化がみられるようになった。本パネルは以下のようにいくつかの課題を設けて探究したい。

## パネル10

### 国境を超えて移動していた芸術家とその表象

ソウル大学日本研究所x植民地美術研究会

#### パネル構成

座長：盧ユニア(ソウル大学)	
司会：盧ユニア(ソウル大学)	
発表1	海を渡る舞姫：芸術家たちによる朝鮮美人の表象 申ミンジョン(韓国外国語大学)
発表2	村上無羅作《満洲所見》について カク・イケン(国立台湾美術館)
発表3	帝国のまなざし：桑原甲子雄の満洲写真 ヤン・ユウ(九州大学)
発表4	朝鮮民族美術展覧会(1921年)と李朝陶磁器展覧会(1922年) 田代裕一郎(獨協大学)
討論：コウオージェイ・マグダレナ(東洋英和女学院大学) 金智英(個人研究者)	

#### パネル概要

このパネルでは、東アジア4ヶ国の研究者がそれぞれ「国境を超えて移動していた芸術家とその表象」について発表をおこなう。パネルは司会・発表・討論者の全員、日本帝国における視覚文化・芸術とその周辺に関して研究している3-40代の若手研究者で構成されている。申ミンジョン氏は、「海を渡る舞姫：芸術家たちによる朝鮮美人の表象」というテーマで、戦前の日朝芸術家による美人像を検討し、朝鮮近代絵画における異国趣味に対して考察する。カク・イケン氏は「台展東洋画の「時代味」を探すー村上無羅作《満洲所見》について」と題して、村上無羅作《満洲所見》をもとに展覧会での満州のイメージ、そして台湾美術展覧会における地方色の問題を考察する。ヤンユウ氏は、「モダンと帝国のまなざし：



満洲に旅した日本人建築家」と題して、満洲建築、植民地観光、帝国の移動について考察する。田代裕一郎氏の「朝鮮民族美術展覧会(1921年)と李朝陶磁器展覧会(1922年)」は、柳宗悦が東京および京城(現ソウル)でおこなった展覧会について新資料をもとに分析する。朝鮮、台湾、満州と内地の間を移動していた芸術家とその作品を扱いながら、帝国の趣味とまなざしが各事例にどのように反映されているか確認する。また近代における歴史成立の事例を検討することにより、帝国の歴史認識とそれが今日までどのように継承されているかを議論する。

## パネル11

### 釜山と対馬をつなぐ道

「訳官使・通信使とその周辺」研究会

#### パネル構成

司会：池内敏(名古屋大学)	
司会：池内敏(名古屋大学)	
発表1	対馬における『潜商』とその取締 石田徹(鳥根県立大学)
発表2	抜荷と贈答品の中身：「判事茶碗」の生産と終焉をめぐる 片山まび(東京藝術大学)
発表3	倭館における裁判役の音物贈答と饗応 李炯周(名古屋大学)
討論：程永超(東北大学)	

#### パネル概要

日本文化は東アジアの刻印を強く受けている。「鎖国」の時代＝江戸時代においても、それは変わらない。当時の日本も、明清中国や朝鮮など東アジアとの文化交流を通じて自らの文化に更新を重ねてきた。

とはいうものの、交流は具体的なモノ・ひと・動きによって支えられており、それら具体性を中抜きにして、明清中国・朝鮮と日本との交流を論じるのはいささか議論がスキップしているように感じる。

われわれ「訳官使・通信使とその周辺」研究会では、近世日朝間を往来した朝鮮人外交使節団たる訳官使および通信使を介して、まずは朝鮮と日本の政治的・文化的交流にかかわる既存の研究を乗り越え、さらに朝鮮・日本両国の背後に控える明清中国との間接的・直接的



な交流を媒介項として東アジア国際社会における文化交流を新たに見直そうと考えてきた。

近世日本と朝鮮との交流は、極めて具体的には釜山(朝鮮)と厳原(対馬)のあいだでつなが道を介して繋がれた。そこで、この釜山—厳原を結ぶ線上に展開した文化交流を跡づけながら、その先に展開する日本、朝鮮、明清中国との文化交流を展望することを考えてみたく思う。そこで今回は、訳官使(釜山から厳原へ)、裁判使(厳原から釜山へ)、釜山倭館周辺で制作された焼物(釜山と厳原の往復)という三つの視点から研究報告を準備したい。それら個別報告は、個別の事例紹介であるとともに、今後の東アジア社会と日本とのかかわりを検討する研究の展開を用意するものでもある。

## パネル12

### 日本文化における舶来表象と権威

(次世代)総合研究大学院大学

#### パネル構成

座長：虞雪健(総合研究大学院大学)	
司会：児島啓祐(総合研究大学院大学)	
発表1	和漢の囲碁と権威性：中古文学作品を中心に 上杉幹(総合研究大学院大学)
発表2	宝劔の夢想に対する宋学的・禪宗的批判 — 西源院本『太平記』巻二十六「從伊勢国進宝劔事付黄梁夢事」を中心に 虞雪健(総合研究大学院大学)
発表3	渡辺幽香《幼児図》の制作背景：幕末維新期の太閤記物の流行に着目して 伊藤美幸(総合研究大学院大学)
討論：黄昱(国文学研究資料館)	

#### パネル概要

##### 【要旨】

舶来物を享受し、活かす過程において、舶来物そのものの権威と、文化のぶつかりあいによって生まれた新たな権威性が注目される。舶来物の権威はどのように消化され、また新たな権威として創造されたのか。本パネル発表では、「舶来物を以って権威を示す」という主題をめぐって、中古・中世・近代と時代区分を異にし、それぞれ囲碁・漢籍・油彩画を取り上げ、「囲碁による天皇の権威の強化」、「宋学を通じた王権の夢想への批判」、「油彩画による近代国家の権威」の3点で考察する。

## 【各発表の概要】

### ①「日本と中国における権力者と囲碁の関係」(上杉幹)

古来より日中において、中国発祥の遊戯である囲碁を遊ぶことや囲碁の名手を近侍させることは、権力者の権威を示す役割があったと思われる。日中の権力者はどのような視点から囲碁の価値を見出し、権威財として捉えたかを検討する。

### ② 宝剣の夢想に対する宋学的批判——『太平記』巻二十六黄梁夢故事を中心に——(虞雪健)

宝剣の真贋をめぐる説かれた黄梁夢故事を「聖人無夢」、楊亀山詩、「新楽府」などの漢籍の引用を分析し、宋学に基づく瑞夢説への批判を確認する上で、宝剣の記事における政治批判意識を検討するとともに、禅宗や儒学における理想的な為政者のありかたを明らかにする。

### ③ 渡辺幽香《幼児図》の制作背景——幕末維新期の太閤記物の流行に着目して——(伊藤美幸)

日清戦争を前年に控えた日本の威信を示す寓意画として解釈される《幼児図》(油彩、1892年)を取り上げ、幕末の太閤記物の出版物を通して画題を検討し、当時の立身出世主義や歴史画推奨の動きを踏まえて制作背景を考察する。

## 分科1-1

# 日本赤十字社と大韓帝国

松田利彦(国際日本文化研究センター)

1863年にスイスで創設された国際赤十字は、戦争犠牲者の救済と人道援助のための組織として今日でも国際社会で大きな存在感を発揮している。本研究は、日本赤十字社(1877年に博愛社として創設、1887年日本赤十字社と改称。以下、日赤と略記)が植民地期朝鮮で展開した活動を考察する。日赤の朝鮮での活動についてはほとんど研究がないが、欧米では、既に、イギリス・フランス・オランダなどの各国赤十字社の植民地での活動や植民解放戦争に対する対応についての研究が現れている。そこでは、植民地領有に対する現地民族の蜂起・解放戦争において、宗主国側が赤十字の基本理念を必ずしも尊重しなかったことが明らかにされている。こうした欧米あるいは台湾での研究も視野に入れつつ、植民地支配と赤十字という問題に踏みこみたい。

第一に、朝鮮において日赤の組織が結成される過程を概観する。1867年の朝鮮開国以降、日本居留地に赤十字の委員部や社員会が作られ、1905年には日赤韓国特別委員部が結成された。他方、1905年、大韓帝国政府も大韓赤十字社を結成した。しかし、日露戦争後、韓国が保護国化されると、1909年大韓赤十字社は廃止され、日赤が朝鮮に於ける赤十字事業を担うことになった(韓国併合(1910年)以後、日赤朝鮮本部となる)。このような複数の赤十字組織の競合は欧米の赤十字社には見られない事例である。

第二に、韓国併合以後の日赤の平時活動である。戦前の日本赤十字社は、平時における救護活動を推進することで、戦時救護のための人材や資材を準備することを重視し、欧米の赤十字社にも影響を与えた。このような日赤の平時活動は植民地朝鮮ではどのように展開されたのか。また、赤十字社員の獲得運動は、現地社会にどのような意味を持っていたかを検討したい。

## 「広島復興」はいかに記述されてきたか： 「復興」をめぐる歴史認識の内破のために

西井麻里奈(大阪大学文学)

戦争末期、日本の都市部は大規模な空襲被害を受けた。その被害からの「復興」は、「焦土からの復興」という回復と成長の経験として、時に「不死鳥」にも見立てられ、戦後日本社会のサクセス・ストーリーを形成してきた。特に、原爆被害地である広島復興は、国内・世界に戦争や災害による新たな廃墟が生み出されるたびに、教訓的過去として想起の対象とされ、広島の地方行政もまた、今日に至るまでそのような広島像を打ち出して止まない。

だが、東アジア的視点からはすでに、その「復興」は、冷戦体制下での局地的熱戦が繰り返される朝鮮半島の「戦場」、その基地となった周縁地域に対する「占領」の継続と、地続きのものであるとして、批判的な検討がなされている。そこでは、日本の戦後「復興」が極めて一国的かつ本土中心的に遂行され、「戦後日本」像を規定する歴史認識の中心にあることの問題性が指摘された。

にもかかわらず、「広島復興」は物語としての魅力をはらみ続け、再生産され続けており、その動向は今後も継続すると考えられる。それは、なぜなのだろうか。本報告では、行政史やメディア報道、近年の各種展覧会に表されてきた、「広島復興」を語る地域史記述の構造を分析し、その課題を明らかにする。特に、広島の「復興」が文化的記憶として現代的意味を持ち始めたと考えられる、1990年代初頭から現在までの「広島復興」をめぐる言説状況を確認し、「復興」をめぐる歴史認識の現状と課題を明らかにする。

以上を通じ、本報告は「復興」を軸とする一国的な歴史認識を内破し得る可能性を探る。

## 「ベルナルド・クーパーの番組制作比較研究： 米軍占領期の日本本土と巨済島戦争捕虜収容所での実践を事例として

松本章伸(大阪大学)

本発表の目的は、占領期の日本本土と巨済島の戦争捕虜収容所において、同時代の人々を「再教育」するためにラジオ番組プロデューサーのベルナルド・クーパーが手がけた番組と制作手法の検証を通じて、ラジオを用いた意識改革をいかに行なってきたのかについて明らかにすることである。

クーパーは、1947年から1951年まで、連合国軍最高司令官総司令部民間情報教育局(GHQ/CIE)に所属し、日本放送協会でラジオ番組制作を行なった。その後1952年から1953年まで、国連軍民間情報教育局(UNC/CIE)の一員として巨済島に設置された捕虜収容所で、ラジオ番組を通じた教育プログラムを担った。

米軍占領期のラジオ放送とその影響に関する先行研究は、ラジオ番組研究のなかで重要なテーマの一つを占めてきた。また米軍が市井の人々の意識改革のために用いた放送番組を、社会学的な視座から検証する研究も行われてきた。一方で、占領期のラジオ放送がいかに行われたのかというメディア政策に関しては、メディア史研究がその先駆を担ってきた。しかしながら、「番組は何を描いてきたのか」という番組研究と、メディア政策の具体像を明らかにしたメディア史研究の成果とが結びつけられていないのが実情である。

また巨済島の戦争捕虜収容所で行われた反共産主義思想を受け付けるための捕虜教育プログラムについては実証的に研究が積み上げられてきているものの、収容所内で放送されていたラジオ番組に関する詳細な調査は発展途上である。さらに、同時代に制作された番組は、他地域と分断して考察が行われてきた。

本発表では、クーパーが2つの地域で行なった放送政策について、時間的な連続性と地域的な広がりに着目し、彼はいかなる手法を用いて人々の思考の仕方を「再教育」しようとしたのか、その一端を明らかにする。

## 危険社会と神国思想の様相： 軍記物語と植民地期朝鮮の日本語文献の神功皇后記事を中心に

韓采旼(高麗大学)

日本の朝鮮への優越感や蔑視、征韓論の当為性は、為政者の意図で近代に「作られた」ものだが、先行研究者の指摘のように、その根拠は「神功皇后の三韓征伐」に基づいたものであり、これは韓半島に対する認識形成の根幹になったといえる。「神功皇后の三韓征伐」の起源は記紀神話であるが、この伝説が民衆レベルで共有され、歪曲された韓半島認識を形成するにあたって、実は軍記物語の役割が大きかったと言える。軍記物語は戦争が主な素材であるが、天皇制イデオロギーが濃厚な文学ジャンルであり、上流から中流、少数から多数者に、都市から地方という社会の中心構図が移動する過程で創作されたものであるため、特定のイデオロギーが全国的に流通する上で大きな役割を果たしたと考えられるからである。

本発表では軍記物語の中でも上記の特徴が顕著な『平家物語』と『太平記』に注目したい。まず、『平家物語』から神功皇后の伝説を含めて韓半島と関連する事項を抽出し、正統神話との比較を通じて変容が起きた部分を把握する。また、同様に『太平記』に記された韓半島関連の記事や内容を集めて、『平家物語』と比較したらどのような違いがあるのか、変容が起きた部分があるとすればその理由は何かを分析し、近世と近現代の韓半島認識にどのような影響を及ぼしたのかを考察してみたい。

## 平安京をめぐる人の移動と場

久葉智代(総合研究大学院大学)

日本の古代を通して人々の移動は盛んにおこなわれてきた。ただしそれが現代におけるものとは、方法・目的・範囲においてまったく異なるものであることは自明である。しかし、現在新型コロナウイルスにより人々の移動が制限されている中で、過去を通して人々の移動という事象は何を発生させてきたのか、そしてその背景にはどのようなものがあったのかを一度考えることは重要であろう。

本発表では、平安時代における、平安京を中心とした貴族の移動について検討する。古代において、史料によって判明する移動の主体は、都に住む貴族たちである。しかし、平安時代は、平安京の長期間の存続や都の位置する土地の特性、地方政治の変化など、都を取り巻く環境が奈良時代以前とは大きく異なる。

また、史料の性格にも注意する必要がある。六国史が主な史料である奈良時代とは異なり、平安時代には貴族の日記が主な史料の一つとなる。その内容については、外出の記事一つをとっても、記述した者自身の個人の事情に左右される場合があることを考慮しなければならない。

上記のような時代背景や史料の性格を考慮した上で、以下のような点を明らかにすることを目的とする。

まずは、貴族たちの移動範囲である。主に日記を史料とし、貴族たちがどのような場所へ移動していたのか、それはどの程度の範囲に及ぶものであるか、また移動する場所の傾向はあるのかなどを検討する。主に平安京とその周辺を対象とするが、大和国や近江国など、周辺の国々も必要に応じて視野に入れる。

次に、上記で検討したような移動先に対して、どのような目的や意識を持っていたのかを



把握する。

以上のような個々人の動きが集まって、広い視点で見た時に、古代において人の移動が持つ社会的な意味や、都市とその周辺部の関係性などを明らかにできることが期待される。

## 分科2-3

### 古浄瑠璃に見る近世期の東アジア観と日本の神国思想

松波伸浩(名古屋大学)

本発表では、17世紀末まで隆盛した古浄瑠璃のうち、日本と異国との関係が描かれた作品と、中世神話の世界を根幹とする作品について分析し、当時の日本の東アジア観と神国思想のあり方や演劇への利用の実態を明らかにする。

古浄瑠璃とは、近松門左衛門『出世景清』以前の浄瑠璃作品のことを指すが、従来近松を頂点とみなす文学史観とその難解さゆえに、文学的な分析や考察は立ち遅れてきた。しかし、発表者による古浄瑠璃本文への整定・注釈作業の途上で、古浄瑠璃にも優れた文学的価値が見いだせること、当時の思想や価値観のあり方、語彙の本義等を知る上で重要な資料性を持つことが分かってきた。本発表では、思想や価値観のあり方という面での成果を紹介する。

古浄瑠璃には、異国や異界を脅威として描き出しつつも、日本方の主に若武者たちの活躍によって侵攻してきた異人たちを駆逐するという話型が見られる。その異国は多くが中国であるが、朝鮮やオランダの名を挙げる作品も見られる。一方これは、主に日本国内を舞台として展開される魔物や鬼神の退治譚など、中世神話を背景にした古浄瑠璃が隆盛したこととも関係があると目される。中世神話は記紀神話の中世的受容を窺わせるものであり、鎌倉時代の蒙古襲来によって表出した神国思想をも反映したものである。この思想は上記した古浄瑠璃作品の根幹をなしており、単純な討伐譚や戦闘譚の量産によりマンネリ化していた古浄瑠璃の世界に奥行きを持たせるとともに、近松以降の浄瑠璃や文芸にも受け継がれた。本発表ではそのような古浄瑠璃を取り上げ、近世初期の東アジア観の一端を窺うとともに、神国思想が作劇にどのように利用されていったかを辿っていく。



## 『女郎花物語』と『仮名列女伝』の関連性： 『女郎花物語』の作者をめぐって

陳羿秀(静宜大学)

本発表では、明暦元年(1655)、北村季吟(1625—1705)により著された『列女伝』(漢・劉向著)の初めての全訳本『仮名列女伝』(八巻)と、同じく先行研究に季吟作とされる万治四年(1661)刊本『女郎花物語』(三巻)の関係について論じたい。

『仮名列女伝』の作者・北村季吟は江戸前期の和学者であり、和歌・歌学における造詣も深く、『源氏物語湖月抄』を初めとする古典注釈書の大家である。これに対して、『女郎花物語』作者は、写本は不明だが、刊本の署名に「藤原氏女」とあるが、青山忠一氏を始めとして、中村幸彦氏や野村貴次氏などがそれぞれの論文において、『寛文十年刊書籍目録』(1670)などに著者を季吟とすることからその作者も同じく北村季吟だと立証している。

先行研究ではいずれも詳細に『女郎花物語』と『仮名列女伝』の関連性を深く追求していなかった。しかし、『仮名列女伝』が季吟の署名入りの作品である以上、その後で作られた『女郎花物語』の作者もまた季吟であるなら、その関連性は表現の類似に止まらず、内容面にも及ぶのではないかこの疑義を発端として、本発表では、『女郎花物語』と『仮名列女伝』の類似した表現のみならず、両作の内容面を精査することで両者の関連性を具体的に明らかにし、『女郎花物語』の作者が季吟であることを再確認しようと思う。

## 中国インターネット上のアニメツーリズム情報から 見た行動特徴及び観光地イメージ

段乃璋(駒沢大学)

### 目的

アニメツーリズム(聖地巡礼)とは、アニメ、マンガ、ゲームの舞台となった土地や建物を訪れる観光行動である。本研究の目的は、中国のインターネット上に発信した訪日観光情報の中、アニメツーリズムに関する内容を対象とし、中国人の聖地巡礼観光行動の特徴と観光地イメージに変容を明らかにする。

### 方法

本研究では、中国のインターネット上から、観光経験を詳細に記述している観光記事を収集を行った。情報源は規模が大きく、一般ユーザーも多く利用されている中国OTAサイト—Ctripとmafengwo及び観光サイトではなく、アニメファンが多く利用しているbilibiliである。テキストマイニングの手法を行い、全体的な特徴を把握した。さらに、質的解読を通し、研究を補充した。

### 結果

観光客の目的、二次元文化に受ける影響などの属性が異なるため、アニメツーリズムの参与度も異なっている。全体的に、観光記事では一般的な観光行動とアニメツーリズム両方も表されているが、前述の差異によってアニメツーリズム内容の割合も異なっている。それに基づいて、アニメツーリズム観光客を大きく三種類に分ける ①完全に聖地巡礼を目的し、聖地巡礼のメインにする観光客 ②一般的な観光を目的するが、自分が好きなアニメ聖地を訪れることも計画した観光客 ③完全に一般的な観光を目的し、偶然に知っているアニメの

舞台を訪れ、聖地巡礼を経験した観光客

その三種類の観光客はそれぞれの特徴を持っている。

#### 結論

全体的に、アニメ、マンガなどと深く繋がって観光客が、作品舞台とする観光地に訪れる時、観光行動と商品も作品に大きく影響される。また、作品から受けた影響が深くほど、記述の中に高満足度を表現する傾向も高い。さらに、作品から深い影響を受けた観光客が、個人的な情感の表現が多い。その情感的な体験は、観光地イメージを向上させる効果も見られる。したがって、中国人観光客誘致のため、アニメツーリズムを展開する時、中国の二次元市場を調査し、観光客と情感的に共鳴できる観光資源を作り出すことは有利であろう。

#### 主要参考文献

大久保立樹、室町泰徳 旅行ガイドブックとロコミの言語解析による訪日外国人の観光地イメージに関する研究、都市計画論文集、Vol. 49、 No. 3、 pp.45-56、(2014)

山村高淑 交流の仕組みとしてのコンテンツツーリズムー21世紀型の観光まちづくりを考える、観光とまちづくり、No.518,pp.36-38. (2015)

#### 分科3-2

### 「シャングリラ」から「香格里拉」： 1990年代以降における中国雲南省中甸県の観光化をめぐって

BAI LU(駒沢大学)

1933年、イギリス出身の作家ジェームス・ヒルトンは、チベット奥地の秘境を舞台とする小説『失われた地平線』を世に送り、ハリウッドでの映画化などを通じ、架空の理想郷「シャングリラ」を広く流布するようになった。小説の刊行から70年近く過ぎた2002年に、観光による地域振興の起爆剤として、中国雲南省北西部にある迪慶蔵族(デチェン・チベット族)自治州の行政中心地・中甸県が、「香格里拉」県への改名を正式に発表し、シャングリラの中国語訳「香格里拉」を冠ることになった。

本発表は、英語圏の小説に書かれた想像上の地名・シャングリラが、70年近くの年月を超えて中国の实在の町・中甸に流用されたことの意味に注目しながら、中国語の地方志やガイドブック、旅行記および新聞・雑誌記事などを手がかりに、中甸県がシャングリラ県への改名の経緯を辿るとともに、改名という営みが中甸県の観光業や雲南省のイメージ戦略にいかなる影響を与えているかを考察する。

具体的には、まず、1990年代から発足した雲南省の「観光立省」政策や2000年代から始動した「西部大開発」の国策の影響のなか、雲南省が行った「ディスカバー・シャングリラ」キャンペーンについて整理する。次に、貧困県であった中甸県がライバル県との競争を勝ち抜き、シャングリラ県への改名に成功した経緯を明らかにする。最後に、改名を契機に、経済発展から取り残された山奥の貧困県から、ユートピア幻想の一翼を占める理想郷への脱皮を果し、観光を基幹産業として成長させてきたシャングリラ県の観光開発の現状と課題について検討する。

## バナナ表象から見る東アジア文化史： 帝国主義の時代から冷戦期まで

岸川あゆみ(名古屋大学)

バナナは、私たちの生活で最も身近な食物の一つだ。一方で、その生産・輸送・消費を通して、様々な地域間の国際関係を表す側面も持っている。こうした特徴から、バナナ表象に注目して、国際関係に迫る研究が行われてきた。従来の研究では、米国—中南米、欧州—ACP諸国が主に検討対象にされてきたが、東アジアも例外ではない。

例えば、20世紀初頭に、当時の植民地・台湾から日本に輸入された安価なバナナは、帝国支配の象徴でもあった。また、こうした帝国主義の時代における関係性は、第二次世界大戦終結以降の冷戦期においても、影響を残していた。バナナ表象もその構図を反映しており、帝国主義の時代に形成された南国のエキゾチシズムが戦後日本においても見られた。

さらに、冷戦下の国際関係が築かれてゆく過程で、日本市場のために、米国がフィリピンをバナナの大規模生産地に変える等の新たな形勢が生じた。その結果、バナナを介した東アジアの国際関係は、東南アジア・米国、そして中南米を含む環太平洋地域を繋ぐものへと広がっていった。この変化に伴い、東アジア各地域において、バナナ表象にも、これら環太平洋地域を跨いだ冷戦下の国際関係や文化影響が描きこまれた。

以上のように、バナナが持つ地理的・時間的広がり、国際関係が大きく変化した20世紀における、東アジアの文化交渉のあり方を広く捉えるために有効な切り口だと言える。

本研究では、バナナが描かれた映像作品や文芸作品、楽曲を対象に、バナナ表象の時代・社会背景を考察することを通して、20世紀の東アジアを中心としたダイナミックな文化の変容を明らかにする。

## 日本の老人文学に於ける用語定義の提言： 前期高齢者・後期高齢者・超高齢者を中心に

房京姫(高麗大学)

日本の社会は2007年、超高齢社会に突入し、人口の高齢化に伴う高齢者の雇用問題、高齢者介護の問題、高齢者の医療の問題などさまざまな問題に直面している。このような社会問題は、文学作品の重要な素材となって文学作品の中の高齢者と高齢者の生活を表現し始めた老人文学ジャンルに発展した。社会の変化に応じて、作家が文学作品の中に、社会の一面を表わしたとすると、そのような文学作品を研究するのは、社会が直面している一面を統計や数値だけではなく、現実感に充満している題材で認識し、理解し、疎通するためである。人口の高齢化の世界的な傾向の中で、日本社会の高齢人口問題や高齢者文学研究の連携が有意義であると判断される理由は、第一に、日本の社会が世界的にも人口の高齢化が最も急速に進行されている国の一つであるだけでなく、それに伴う高齢者人口問題に起因する社会問題の深刻さが社会全般に広がっているからだ。第二に、文学は社会と社会問題を積極的に反映し、それに共鳴して展開され、社会福祉や老人学で扱う数値や統計ではなく、実際の生活の問題、人間関係の問題に対する省察を通じて問題にもっと現実的なアプローチが可能であるからだ。しかし、高齢者の文学の題材が現実の問題と極めて密接な関係を結んでいるという点で、統計資料や数値で表れる問題のポイントを確認する必要があり、社会福祉学、老人学などの分野と融合研究の必要性も切実である。このように、他の分野との融合研究を進める際、用語の整理の必要性が台頭される。したがって、本論文では、高齢者の文学研究において、高齢者の年齢区分による用語の整理の必要性を論じたいと思う。文学研究においても、高齢者の年齢区分に応じて、前期高齢者、後期高齢者、超高齢者などの用語を定着させ、他の分野との融合研究を行う時、混乱を避け、論旨を明確にするのが本論文の目的である。



## 森崎和江における朝鮮の受容と表出の様相： 朝鮮の神話や伝説の影響を中心に

反町真寿美(高麗大学)

詩人、作家の森崎和江は1927年、当時の植民地朝鮮大邱にて生まれ、自らの進学や、教師であった父の転勤等により慶州、金泉を移り住みながら成長した植民二世である。彼女は主にルポルタージュ作家や思想家としての姿を取り上げられることが多く、彼女の詩人としての面に注目が集まることは、これまでほとんどなかった。しかし、森崎は朝鮮に暮らしていた12~13歳の頃に詩を書き始めたと言っており、彼女の表現の原点は、朝鮮生活の中で培った感性のもとに綴られた詩であるといえよう。そして「森崎和江は、いつも『詩』を語っている」といった森崎の散文についての評価は、森崎の表現の底流に存在する詩の心を指摘し、森崎の生み出すすべての表現が、詩を基盤としていることを示唆している。したがって、森崎の詩人としての姿を追うことは、森崎を語る上で欠くことのできない作業であると考えられるのだ。

では、森崎が詩心を育んだ朝鮮において実際に目にしたもの、耳にしたものは一体どのようなものだったのか。いかなるものを吸収し、それが彼女の表現へと繋がったのか。森崎が生まれた大邱で目にした風景、そしてその後移り住んだ歴史の香り漂う慶州での体験、大坂金太郎の記した『慶州の伝説』や森崎の家に手伝いに来ていた「ネエヤ」が教えてくれた朝鮮の「おはなし」、そして共に歌った朝鮮の歌等……本発表では、森崎が幼い頃にその身体に吸い込んだ朝鮮のあらゆるもの——特に当時目にし、耳にしたと考えられる朝鮮の神話や伝説の影響を中心に、それらが森崎の詩の中にどのように現れているのかを探りたい。

## 妖怪作品『墓場鬼太郎』における水木しげるの 異界観と戦争体験

王喬丹(東京外国語大学)

水木しげる(1922-2015年)は、日本で最も有名なマンガ作者の一人である。アジア・太平洋戦争における激戦地ニューブリテン島での戦闘、負傷経験を持つ漫画家である水木しげるは戦後、戦記漫画、妖怪漫画などを描きつづけた。戦記漫画では水木自身の戦争体験は決定的な重みを持っている一方、彼の妖怪漫画も例外なく、自らの戦争体験に大きな影響を受けたと言える。その中でテレビアニメ化された『ゲゲゲの鬼太郎』は貸本時代に描いた『墓場鬼太郎』を改名したものである。

子供向けの作品に偏る『ゲゲゲの鬼太郎』とは違い、『墓場鬼太郎』はグロテスクに満ちたシーンが多くある。このようなストーリーの構成は水木の戦争経験から大きな影響を受けたと思う。この観点にしたがって、水木は創作した妖怪作品を通じて戦争で失ったものを隠喩的に語り、その経験を後世に伝えられる。

妖怪漫画は、客観的描写を中心とする戦記漫画とは違い、水木しげるが戦争時の精神世界、戦争後のトラウマ、妖怪漫画を書き出す原因を垣間見ることができると考え、水木の妖怪漫画、戦記漫画の対照分析を通して、『墓場鬼太郎』におけるストーリーの構成の原因を明らかにする。

そのため、本文は、水木自身の言葉と漫画の内容に結び付け、彼の戦争体験と『墓場鬼太郎』の内容の繋がりを探してみる。『墓場鬼太郎』は水木しげるの戦争経験に根ざして書かれていることを論証してみたいことは、本文の目的である。

## 穆時英の作品における「ステッキ」について： 日本で現れた「ステッキ・ガール」との関わりを中心に

冉念周(一橋大学)

穆時英は中国文学史において「新感覚派」と呼ばれる集団の一員であり、彼の同人には劉呐鷗、施蛰存などが数えられる。穆時英は都市を「新感覚的」に書くことにより名を挙げ、作品においては近代都市の産物と流行、例えば百貨店、自動車、ダンスホール、カクテルなどが頻繁に登場する。本発表で取り扱う「ステッキ」もそれら都市の流行の一例である。

穆時英の作品では、「ステッキ」が最も頻繁に登場しているのは小説「五月」と「暇潰しにされた男」(原題:「被当作消遣品的男子」)である。両作品とも、女性が主導する恋愛遊戯を描いており、「手杖」は独身男性が備えるべき物とされており、「暇つぶしにされた男」においては、「ステッキ」は女性の比喩としても使われている。このようなやや独特な「手杖」の使い方は、同人作家の作品、例えば劉呐鷗の「二人の時間の不感症患者」(原題:「兩個時間的不感症患者」)や、戴望舒の詩「過時」などにも見られる。

一九二〇、三〇年代中国の雑誌には、「ステッキ」はファッションナブルな装飾品として描かれ、女性の比喩にはなっていなかった。一方、独身者の持つ「ステッキ」として容易に連想されるのは、ほぼ同じ時期に日本で現れた「ステッキ・ガール」である。一九三〇年では、ステッキ・ガールは一九三〇年代の大都市で発展された、一種の新しい、異様な風俗として紹介されている。よって本論では、穆時英の「暇つぶしされた男」を中心に、同人作家の作品における「ステッキ」が果たしている具体的な機能を、同時代に日本で現れた「ステッキ・ガール」と関連しながら説明することを試みる。

## 日本学者コンラドと韓国

塚本善也(中国文化大学)

本発表の主演はニコライ・ヨシフォヴィチ・コンラド(1891-1970)である。若くして新設大学の学長(1920-1922)に就任、レニングラード大学やモスクワの大学、また科学アカデミー日本研究所(所長)に勤め、ソ連における日本研究の基礎を築き、「ソ連日本学の父」と呼ばれる人物である。著作は多岐にわたり、『方丈記』『伊勢物語』『源氏物語』『平家物語』等から漱石『こころ』、プロレタリア文学など多数の翻訳、歌舞伎などの芸能研究、古代から現代までの日本史研究、さらに日本以外にも古今東西の文学、思想、歴史、特に『孫子』『呉子』といった中国の古典や歴史の研究まで幅広く手がけた。

またコンラドはネフスキー、ポリヴァノフ、ローゼンベルグ、エリセーエフ等の傑出した学者とともにロシア日本研究を大きく開花させた一人でもある。彼らの仕事はそれぞれ独自の光を放ち、今日も色あせない学術内容を誇る。では、コンラドを上記の者と区別し、その日本学の特徴となるものは何か。

コンラドは1914年から1917年までペテルブルク大学から派遣され日本留学をはたした。主な研究テーマは日本の文学、哲学、言語である。この長期留学が後の日本学の礎となったことは当然として、看過できないのは当時日本の併合下に置かれて間もない韓国を訪れ、フィールドワークを重ねたことである。残念ながら、その成果は「19世紀と20世紀のはざまにおける韓国人の社会組織と精神文化の概要」一篇に探るほかなく、全容を掴むのは難しい。しかし、若き日の韓国体験は生涯忘れられない、深い印象を残したといわれる。だとすれば、それはコンラドの日本研究を新たな視角から読み解く鍵になるのではないか。本発表ではこうした問題意識のもとで、日本学者コンラドと韓国について検討してみたい。



## 2部

### パネル13

#### 東アジアにおける日本語資料・文献の諸相

高麗大学校グローバル日本研究院

#### パネル構成

座長：嚴仁卿	
司会：松田利彦(国際日本文化研究センター)	
発表1	韓国における植民地期日本語文献資料化の現況について 嚴仁卿(高麗大学)
発表2	中国における戦前日本語定期刊行物の保存状況 呉佩軍(華南師範大学)
発表3	近年台湾における日本植民統治資料の発掘と整理 陳姪媛(中央研究院)
発表4	日本における植民地関係資料の現状 加藤聖文(国文学研究資料館)
討論：松田利彦(国際日本文化研究センター) 鄭炳浩(高麗大学)	

#### パネル概要

このパネルは<東アジアにおける日本語資料・文献の諸相>というテーマで、韓国、中国、台湾、日本など、それぞれの地域で刊行された膨大な日本語文献の概況、及び資料化の現状を検討することを目的とする。東アジアに散在しているこれらの日本語資料は、百年を越えてしまった物もあり、場合によっては題名だけ残ったまま散逸しつつあるが、各地域における20世紀前半の日本語文献という分野の最先端で研究を進めている専門研究者たちが、その資料化に関する現況を語る。国際日本文化研究センター松田利彦教授の司会で進行される予定で、韓国は高麗大学校の嚴仁卿教授が「韓国における植民地期日本語文献資料化の現況について」、中国は華南師範大学の呉佩軍準教授が「中国における戦前日本語定期刊行物の保存状況」、台湾は台湾中央研究院の陳姪媛副研究員が「近年台湾における日本植民地統治資料発掘と整理」、日本は国文学研究資料館の加藤聖文準教授が「日本における植民地関係資料の現状」というタイトルでそれぞれ報告する。なお、松田利彦教授と高麗大学校文科大学鄭炳浩学長がコメンテーターを受け持ち、東アジアにおける日本語文献のデータベース化の現状とこれからの課題と展望について討論を深める。

## パネル14

### 「近代満洲」における医療・衛生管理技術の導入と社会変容

近代満洲における技術導入と社会変容

#### パネル構成

	座長:上田貴子(近畿大学)
	司会:上田貴子(近畿大学)
発表1	満鉄大連医院本館が持つ社会的意味 西澤泰彦(名古屋大学)
発表2	巡回診療の地政学 — 近代日本が内モンゴル東部で実施した巡回診療を中心に 財吉拉胡(内蒙古民族大学)
発表3	「満洲国」の畜産政策:防疫を中心に 小都晶子(摂南大学)
発表4	帝国の周辺領域における少数民族の記憶の地層 — フルンボイル地域の近代から 坂部晶子(名古屋大学)
討論:蘭信三(大和大学) サヴェリエフ・イゴリ(名古屋大学)	

#### パネル概要

19世紀末以降、東北アジアの森林・草原地帯に交通・運輸・金融・移民によって急激な変化がもたらされ、「近代満洲」が誕生した。この変化の主要な要素の一つが帝国日本の植民地経営である。しかしそれだけではなく、対抗し時には協力しながら進行した在地社会の近代化要素も存在した。これらによって、鉄道に加え農業・工業・土木・医療・社会管理・官僚機構等さまざまな近代的テクノロジーの導入・普及がなされ、これらは1945年以降も新中国で取捨選択され、継承されていった。

本パネルではこのうち鉄道建設と医療をとりあげる。ペストをはじめとした感染症にみまわれた「近代満洲」において、医療技術は植民者社会にも在地社会にも必要とされるものでもあった。鉄道の建設と運営はそうした状況を拡大、拡散させる基盤である。さらにそこに導入される衛生観や管理方法は人のみならず家畜にも向けられるものであった。家畜は軍事的な資源であるだけでなく、草原・森林を内部にもつこの地域においては近代以前から原住する少数民族にとって生業や社会にかかわる重要な問題であった。このような関心に基づき4人のパネリストが以下のような問題をとりあげる。

西澤は満鉄の大連医院本館の建設がもつ在地社会をも視野に入れた社会的意味を検討する。財吉拉胡は内モンゴル東部における巡回診療をはじめとした日本の医療技術の普及活動とその限界を帝国日本が去ったのちの在地社会の医療から考える。小都は「満洲国」における畜産政策をとりあげ、植民者の獣疫対策を検討する。坂部はロシアが建設し日本が運営していた東清鉄道の路線にあるフルンボイル地域の民族の変遷について取り上げる。

これらの報告を踏まえて、このような技術導入による近代化は何を意味するのか、この地域に植民地経営を展開したもうひとつの帝国ロシアの視点、現代からの植民地近代の理解に対する社会学的視点から問題提起を行う。

## パネル15

### シニア産業の交流

シニア経済と高齢社会の対応(1)

#### パネル構成

座長：宋浣範(高麗大学)	
司会：李東祐(高麗大学)	
発表1	シニア創業の現状と展望 都賢奎(高麗大学)
発表2	中国シルバー経済と高齢社会の対応 彭希哲(復旦大学)
発表3	日本におけるヘルスケア分野のDX 遊間和子(国際社会経済研究所)
発表4	韓国の高齢化産業とGerontechnology 朴英蘭(江南大学)
討論：黄徳海(清華大学) 西下彰俊(東京経済大学) 朴昌東(高麗大学) 遊間和子(国際社会経済研究所)	

#### パネル概要

地球規模の少子高齢化が進んできているなか、アジア諸国における高齢者問題も深刻化している。高齢化率が最も高い日本では老々介護や認認介護など的高齢者が高齢者を介護する問題、最も早いスピードで高齢化している韓国では孤独高齢者や貧困高齢者などの問題、高齢者人口が最も多い中国では未富先老、未備先老などの社会問題を直面している。このように、日本、韓国、中国などのアジア諸国における高齢社会問題が顕在化しているなか、それぞれの高齢者対策や高齢者支援サービスのみならず、国々の協力も必要になってきている。本パネルディスカッションは、日本、韓国、中国、それぞれの国が直面している高齢社

会問題を、高齢社会の実態、Age Tech、デジタルヘルス、社会保障政策など多様な側面から自由に討論することによって、時代発展に伴い、日中韓の国際交流の発展、及び高齢社会問題の解決における三カ国の協力の推進を目指している。

韓国側では、高齢者に関連する先行研究の動向と、科学技術の発展に伴ってきたAging Techの必要性、またデジタルの発展に伴ってきた高齢者産業の問題などについて論じる。それに対して、中国側では、高齢者サービス市場の現状・危機、中国の社会保障の現状問題などを明らかにする。他方、日本側では、日本におけるデジタルヘルスの発展・課題、日本の介護保険制度の限界性などの課題を検討する。

## パネル16

### ‘災害共存の時代’の相互協働と東アジア共同体へ

高麗大学グローバル日本研究院 社会災難安全研究センター

#### パネル構成

座長：金暎根 (高麗大学)	
司会：金暎根 (高麗大学)	
発表1	<レジリエンス>という問いと災害研究10年 — 未災学のための試論 金暎根 (高麗大学)
発表2	復興五輪とALPS処理水 — 福島復興をめぐるメッセージフレームと国民意識 河村和徳・遠藤勇哉(東北大学)
発表3	脆弱性(vulnerability)理論の誕生と災害 全成坤 (翰林大学)
討論：金京姫(韓国外語大学) 山泰幸(関西学院大学) 李權熙(韓国外語大学)	

#### パネル概要

本研究チームは、‘災害’を媒介にしながら<新東アジア共同体>はどのような形で理論化していくのかを目指している。‘災害’に対応し、安全・安心社会を夢見るのは、国籍・民族・国家を越える普遍性を持っている。しかしながら、国家及び地域は、それぞれの特殊な環境に影響を受け、その対応策は特殊性を持っている。この普遍性と特殊性を一足束に考えることなしには、国家を越えた新しい共同体としての安心・安全社会構築は一人歩きしてしまう恐れがある。このような、問題認識に基づいて今回は、四つの報告を用意している。まず①「<レジリエンス>という問いと災害研究10年-未災学のための試論」は、日本と韓国の10年間の災害論及び国際協力の問題を振り返ってみる。特に、2011年におきた3.11東大日本震災

は、日本社会を変えたのみならず、周辺国との関係へも影響をおよぼし、第二次災害を巻き起こしたのである。それに加わって、南海トラフ地震が予測され、その未災地の問題を考えざるを得ないことや周辺国または世界的な国際関係をどう考慮していくべきか、この残された課題をも考えていきたい。そして、②「福島原発の汚染水処理と国際<政治社会学>」は、実際に日本で行われている汚染水の問題をアンケート調査などのデータをもって、今後の解決方向を考えてみたい。また、③「バルタンの視点から再考する災害記憶- 女川小学校と寄り添いながら」では、女川小学校の犠牲者らの親たちと、その災害被害を乗り越えるための努力に、犠牲者の家族当事者との交流を紹介する。災害からの復興を犠牲者の視線から考え直す実践的に活動を紹介していきたい。最後に④「脆弱性(vulnerability)理論の誕生と災害」は、災害を考える際に重要なテーマとして、弱者の問題を脆弱性の問題からアプローチし、根源的な災害対策の問題を考えていきたい。この四つのテーマに対して、専門家でもあり、実践家でもある先生たちの討論を通して、内容を深めていきたい。

## 日本古典文学の想像力

漢陽大学 日本学国際比較研究所

### パネル構成

座長: 李康民 (漢陽大学)	
司会: 李康民 (漢陽大学)	
発表1	江戸怪談の普遍と特殊 木場貴俊(京都先端科学大学)
発表2	紫式部の想像力、「源氏物語」の構想力 金小英(釜山大学)
討論: X. Jie Yang(カルガリー大学) 趙恩鶴(崇実大学)	

### パネル概要

周知のように、古典文学には、時代を超える普遍的な価値が込められていると言われる。そのような普遍的な価値によって、古典文学の生命力は維持されていると言えるだろう。しかしその一方、日本古典文学には、そのような普遍性ととも文化的特性による特殊性も存在していると思われる。特に、日本古典文学の場合は、時代を超えて蓄積されてきた膨大なレトリックの世界があり、そこには日本人の多様な想像力が表象されている。今回のパネルでは、日本古典文学を媒介に、日本人の喜怒哀楽、自然観、動物観、信仰や異界に関わる想像力の実体を探り、その文化史的な意味を考えてみたい。

## アジアにおける日本企業の発展とビジネスモデル

国立台中科技大学・日本研究センター

### パネル構成

座長: 黎立仁 (国立台中科技大学)	
司会: 黎立仁 (国立台中科技大学)	
発表1	世界情勢の中の台湾半導体産業と日本半導体産業との連携について 吳嘉鎮 (名城大学)
発表2	兼営織布企業の金巾製織会社と綿織物輸出市場との関係 亀井大樹 (同志社大学)
発表3	長野県下伊那郡における満洲農業移民と養蚕農家との関係 木村多嘉子 (京都外国語大学)
討論: 黎立仁(台中科技大学) 張銘今(国立台中科技大学) 曾耀鋒(国立台中科技大学)	

### パネル概要

アジアは地域経済統合の動きが活発化し、RECPやCPTPPなどをめぐって、新しい局面に入っている。一方、アジアが目覚ましい成長を取り込むアベノミクスのもとで、日本企業は成長戦略として、アジアを中心にグローバルな戦略を展開し、一段とアジア進出を果たした。ちなみに、2013年を境に日本企業の対アセアン投資はすでに対中国投資を上回っている。国際ビジネスの展開やアジアの進出に際して、ビジネスの成功につながる要因としてどう捉えるかは重要なポイントとなるのである。それゆえ、日本企業の経営パターンやビジネスモデルは如何なるものか、どんな展開をしているかをめぐって、本パネルは以下のように、日本企業を中心とした、いくつかの課題を設けて探究する。なお、昔の養蚕農家と満洲農業移民の深い関係を浮き彫りにさせ、歴史的な検討も行われる。



## 東アジアの平和と沖縄問題

韓国外国語大学・統一研究院(沖縄と東アジアの平和)

周辺地域はどう影響しあっていたのか。これらの問いを通して本パネルは、沖縄返還から50年近くが経過してもなお解決しない基地問題の理解に寄与すると共に、沖縄とアジア周辺諸国の間に互恵的な関係を見出し、自由で柔軟な未来構想に基づいた東アジアの平和構築の可能性を探る。

### パネル構成

座長：李昌玟(韓国外国語大学)	
司会：李昌玟(韓国外国語大学)	
発表1	変革する主体を求めて：戦後沖縄の民衆闘争の歴史的区分と変遷 上原こずえ(東京外国語大学)
発表2	沖縄における基地問題をめぐる政治的機会構造の理論的考察 — 1990年代から現在までを評価するために 森啓輔(専修大学)
発表3	米軍占領期沖縄における沖縄人基地労働者 ：戦後復興を再考する 大城章乃(フリードリヒ・アレクサンダー大学)
討論：岡坂健太郎(共同通信ソウル支局) 崔恩美(峨山政策研究院) 李奇泰(統一研究院)	

### パネル概要

これまでの沖縄における米軍基地問題にまつわる研究は、日本と米国という二項対立の枠組みの中で展開される傾向があった。しかし、近年注目される中国と米国の関係に加え、継続的に続く中国・韓国・台湾・日本間の東アジアにおける軍事的緊張を踏まえると、基地問題を中心とした、いわゆる「沖縄問題」をより多角的な視点から検討する必要がある。本パネル発表は沖縄における社会・経済・政治的事象がアジア周辺諸国とどのように関係するのかを再考すべく企画されたものである。冷戦構造の激化と共に進む米軍基地建設に反対する住民の主張から見えるアジア周辺諸国との関係は何か。今日も続く反基地運動の中で国家を超越した繋がりは何を示すのか。沖縄人基地労働者の労働とアジア

## 日本の「民主主義」を再考する

ソウル大日本研究所・大阪市立大人権問題研究所

### パネル構成

		座長：金孝眞(ソウル大学)
		司会：金孝眞(ソウル大学)
発表1	戦後民主主義のポスト戦後の読解 — 文部省教科書『民主主義』と冷戦自由主義	鄭知喜 (ソウル大学)
発表2	在日コリアンから見た日本の民主主義	朴一 (大阪市立大学)
発表3	価値志向の日本外交と中国	吳承燾 (ソウル大学)
討論：徐東周(ソウル大学) 古久保さくら(大阪市立大学)		

### パネル概要

国際秩序の変化の中で民主主義は単なる政治理念だけではなく、日本社会、そして東アジアを考える際、人々の生活に直接関わり、変化をもたらす重要な問題になりつつある。日本の場合、今まで民主主義をめぐる議論は主に戦後民主主義の自明性と有効性についての批判を中心に行われてきたが、フェミニズムとダイバーシティの尊重などの新しい課題を前に、日本社会における民主主義の意味を考えなおすことは依然重要な課題である。

また、日本と外国の関係においても「民主主義」の価値と重要性は高まっているように思える。例えば、最近ギクシャクしている日韓関係の原因の一つとして、民主主義をめぐる両国の観点の違いが挙げられるだろう。また2010年代以降、特に安倍政権における日本の外

交戦略では民主主義という価値の共有が重要なファクターとして活用されている。即ち、日本社会の枠組みを超えて、民主主義の意味とその内実が問われ、それが国際社会にも影響をもたらす時代になってきたのである。

ソウル大日本研究所と大阪市立大人権問題研究所が共同参加するこのパネルでは、戦後から現在までの長いスパンにかけて、日本の民主主義をめぐる議論と実践を考察することを目的とする。具体的には戦後における「民主主義」の探索・2010年代における日本の価値観外交・在日コリアンから見た日本の民主主義というテーマで両機関から三人が報告し、二人が指定討論を行う。これにより、東アジアにおける、代表的な民主主義国家として日本と韓国の研究者が日本の民主主義をめぐる言説と実践を批判的に再考し、これからの展望を提示することを目的とする。

## COVID-19パンデミック下の 日本社会の経験と社会科学研究

東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター

### パネル構成

座長：石田賢示 (東京大学)	
司会：王帥(東京大学)	
発表1	東アジアにおける研究発信拠点の構築 — 東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターの取り組み 王帥(東京大学)
発表2	コロナ禍における社会的孤立 — 東大社研パネル調査(JLPS)のWEB調査の試みと分析 石田賢示 (東京大学)
発表3	コロナ禍における中高生と保護者の社会意識 — 子どもの生活と学びに関する親子調査(JLSCP)から 大崎裕子 (東京大学)
討論：竇心浩(上海外国語大学) 湯玲玲(シンガポール国立大学)	

### パネル概要

2020年1月から世界的に流行し、同年3月にはWHOがパンデミックに至ったと宣言したCOVID-19は、日本社会にも大きな影響を及ぼした。強制力を伴うロックダウンとは異なり、外出・行動自粛の要請という形でさまざまな社会的、経済的活動が停滞することとなった。人びとの働き方、家族生活、社会的交流の姿は大きく変化し、そのなかで適応できる層とできない層のあいだで格差・不平等も生じた。また、COVID-19の経験を通じて人びとの社会意識も変化した可能性がある。

東京大学社会科学研究所および附属社会調査・データアーカイブ研究センターでは、

COVID-19に関して人びとがどのような経験を持ってきたのかに関する全国調査を複数実施してきた。これらの調査データの特長の1つは、COVID-19の流行前からのパネル調査の情報を活用できることである。

さらに、COVID-19は学術研究環境にも大きな影響を及ぼした。そのなかで、同センターでは社会科学研究に関する国際的な活動を継続してきた。国際移動が困難となる一方、各種デジタルツールの活用により新たな国際活動の形も見出すことができるようになってきた。

本セッションではセンターの研究事業について紹介するとともに、COVID-19に関する調査データの研究事例についても報告する。まず、センターの国際的活動の概要と展開、東アジアのデータアーカイブ・ネットワークの強化及び研究発信拠点の構築事業について報告する(王)。続いて、「東大社研パネル調査」のウェブ特別調査を用いた、人びとの社会的活動や家族生活に関する知見を報告する(石田)。さらに、「子どもの生活と学びに関する親子調査」からわかった人びとの経験を報告する(大崎)。以上の内容に関する議論を通じ、今後の東アジアにおける研究交流を深める場としたい。

## 国民国家と歴史認識 : その限界・解決の模索

翰林大学日本学研究所・人文韓国プラス支援事業

### パネル構成

座長：徐禎完(翰林大)	
司会：鄭美愛(世宗研究所)	
発表1	日台関係のなかの朝鮮半島出身者 楊子震(南台科技大学)
発表2	記憶と変化の錯綜する靖国神社の戦後 金炫我(翰林大学)
発表3	日韓の市民社会の成長と歴史認識問題 権妍李(翰林大学)
討論：天江喜久(長榮大学) 今井勇(東京外国語大学) 木村幹(神戸大学)	

### パネル概要

翰林大学日本学研究所はHK+事業の2年次2段階のアジェンダである「東アジアのアイデンティティと文化権力の闘争」を研究課題にして研究事業を行っている。今回の「東アジア日本研究者協議会」で「東アジアにおける歴史認識問題」をテーマにして、国民国家と歴史認識について研究発表を行う。帝国日本を経験した東アジアの諸国は各々異なる歴史的経験を通して異なるアイデンティティを形成してきた。歴史問題による葛藤を議論する際、経験と記憶の根底に横たわっている国民国家的違いを認識することから、その限界を乗り越える方法を模索することができる。金炫我(翰林大学)は帝国の記憶が変形された形で再現・表出され、続いている靖国神社の役割と機能について議論する。GHQ占領以降、戦後の日本社会において変化しつつも戦前からの役割が続く中で錯綜する記憶を指摘する。楊子震

(台湾・南台科技大学)は帝国日本の植民地であった台湾での朝鮮半島出身者との関係様相、台湾の国民国家としてのアイデンティティ形成に与えた影響について議論する。戦前と戦後を時間軸にして、台湾という空間における朝鮮半島出身者との相互関係及び「人の移動」という観点から国民国家の形成及び歴史記憶の形成過程を検討する。権妍李(翰林大学)は歴史認識の問題から端を発した日韓両国間の葛藤が市民社会・市民運動を通して克服・解決できるのかについて質問を投げかける。日韓の歴史認識問題における日韓の市民運動は「国民国家」的限界を乗り越える形で解決策を提示することができるのかについて議論する。

## COVID-19がもたらしたアジアにおける移動と労働への影響

(次世代)アジアにおける人の移動を考える会

### パネル構成

座長: 齋藤あおい (一橋大学)	
司会: 飯尾真貴子 (一橋大学)	
発表1	パンデミック下での中国都市における家事労働者たち 齋藤あおい (一橋大学)
発表2	Covid-19が国際移住労働者に与えた影響 — マレーシアのホテル業を事例に 高橋加織(お茶の水女子大学)
発表3	コロナ禍における中国帰国者介護施設 山崎哲 (一橋大学)
発表4	コロナ禍における台湾人労働者の不安定性の顕在化 張雅晴 (一橋大学)
討論: 飯尾真貴子(一橋大学) 齋藤あおい(一橋大学) 高橋加織(お茶の水女子大学) 山崎哲(一橋大学) 張雅晴(一橋大学)	

### パネル概要

新型コロナウイルス(COVID-19)の世界的流行は、人々の心身の健康を脅かすだけでなく、家庭や労働、交友関係など、生活の様々な側面にまで影響を及ぼしている。

本パネルは、とくにアジアにおける国際・国内移住者が被った影響に着目する。マレーシア、中国、日本、それぞれのフィールドにおいて、COVID-19によって浮き彫りにされた問題について以下の報告をおこなう。

アジア諸国のなかには、外貨獲得のため観光を主要産業と位置付ける国も多い。マレー

シアはそのような観光立国の一つである。COVID-19パンデミックが突如起こったことで、マレーシアの国境閉鎖は約1年以上継続し、観光業は打撃を受けている。ホテル業で働く外国人移住労働者に焦点を当て、現状報告をおこなう(高橋)。

一方日本では、インバウンド産業によって必要とされた在日外国人労働者の多くが失業する/転職せざるをえない状況に直面している。就労を目的とする在留資格の下で日本に暮らす人びとが、失業や職探しに対処する過程を分析し、彼ら・彼女らが在留資格に伴う制限と在留の不安定性をいかに経験していたのかを明らかにする(張)。

COVID-19によって制約を受けたのは国境を越える移動のみではない。中国では国内の移動も困難となった。都市部においては農村からの出稼ぎ女性が家事代行サービス業に多く従事するが、顧客の家に入るという労働の性質上、著しい影響を受けた。北京・上海といった大都市で働く出稼ぎ女性たちがどのような困難に直面したのか、支援団体の取り組みを参照しつつ報告をおこなう(齋藤)。

本報告では過去の移動から連続する事象も扱う。中国残留日本人(中国残留孤児・婦人等)には75歳以上となって介護を必要とする人たちが増えている。今日、当事者の利用を中心に想定した施設がかれらの子や孫らによって開設されている。こうした施設は中国残留日本人たちにとってなじみ深い中華料理を提供し、戦争体験を共有するなどの独特の機能をもっているが、COVID-19はその存続を危機に向かわせている。パンデミックが移住者にいかなる影響がもたらしているのかを検討する(山崎)。



## トランス-東アジア研究の模索 : 北東アジア-東南アジア連結性の現在と展望

(次世代)徐承元教授研究室

### パネル構成

座長: 許元寧 (高麗大学)	
司会: 佐藤太久磨 (漢陽大学)	
発表1	ODAからみた東南アジアと北東アジアの連結性 — 東南アジアODA投資の日韓比較を中心に  許元寧 (高麗大学)
発表2	防衛空間の拡大: 21世紀の日本の海洋戦略  金承賢 (ワシントン大学)
発表3	海洋を通じて見た東南アジアと東北アジアの連結性 — 南シナ海問題と中国海洋力強化への対応を中心に  蔡捷 (高麗大学)
発表4	東北アジア地政学の変化 — 韓国のTHAAD配置問題と地政学的影響を中心に  李承煥 (高麗大学)
討論: 尹錫貞(韓国国立外交院) 朴敬珉(高麗大学)	

### パネル概要

アジアの世紀が到来している。21世紀に入り、東アジアは再び世界の注目を集める地域として浮上している。経済、貿易、人口、文化など多様な方面で東アジア3国とアセアンを包括する東アジア地域は強力な影響力を行使している。それにもかかわらず、これらの地域について、韓国は一国または両国を対象とする研究に集中してきており、縦横に広がっている地域変化に歩調を合わせずにいる。

このような問題意識から、同パネルは「北東アジアと東南アジアの連結性」をテーマにこの地域の変化を把握しようとする。「アジアの世紀」に新しい世界秩序はエネルギーと人的資源、サプライチェーンの連結性と形態が文明と歴史を動かす原動力になるものとみられる。地理と空間の連結は、従来、地理的条件を基盤に造成された軍事、外交、国際関係を崩壊させ、新しい形態のグローバルパラダイム、ガバナンス、主要アクター間の地政学的競争をもたらす。連結は物流、資源、人的移動にとどまらず、金融、サイバー、宇宙空間を網羅する。人や企業、組織が先行したこうしたつながりに、最近では主要国も積極的に加勢し始めた。韓国の「新南方政策」、中国の「一带一路」構想、米国及び日本の「自由で開かれたインド太平洋戦略」などは、すべてConnectivityの拡大深化を前提とする。

パネル内では、現在急変しつつある東アジア地域の中でも、北東アジア-東南アジア地域間のつながりに関して起きている変化を、資金(money)、地政学的認識(mental map)、海洋(maritime)という「3M」に焦点を合わせて把握し、これにより今後トランス-東アジア的にどのような方向の変化があるのか展望してみたい。

## 動的な観点から見た後置文

汪聞君(大阪大学)

従来の統語分析は、書きことばを基準に行われ、それによる文法体系を用いてまた諸言語現象を分析するのが流儀である。しかしながら、言語学において、元来研究データとして扱われた言語現象は書きことばが主であり、それを基準に作られた文法体系(以降「書きことば文法」)でまたある書きことばを分析すると、それなりに帰納化でき、たとえ不都合な時があっても、多少再修正すればいい。一方近年では、話しことばについての研究が盛んになっている。これを書きことば文法の枠組みで分析して、問題点が大量に見られるのも至極当然である。その一つとして挙げられるのが後置文である。

後置文に関する従来の先行研究の多くは、後置要素がいわゆる通常の語順から移動されてきた要素と見做されてきた。一方、陸(2005)は、このような移動説が成立する前提は、一つの文において、そのすべての要素がしかるべき位置に置かれることで、いわゆる通常語順があってから移動が生じられることである。つまり、「文」を出来上がったものとして扱っており、「移動」には「動」があるにもかかわらず、「動」なしの通常語順をベースにして分析しているため、本発表はこのような分析を「静的」な統語分析と呼ぶことにする。

兼安・岩崎(2017)は、会話は自然進行型の行為であり、どのような展開になるかはあらかじめ決まっているわけではないと主張している。本発表はこのような考えを援用し、「動的」な分析と呼ぶ。「動的」な分析とは主に会話分析における考察手法であるが、このような手法は話しことばの統語分析にも応用できると考えられる。つまり「動的」な統語分析は、文が時間軸において話し手と聞き手の共同作業で次第に形成されていくプロセスを考察するものであると発表者は主張する。

本発表は、日本語、中国語、ベトナム語、タイ語における後置文に絞り、例文をあげながら

「静的」な分析の不合理性を具体的に指摘し、話しことばの統語分析における「動的」な分析の必要性を明らかにする。

### 参考文献:

兼安路子・岩崎勝一(2017)「多重文法 「こと」の分析を通して」鈴木亮子・秦かおり・横森大輔『話しことばへのアプローチ 創発的・学際的な談話研究への新たなる挑戦』ひつじ書房 pp.69-102.

陆镜光(2005)〈说“延伸句”〉《庆祝〈中国语文〉创刊 50 周年学术论文集》「延伸文について論じる」『「中国語文」創刊50周年記念學術論文集』商務印書館

## 中国語の結果複合動詞と日本語の 有対自他動詞との対照研究

郭帥 (上海外国語大学)

中国語の「動詞＋結果補語」構造(Verb-Resultative Complement Compound)に典型的な原因—結果型の構造(以下、VR構造と略す)がある。典型的なVR構造は、「他動詞＋自動詞(または形容詞)」という組み合わせからなり、何らかの働きが受け手の状態変化を引き起こすことを表す。このような2つの出来事の因果関係によって状態変化を表す文、つまり行為と結果を表す「結果構文(Resultative Construction)」という(石村2008)。この結果複合動詞(“推开”(押し開けた)、“哭湿”(泣き濡らした)などが挙げられる。)について、沈 阳、Rint Sybesma(2012)はこれが本物の「能格動詞の統語構造」であり、中国語の「能格動詞」でもあると指摘した。すなわち、構造からみると、生産性が高い連語である。また、VR構造全体が一つの動詞としての機能を有する。

一方、日本語の自他動詞の特徴の一つは有対自他動詞が多く存在することである。例えば、(1)a. 太郎がドアを開けた。b. ドアが開いた。有対自他動詞の意味関係を(2)、統語的特徴を(3)のように定義している(奥津1967:49)。(2)二つの動詞があり、自動[-Transitive]他動[+Transitive]という対立、およびそれに必然的に関連する特徴のちがいを除いては、全ての文法的、意義的特徴を共有する時、この二動詞間に自・他の対応があると言う。(3)a. N1 が N2 を V1 b. N2 が V2 (3)からわかるように、日本の有対自他動詞には使役交替ができ、同じく意味レベルの能格性が見られる。

では、中国語の結果複合動詞VRのすべては能格動詞なのか。そして、使役交替だけで判断すればよいのか。中国語結果複合動詞の能格性をめぐり、中国語結果構文VRの意味と統語、そして、日本語の結果複合動詞や有対自他動詞との対照から、中国語・日本語の類型論的な共通点と相違点を考察する。

## オンライン日本語授業の試み : 航空日本語を中心に

陳姿菁 (開南大学)

本研究では、大学の第二外国語である日本語の授業におけるオンライン授業の実施及びICTコンテンツの活用に着目した実践の報告とその可能性について述べる。新型コロナウイルス感染症(COVID-19)によるパンデミックが引き起こした影響は、教育に大きな衝撃と混乱をもたらした。海外の多くの国がオンライン授業を開始してから1年以上も経った2021年5月に台湾ではクラスター感染が発生し、その感染拡大に伴い、台湾も対面授業からオンライン授業への移行を余儀なくされた。教師、学生、保護者たちの多くは、突然の変化に困惑し、オンライン授業に対する疑問の声が相次いだ。これまで対面授業で行われていた授業のやりかたをそのままオンライン授業に持ち込むのは物理的な側面から言ってもなかなか難しい。それゆえ、ICTの活用を通じてオンライン授業をサポートすることが重要な課題になってきている。本研究では、研究者が開発したアプリや既存のデジタルツールなど複数のツールを導入し、講義、評価、宿題、テストなど従来対面で行っていた教室活動をオンライン授業においても同様の効果が得られるように工夫した。授業終了後に授業の学習者に意見調査を行い、結果として、オンライン授業と対面授業を比較したところ、学習者の感覚では両者に大きな違いはないことがわかった。また、オンライン授業で導入されたデジタルツールについても、学習者から肯定的な評価が寄せられた。今後のオンライン授業をデザインする際の参考になれば幸いである。

キーワード：オンライン授業、新型コロナ、classroom、Web APP、日本語学習

## 翻訳者は本当に不要か : オンラインツールに出力された訳文の対照

薛芸如(元智大學)

筆者は学生時代に訳した本は含まずに、かれこれ約30年近く翻訳の仕事をしてきた。最近、編集の機能を持つソフトや、翻訳機能を持つオンラインツールが、FBに設けられた翻訳者のグループ間でしばしば話題に取り上げられている。翻訳を履修する学生も時々google translateにかけたものを宿題として提出してくる。また、業者が一回google translateにかけた訳文を、翻訳者に編集する仕事を発注することもある。教育現場においては、もはやこの流れを食い止められないのが現実である。翻訳授業では、従来通りの翻訳だけではなく、機械翻訳に出力された訳文をポストエディット(post edit)する能力を養成することも求められる時代に突入している。

本文では、ビデオのナレーションをgoogle translateとDeepLという二つの翻訳ツールに訳させて対照し、その相違が主にどのような文によって生じるかを洗い出したい。むろん、原文のジャンル、長さによってさまざまな現象を取り上げることができるが、今回は大学三年生を相手に教える、日本の不思議さについておよそ3000字で述べられている文章について、[修飾文+名詞] や、接続詞の使用、主語が欠けている文に関して、出力された中国語の文章を見てみたい。

原文は81文で組み立てられた文章で、まずJ-readabilityにかけて文章のレベルを判定する。訳文を比較したところ、DeepLはパラグラフ単位で翻訳する傾向があるのに対して、google translateは文構造を保つように翻訳する傾向がある点に違いが見られる。つまり、DeepLでは [修飾文+名詞] の構造は、起点言語(source language)の埋め込み文(embedded sentence)が因果関係(causality)や時間序列(time sequence)を並べる重文(compound sentence)に出力される。よって、接続関係も多様となる。一方、構造を保つように訳すgoogle translateに

出力される訳文では接続関係の表現は数が少ない。また主語が現れない文においては、照応関係が読み取れるのはDeepLであり、google translateはその点が比較的劣っている。すなわち、訳文がその言語の母語者の書いた文により近い自然さを生み出すには文単位より大きいパラグラフ単位で分析する能力が必要なため、大学生の翻訳授業では言語知識を運用する文章の読解力、物語る力が問われることになる。

キーワード google translate・DeepL・ポストエディット(PE)・文構造・パラグラフ



## 日本語文ディクテーションの認知メカニズムに関する基礎研究 : 日本語学習者の作動記憶容量, 文の種類視点から

邵雲彩 (広島大学)

第二言語(second language: 以下, L2)の教育現場では, 聴解における音声知覚能力を向上させるため, ディクテーション(dictation: 以下, D)という学習法が広く取り入れられている。Dは, 音声を聞いてそれを文字に書き起こす行為である(Rivers, 1981)。Dの訓練効果が明らかにされているが, Dの有効性を支える認知メカニズムを解明する研究がほとんどされていない。そこで本研究では, D遂行中の言語処理に焦点を当て, D原文中に無意味語の有無を操作し, 音韻保持と意味処理に及ぼす作動記憶(working memory: 以下, WM)容量の影響を明らかにする。無意味語の挿入により, 音韻保持と意味処理の両方に負荷をかけるため, WM容量の異なる学習者がD遂行時に資源配分の様相が調べられる。具体的には, 日本語学習者のWM容量の大小を要因として操作し, 有意味語または無意味語が含まれる2種類の文のDに遂行成績の違いが生じるか否かを明らかにする。形態素とアイディアユニット(idea unit)を指標としたD文の正再生率を従属変数とする。さらに, D遂行時における音韻保持と意味処理の程度を検討するために, D遂行後に音韻・意味再認テストを行い, その正再認率も従属変数として用いる。

Dの遂行過程において, WM容量の大きい学習者は, より効率よく保持と処理に処理資源を配分するのに対し, 容量の小さい学習者は処理資源をある一方に優先的に配分する傾向があると考えられるため, 文の種類にかかわらず, WM容量の大きい学習者のほうが遂行成績が高いことが予測される。また, D原文に無意味語が挿入された場合, 文全体の保持と処理に負担がかかると考えられるため, WM容量の大小にかかわらず, 有意味語文のほうが遂行成績が高いことが予測される。また, 有意味語文条件では, WM容量の大きい学習者は容量の小さい学習者よりも遂行成績が高いのに対し, 無意味語文条件では, WM容量による遂行成績の差がみられないことが予測される。

## 反転授業の導入による学生の自律学習及び協同学習への試み : 「中級日本語」での実践を例に

黄馨儀 (中国文化大学)

今回の発表は発表者が2020年の春学期にかけて, 中国文化大学日本語学科の「中級日本語」を履修した学生を対象に実行した教学実践の報告である。「中級日本語」はほとんどの台湾の大学での日本語学科の必修科目である。発表者はこの授業を担当して4回目となるが, 学生の学習状況を観察し, 以下の問題に気づいた。昔ながらのテキストを中心に文型を説明し, ひたすら練習させる授業形式は学生にとって単調すぎて, 学習意欲を引き出せないことや, 人数の多さで学習者の学習状況が把握できず, レベルがさらに掛け離れることになりやすく, 授業全体の質を維持するのにかなり困難となっている。

以上の課題を意識し, 教師は反転授業を導入することで学生にビデオで予習させ, グループ活動によって協同学習し, 授業後にもビデオで復習する習慣を学生に身に付けさせることによって言語勉強のよいモデルを構築させたいと考えた。インターネット世代の学生が利用しやすくように, ビデオを作成しYouTubeに上げることや, 授業中の協同学習のイベント作成, また, 学期のはじめ, 期中, 期末には3回のアンケートを実施し, 学生の感想・反響を記録し成果を確認する。本発表を通して, 日本語学科の基礎科目である「中級日本語」の反転授業の導入及び自律学習, 協同学習への試みの経験と成果を共有し合いたい。



## 東京2020大会に向けた全国外大連合の 取り組みの成果と課題

朴ジョンヨン (神田外語大学)

筑波大学大学院人間総合研究科スポーツ健康システム・マネジメント専攻、博士前期課程を修了し、筑波大学体育学群及び同大学院スポーツ健康システム・マネジメント専攻(博士前期課程)にて非常勤講師、早稲田大学委託講師、上智大学ゲスト講師等を経て現在に至っている。『日本の英語教育の今、そして、これから』共著(開拓社、2015年)

### はじめに

2019年のラグビーワールドカップ2019™日本大会から始まり、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会、そして2021年の関西マスターズゲームズと、日本は今、国際スポーツイベントの歴史的局面を迎えている。スポーツ界におけるグローバル化の波は必然であり、大会の円滑な運営には外国語を駆使できるボランティアの存在は欠かせない。国際大会の円滑な運営のためにも、外国人選手や関係者のニーズに対応できるボランティア人材を適所に送り出し、活躍してもらうことは重要な要素となる。

神田外語大学では、2007年9月から、学生の外国語修得への支援や言語運用の経験など、語学学習意欲の向上に向けた取り組みを推進してきた。以来、2019年10月まで150回に及ぶ国際大会(オリンピック・パラリンピックやワールドカップ、世界選手権大会等)に、英語を中心に学生の専攻言語を含めた多言語対応ができるボランティア1,301名を送り出してきた。本学が展開するボランティア活動は、外国語を学ぶ多くの学生のニーズに合った実践的な自立活動となっており、グローバル人材に求められる資質や能力を養成する極めて有効な学習機会になっている。

日常的に外国語が使える環境にない学生たちにとって、責任を伴う形で外国語を使う

体験は、より高度な言語能力修得への大きな動機付けや学習意欲の向上につながっている。

こうした状況を踏まえ、国際大会におけるボランティア活動の教育的な意義及び社会に及ぼす影響や効果を探ってみたい。

## 戦後児童文化における戦時下の機械兵器描写 :小松崎茂の画業を中心に

河盛皓 (高麗大学)

日中戦争及び太平洋戦争を前後して児童向けの出版メディアに頻繁に掲載されていた戦争イメージ、殊に機械兵器の描写を含む挿絵は戦後にも生き残り、児童向け出版メディアの主な視覚表現の様式として定着することができた。本研究は、戦後間もない時期から1950年代にかけ、このような視覚表現の様式が流通していた現象について、戦前戦後を通して、当該の表現様式を代表する挿絵画家である小松崎茂(こまつぎしげる) 小松崎茂 (1915-2001)の画業を中心に考察を目的とする。

戦後日本の児童文化における戦争イメージに関する議論は、主にミリタリープラモデルの箱絵に代表される、「ボックスアート」にフォーカスが当てられることが多かった。本研究では、先行研究が「ボックスアート」について論じる際、太平洋戦争時に国家主導で制作されていた「戦争画」との影響関係を当然視する節があることを指摘し、戦時中の絵葉書、グラフィック誌、児童雑誌の挿絵や絵本においてもみられる「戦争イメージ」にも視線を配る。それによって、戦争画と戦後の「ボックスアート」、さらには現代美術における「戦争画様式の転用」という影響関係の軸の根底に、戦時中の複数のメディアによる「戦争イメージ」の、「表現的援用」があることを明らかにしたい。

また、終戦以降のGHQ占領期においては、軍国主義を連想させるイメージは検閲の対象となり、児童文化も例外ではなかった。その歴史的事実があるが故に、先行研究では、占領期の児童・少年雑誌などにおける諸イメージの表現様式と「戦争画」のそれとの様式的関係性は、十分に指摘されてこなかった。本研究ではそのような現状を指摘した上、実は当時の児童雑誌の絵物語などにおいて、戦争画の「表現的援用」がみられていることも明らかにしたい。

## 現代日本文学における〈悪女〉論について

孫于恵 (広島大学)

妖婦、魔女、小悪魔、ファム・ファタル(宿命の女)、魔性の女、毒婦、プレイガール、淫婦……。 「悪女」に関連する言葉は実に多い。確かに「悪女」は非難の対象だが、それだけではない。むしろ「悪女」は男だけでなく、女までをも魅了してきた表象である(笠間千浪.2012.『〈悪女〉と〈良女〉の身体表象』)。だからこそ、「悪女」にまつわるエピソードには事欠かず、テレビドラマや映画、視覚芸術、小説の主題に繰り返し採用されてきた。

本タイトルでは「悪女」ではなくて〈悪女〉、ちゃんと〈〉をつけていることは、従来の「悪女」という言葉の持つ意味に疑義を差しはさんでいる私見である。「悪女」の主な性格については、妖艶、好色、ふしだら、淫らなどの言葉が使われ、「色仕掛けで男を惑わす」存在というのが代表的なイメージだろう。だが、日本の文学では鎌倉末・南北朝期から「悪女」の語が現れるが、はじめは「美女」の対義語つまり「醜女」の意味で使用されていた。当時の『世俗誌文』に登場した中国漢代の『史記・外戚世家』に「美女が新しく嫁いで来れば悪女はこれを仇とすること」(原文:「傳曰:美女入室, 悪女之仇:女無二美惡一、入レ室見レ妬<略> 美女悪女之仇、豈不レ然哉」)と一文があり、本来の意味は醜女の方だったのだろう。しかし十七世紀初頭になると、「身持ちの悪い女」という意味が登場する。現代に至って男を惹き付けてやまない「魅力的な女」と掲出されている(『日本国語大辞典』)。醜女の意味はほとんど姿を消しているが、もう少し異なった要素が付け加わった。

では、その要素って、一体なにだろうか、また「悪女」と呼ばれる条件はなにだろうか。これらの問題を出発点とし、本報告では「悪女」という言葉の変遷からお話し、現代日本文学における〈悪女〉の表現について論じてみたい。

## エッセイ形式の震災マンガにおける 「3.11」表象の両義性

杉本章吾 (高麗大学)

2011年3月11日に東北地方を襲った大地震と津波、それと連鎖した福島第一原子力発電所事故の複合災害、すなわち「3.11」以降、多様な文化メディアにおいてそれに応答する作品が生み出されていった。とりわけ、マンガという文化メディアは、「3.11」という出来事に積極的に応答していき、市民的連帯や相互扶助の精神が活性化するなか、多くのマンガ家たちが、フィクション・ノンフィクションを問わず震災に関連する作品を発表していった。本発表は、こうした震災マンガのなかでも、とりわけその主軸を担ったエッセイ形式の作品に着目する。エッセイ形式の震災マンガは大別すれば、①作者自身の震災体験にもとづいたもの、②被災者の視点から震災経験を表象したものの二種類に分類することができる。これらは、いずれの場合も、メディア報道から漏れ出る「被災の現実」や「個人的な経験」を、作者／被災者の主観性を介して、読者に伝達する「市民的ジャーナリズム」となることが往々にして志向されていた。しかし、エッセイ形式の震災マンガは、同時にエッセイ・マンガというジャンルが内包する記号性・可読性によって被災者の個別性・単独性を抽象化する危険性を有しており、それは時として被災者の個人的な経験を均質な「私たち」の物語へと一般化する危うさを孕んでいることは指摘しておかなければならない。これらの点を踏まえ、本発表では、エッセイ形式に基づいた震災マンガが「3.11」という「災害」に対していかに応答し、そこに記憶と忘却、個別性と一般性、市民メディアと文化産業などの諸問題がどのように絡み合っているのか、エッセイマンガにおける「災害」表象の特性とそれが孕む可能性と限界を明らかにすることを目的とする。

## 19世紀における長崎派南画家の中国画学習 : 鉄翁の縮図を手がかりに

王紫沁(総合研究大学院大)

鎖国中の江戸日本にとって、長崎は最新の中国文化と接触できる唯一の窓口となる。芸術の領域においては、輸入された画書・書画作品によって中国画の知識と実例が伝えられた。そして商船で来航し「来舶清人」と呼ばれた中国人たちは、詩書画など文人雅趣に興じて、中国文化を憧憬する日本人たちと盛んに交遊した。人・モノ・情報が集まり交錯する長崎は、最新の中国書画を学習する拠点となった。19世紀に入ると、長崎南画三筆とされる鉄翁祖門・木下逸雲・三浦梧門を中心に、中国南宗画の色濃い影響がみられる長崎派南画が成立した。

鉄翁祖門(1791—1871)は長崎春徳寺の住持で、来舶清人の江塚圃に就いて南宗画を学び一家を成した。鉄翁に教えを乞う者は全国から相次ぐほど、その名は幕末明治期に広く知れ渡っていたにも関わらず、南画が衰退するにつれて、次第に忘れさられた。鉄翁の画業に関しては、不明な点がまだ多く残されている。

本発表は長崎歴史文化博物館所蔵の縮図冊を取り上げ、鉄翁の中国画縮模を考察する。現存する鉄翁の縮図は四冊であり、いずれも1853年から1867頃まで、すなわち春徳寺の住持から退任し、雲龍寺に隠居する期間に書写されたものであり、画書の抄録や書画作品の記録が多く書き込まれている。発表者は縮図冊の調査・整理に基づいて、二つの方面から鉄翁の中国画学習を考察する：(1)師の江塚圃を含めた来舶清人との交流；(2)彼が寓目した輸入中国画の内容。鉄翁の縮図冊は画人の私的な記録でありながらも、幕末の長崎における来舶清人の活動、及び輸入中国画の流通の情報も記されている。鉄翁が如何様な学習資源を入手し、咀嚼・消化していたのか、その考察を通して、発表者は近代の幕開け直前において書画が東アジアを行き交う様相を捉えていく。



## 植民地期朝鮮の料理書にみる伝統食概念の形成 : 方信栄『朝鮮料理製法』の改訂過程を例に

大橋利光 (東京大学)

今日、日本でも韓国でも、食育や栄養指導において伝統食が推奨されることは多い。世界的なファストフード・チェーン店や多国籍の食品産業に代表される食のグローバル化の傾向に対し、ローカルフードを対置しようとする動きといえよう。だが、その「伝統食」という観念は、いつどのように形成されてきたのであろうか。

本報告では、今日の韓国における伝統食(韓食)概念の形成に大きく影響したとみられる、植民地期朝鮮の料理書『朝鮮料理製法』(1913年または1917年初刊、1962年まで改訂を重ねて刊行)に注目し、同書はどのような思想的背景のもとで改訂を経たのかをとらえる。とくに、著者・方信栄の日本留学(1925~26年)を境に行われた、同書の最大の改訂内容を見るとともに、この時の改訂をめぐる一つの事件を取り上げる。

その事件とは、同時期に出版されていた料理書『朝鮮無双新式料理製法』の著者、李用基との間の著作権訴訟である。中国をはじめとする東アジアの漢文文化圏の伝統では、料理書は百科事典的な書物(類書)の一環とみられており、既存の古典籍の文言をそのまま収集して編纂、執筆されることが常であった。李用基は、類書と同様の編纂姿勢で方信栄の文章を引用した結果、日本留学を終えて朝鮮に戻った方信栄から著作権侵害で訴えられ、最終的に敗訴したのである。

この事件の経緯からは、方信栄が、漢文の素養に基づく既存の男性中心の知的共同体から抜け出し、日本で学んだ栄養学・家政学に基づいて、朝鮮人女性の手による新たな朝鮮料理像を描き出そうとしたことがうかがえる。1930年代以後の植民地期朝鮮においては、方信栄のように高い教育を受けた女性たちによって、自分たちの力で朝鮮人の生活の近代化を進めようとした生活改善運動が進められ、その中に『朝鮮料理製法』が位置づけられることが、本報告を通して明らかにされる。

## 撫でるしぐさの意味 : 民話導入部に注目して

茶園直人 (大阪大学)

本発表は撫でるといしぐさの民俗学的な意味を明らかにするという目標の下、民話導入部に現れる撫でるしぐさが示す意味を明らかにすることを目的とする。

民俗学において、しぐさは重要なテーマである。倉石忠彦は『身体伝承論 手指と性器の民俗』において、身体について人々が伝承してきた認識や心意を明らかにすることの重要性を主張し、それらを身体伝承と呼称してその一部としてしぐさに注目している。また、倉石が身体というキーワードに力点を置いたのに対して、常光徹『しぐさの民俗学』はしぐさに力点を置いた民俗学的研究の先駆者と言える。常光は主に、まじないに見られるしぐさを分析し、しぐさに表れる人々の心性を明らかにした。常光の成果により、民俗学におけるしぐさ研究の重要性が柳田國男「涕泣史談」以来再度、明らかになったとも言ってよいだろう。

本発表はそのような身体、しぐさについての民俗学的研究の流れを汲むものとして民話導入部における撫でるしぐさに注目するが、そこに見られる撫でるしぐさは、人間が妖怪に撫でられる事態である。河童が尻を撫でるとい民話は民間薬の伝承として数多く残っており、河童伝説のモチーフとしてはよく知られているものである。しかし、尻を撫でるといモチーフは河童伝説のみならず、狸や、暦と関連した禁忌においても表れ、必ずしも河童という妖怪との関係性だけではその意義を検討しきれない。

また、妖怪が人を撫でる部位は尻に限らず、頭や足など部位を気にせず撫でる妖怪も見られる。例えば、狐やむじなは悪戯として人を撫でる。また、ほおなでや一ツ目も人を撫でるが、その目的は民話では語られない。

このように、本発表ではしぐさに焦点を当て、まじないという文脈ではなく、人間と妖怪との交流という文脈の中で用いられている撫でるしぐさに着目することで、しぐさに対する人々の認識の新たな側面を明らかにしたい。

## 『土佐日記』の異界観 :天文気象に関する記述から

永原順子 (大阪大学)

『土佐日記』は、日本で初めて書かれた日記文学と言われる。紀貫之が、土佐で延長8年(930年)から承平4年(934年)にかけて国司を務めたのち、その任期を終え、帰京するまでの55日間の旅を日記風に記したものである。貫之は男性であるが、書き手を女性の筆に託して仮名書きしており、その後の仮名表現、特に女流文学の発達に影響を与えた。内容の中心となっているのは、帰京を切実に願う人々の様子、土佐で亡くなった娘に寄せる心情、などである。諧謔表現を多用していることも特徴の一つとしてあげられる。

研究史は古く、江戸時代初期から注釈書が多く書かれてきた。諸本研究、本文研究も盛んで、現在においても様々な視点からの研究がなされている。たとえば、男性である貫之が女性に仮託するに至った動機についての議論、土佐(高知県)の気象状況も視野に入れた地理的研究、歴史的観点からの分析、貫之が優れた歌人であることに基づいた考察、等々である。また、貫之は帰京の途上での記録をもとにこの作品を執筆したと考えられ、虚構も交えた文学作品である、との見方もある。

本研究では、それら先行研究の成果をふまえ、気象・天文に関する記述およびその状況に対する人々の言動(まじないや祈り)、宇宙観が表現されている和歌などに着目し、『土佐日記』によって切り取られた、当時の異界観の特徴についての考察を行う。平安時代の暦の作成、天文(気象)、占い等は、陰陽寮が管理しており、一般の貴族達は、それらを生活の基準としていたものの、詳細な仕組みは知り得なかったであろう。実際の天文や気象の現象は、貫之一行にとって生々しい体験ではあったが、それらを積極的に判断する術を彼らは持ち合わせていなかったはずである。その限られた条件故に、空・陸・海の現実と虚構のはざまに立ち上がってくる異界観を緻密に分析していきたい。

## 天心と湖南 :近代期日本の中国絵画受容史

姜希妍(ソウル大学)

本発表は、文化交流史(intercultural history)の観点から、岡倉天心(1863-1913)と内藤湖南(1886-1934)の中国絵画受容史を比較考察するものである。

20世紀初、日本の中国学研究者や美術学者は学問的伝統をもとに旺盛な国際交流をおこない、近代学問として中国絵画史を発展させた。このようにして形成された中国美術の理論は、20世紀以降の中国絵画のコレクション形成や美術史の叙述に世界的な影響力を行使した点で注目に値する。

発表者はこのような点を踏まえ、中国絵画史を先導した岡倉天心と内藤湖南の活動を考察する。彼らが提示した概念は、今日の中国絵画史においても主要な論点となっている。また彼らが形成に影響を及ぼした世界各地のコレクションも、中国絵画史の注目を集めており、岡倉天心と内藤湖南による美術史理論の形成過程をより深く検討する価値がある。

まず岡倉天心は西洋人との交流を背景としながら、宋元画や禅宗画を中心とする中国絵画史を叙述した。これに対して、湖南は中国人との交遊を背景としながら、明清画や文人画を中心とする中国絵画史を叙述した。両者がそれぞれ異なる地域で活動し、その地域の学問的伝統と美的趣向をもとに中国美術を理解しようとした点は注目に値する。

上記の点から発表者は岡倉天心と内藤湖南の中国絵画に関する認識、叙述、活動に焦点を当て、文化間(intercultural)の様相として近代期東アジアにおける歴史認識の形成過程を考察し、その意義を検討する。



## 現代支那への注目 : 1920年代『改造』における中国イメージ

崔雪 (広島大学)

第一次世界大戦後の日本社会の変革を反映したいという理念にしたがって、1919年4月3日に『改造』は創刊された。創刊当初、『改造』において中国関連記事はほとんど見られなかったようである。1920年3月号に載った長与善郎の「孔子の帰国」が、『改造』における初の中国関連記事であった。その後、谷崎潤一郎の「喜劇 蘇東坡」と大庭柯公の「在満露領の鮮人開放」が見られたが、1921年1月号に載ったパートランド・ラッセルの「愛国心の功過」から、『改造』における中国関連記事が多くなり始めた。1924年に至ると、奉直戦争をきっかけに、『改造』は中国への関心をますます高めていった。1924年10月号から12月号まで、連続して中国の内戦についての文章を掲載した。これほどまでに中国に注目したのは、『改造』創刊以来初めてのことであった。特に、1924年11月号は「対支国策討議」を特集し、中国内戦に干渉すべきかどうかという問題を議論した。そして、『改造』が再び中国への強い関心を示したのは、1925年の「五三〇事件」であった。1925年6月号、7月号と8月号の『改造』では、今回の中国の社会運動に関する記事が掲載された。また、芥川龍之介の「北京日記抄」をはじめ、日本の知識人の中国紀行文も多数掲載された。1926年になると、日本の民衆に現代支那を紹介しようという目的で、7月に増刊号「現代支那号」を計画し、日中の文化交流と相互理解を促進しようという「現代支那号」の意図が一層明らかになった。「現代支那号」を契機に、『改造』は日中の交流を促進するとともに、その特色をより鮮明にした。ここで目を引くのは、「現代支那」という概念である。「現代支那号」という特集名からも、『改造』の現代支那への関心が伺える。現代支那とは一体何だろうか。本文では、ラッセルの文章から「現代支那号」までの『改造』における「現代支那」という表象を取り出し、1920年代の『改造』における中国のイメージを分析したい。

## 1920年代の朝鮮における青年読本と日本の出版界

田中美佳 (九州大学)

植民地期朝鮮(1910-1945年)では、各種の「読本」が刊行された。当時、読本には行政機関による学校教育で使用される教科書と、民間が刊行する参考書の二種類があった。後者の場合、1916年に出版社新文館が刊行した『時文読本』を機に続々と発行されるようになり、英会話読本や農民読本、家庭読本などその種類は多岐にわたる。読本に関する既存の研究は、朝鮮総督府などが刊行した教科書としての読本を学校教育との関連のなかで論じたものが大半を占める一方、民間の読本の実態は未だ不明瞭な点が多い。

こうした状況を踏まえ、本報告は民間読本の実態に迫るうえでの第一歩として、1920年代の青年読本に着目する。当時の朝鮮では青年運動が活発化し、「青年」に対する社会の期待が高まっていた。このようななかで、青年向けの読本が刊行されるようになる。

本報告では、当時の代表的な青年読本である『二十世紀青年読本』(1922年)および『現代青年 修養読本』(1923年)、『青年修養 新読本』(1925年)を中心に、成立過程や内容の分析を通してその実態に迫る。これらの読本は、既存の刊行物から論説を引用して再構成したものであることが確認できるが、論説の選択傾向や引用方法には大きな違いがみられる。こうした点に着目しつつ、それぞれの読本が何を目指し、当時の青年にどのように受け止められたのかを考察したい。

また、分析においては同時期の日本の出版界との関係性にも着目する。報告者はこれまでに、『時文読本』が当時の日本の中等国語教科書から複数の作品を翻訳掲載すると同時に、構成面でも参照していたことなどを明らかにしたが、1920年代の青年読本にも『中央公論』や『大観』など日本の刊行物の翻訳記事が含まれている。当時の日本では青年向けの読本が複数刊行されていたが、これらとの関連性を含めて分析したい。以上のような民間読本の考察を通して、当時の朝鮮の出版文化に対する理解の深化を図る。

## 19世紀の東アジア国際情勢の変動と公家の対外認識 : 明治維新の特徴と普遍性

齊藤紅葉 (国際日本文化研究センター)

本報告は、文化露寇、アヘン戦争といった19世紀初頭以降の東アジアの国際情勢の変動が、公家の対外認識にどのような変化をもたらし、明治維新の変革につながっていくのかを明らかにしようとするものである。

従来、アヘン戦争については、その情報が日本へもたらされた経緯、情報を入手・交換した前水戸藩主徳川斉昭ら一部の有力大名が、欧米列強の日本への脅威を身近に認識し始めたことが明らかにされてきた。その有力大名の一部が一橋派となり、「公議公論」を掲げて幕府改革を求め、幕末から明治への一つの流れを築くことも指摘されている。このように、19世紀以降の欧米列強の東アジア進出に伴う、国際情勢の急速な変化が、武家の対外的危機意識を形成する一因となり、明治維新にまでつながったとされているといえる。

しかし、明治維新という天皇を頂く近代国家の創出にあたっては、天皇を擁していた公家の変革への協力が不可欠であった。したがって、上記のような国際情勢の変動を公家がいかに認識したのかを検討する必要がある。従来、文化露寇に対する朝廷の反応は指摘されているが、そこからアヘン戦争等を含めた公家内部の対外認識は十分に検討されていない。

本報告では、安政の大獄で失脚することになる三条実万ら、一橋派とつながりを強めた公家を中心に、公家内における19世紀以降の東アジア情勢変化の認識、対外的な危機意識の形成を明らかにする。そして、その意識が、ペリー来航から安政5年(1858)の通商条約締結問題に至る過程で、一橋派を中心とする有力大名と一部の公家のつながりを強め、朝廷の権威浮上と維新変革につながっていくことを指摘したい。

このことは、東アジアにおける近代国家の創設という文脈の中で明治維新を捉える際、国際情勢の変動と国家変革の普遍的な関係を示すと同時に、公家・武家という2頭体制であった日本の、変革における特徴を示すことにもつながるといえよう。

## 3部

### パネル25

## 東アジアにおける植民地の文化政治と感染症の表象

高麗大学グローバル日本研究院

### パネル構成

座長: 金孝順(高麗大学)	
金泰暻(慶熙大学)	
発表1	帝国を移動する: 青山純三とその軌跡 星名宏修(一橋大学)
発表2	植民地時期朝鮮の日本語文学における結核表象 金孝順(高麗大学)
発表3	植民支配初期、在朝鮮日本人社会における花柳病認識に関する一考察 宋恵敬(高麗大学)
発表4	植民地期朝鮮でのハンセン病認識と報道様態 李貞和(高麗大学)
討論: 李文茹(淡江大学) 松田利彦(国際日本文化研究センター) 金京里(建国大学)	

## パネル概要

周知のように現在は全世界的にパンデミック状況に処している。これにより、人類の生き方の様相は再編されており、個人の生き方も根本的な変っている。このようなパンデミックをもたらす感染症は、人類の歴史とともに存在する最も普遍的な疾病であり、その影響が個人に限らず接触した人を通じて広まっていくことで集団への影響の度合いが甚大であるという特徴があり、その点で社会、文化史の一軸を成している。

このような点で、東アジアにおける日帝による植民地支配期は、交通の発達、人口移動の増加、戦争、貿易などで感染症が増加し、近代西欧文明及び医学の収容により疾病の基本概念が根本的に変化した時期とも言える。日本をはじめとする東アジアでは、植民地支配の一環ではあったが、法定伝染病が制定されたり近代的衛生制度が設けられるなど、疾病の管理と衛生に対する「近代的」方策が模索された時期である。そしてこのような衛生および感染症政策は立法、警察、行政などを通じて実現されたが、具体的な実行段階では演劇、映画、文学、展覧会、講演会など各種文化装置と制度の力を借りることもあった。そして、これらの文化生産の主体も疾病や衛生政策に多様な方式で対応していたのである。

本パネルでは植民地時代における東アジア各地で生産・流通された各種文化装置を研究対象に統治主体が集団的疾患という危機的状況で国民をどのように管理統制していたのか、それに対する文化生産主体はどのように反応していたのか、また感染症はどのように表象されていたのか、探ることを試みたい。これにより、植民地時代の植民政策を構成していた衛生政策に現れた植民地の支配原理を把握し、現在進められている衛生及び感染症政策と文化政治の作動原理を把握し、衛生及び感染症に対する人文学的対応策の糸口を模索することを目的とする。

## パネル26

### 高齢社会対策の交流

シニア経済と高齢社会の対応(2)

#### パネル構成

	座長：宋浣範(高麗大学)
	司会：庄英甫(清華大学)
発表1	人口の高齢化と家族介護の挑戦 王天夫(清華大学)
発表2	2000年以降における高齢者に関する研究の動き分析 朴昌東(高麗大学)
発表3	文化的な価値観がGeron-Tech受容力に与える影響 — 韓国とアメリカの高齢層を中心に 金楨根(江南大学)
発表4	高齢夫婦への生活支援の観点から見る日本の介護保険制度の限界 何妨容(高麗大学)
討論：吉田修(広島大学) 彭希哲(復旦大学) 西下彰俊(東京経済大学)	

#### パネル概要

地球規模の少子高齢化が進んできているなか、アジア諸国における高齢者問題も深刻化している。高齢化率が最も高い日本では老々介護や認認介護などの高齢者が高齢者を介護する問題、最も早いスピードで高齢化している韓国では孤独高齢者や貧困高齢者などの問題、高齢者人口が最も多い中国では未富先老、未備先老などの社会問題を直面している。このように、日本、韓国、中国などのアジア諸国における高齢社会問題が顕在化しているなか、それぞれの高齢者対策や高齢者支援サービスのみならず、国々の協力も必要になってきている。本パネルディスカッションは、日本、韓国、中国、それぞれの国が直面している高齢社

会問題を、高齢社会の実態、Age Tech、デジタルヘルス、社会保障政策など多様な側面から自由に討論することによって、時代発展に伴い、日中韓の国際交流の発展、及び高齢社会問題の解決における三カ国の協力の推進を目指している。

韓国側では、高齢者に関連する先行研究の動向と、科学技術の発展に伴ってきたAging Techの必要性、またデジタルの発展に伴ってきた高齢者産業の問題などについて論じる。それに対して、中国側では、高齢者サービス市場の現状・危機、中国の社会保障の現状問題などを明らかにする。他方、日本側では、日本におけるデジタルヘルスの発展・課題、日本の介護保険制度の限界性などの課題を検討する。

## パネル27

### 日本語学習者の「言いさし表現」の普遍性と個別性を考える

高麗大学

#### パネル構成

	座長：曹英南(高麗大学)
	司会：中村有里(仁川大学)
発表1	依頼のロールプレイに見られる「言いさし表現」の特徴 — 英・仏・西・中・韓・土の日本語学習者のデータに基づいて 迫田久美子(広島大学)
発表2	日中接触場面における「ケドの言いさし」の特徴 — ターン・テークとトピック展開に着目して 永田良太(広島大学)
発表3	Eメールに見られる「言いさし表現」の特徴 — 韓・中・英の日本語学習者と日本語母語話者のデータに基づいて 曹英南(高麗大学)
討論：金志宣(梨花女子大学) 小松奈々(高麗大学) 小此木江利菜(高麗大学)	

#### パネル概要

本パネルでは日本語学習者の言いさし表現に着目し、日本語学習者の談話における言語使用の普遍性と個別性を考える。そのために次の3つの観点を設定した。

まず、1つ目の観点は多言語母語の日本語学習者横断コーパス(I-JAS)の依頼のロールプレイに現れる言いさし表現に着目し、英語・中国語・フランス語・スペイン語・韓国語・トルコ語の日本語学習者各15名、計90名の発話データを分析する。語順がSVO言語(英中仏西)とSOV言語(韓土)を母語とする日本語学習者の言いさしの使用に違いがあるかどうかを調べることにより、日本語の依頼表現への母語の影響について新たな知見を述べる。



2つ目の観点は日本語母語話者同士の自由会話において、「ケドの言いさし」はターン・テークキングやトピック展開に関わる役割を果たすことが明らかにされてきた。本発表では、それらの知見をふまえつつ、日本語母語話者との接触場面における自由会話の中で、中国語を母語とする日本語学習者が「ケドの言いさし」をどのように使用しているかを分析し、日本語母語話者とは異なる特徴が見られることを述べる。

3つ目の観点は多言語母語の日本語学習者横断コーパス(I-JAS)のEメールタスクにおいて言いさし表現がどのように表れるのか、その特徴を明らかにする。韓国語母語話者・中国語母語話者・英語母語話者の日本語学習者の不自然な言いさし表現の使用に着目し、日本語母語話者はどのように表現するかを探る。またKYコーパスの日本語学習者の結果と比較し、習得レベル別の言いさし表現の特徴を把握する。

上記の観点からの結果が総合的に有機的につながると、話しことばと書きことばにおける日本語学習者の言いさし表現の特徴の全貌が明らかになる。さらに母語の違う学習者グループの比較の結果、日本語学習者の談話における言語使用の普遍性と個別性を探ることができると考えられる。

## パネル28

### 日本語における語彙の言語的特徴 ：コーパスと対照の視点から

中国文化大学日本語文学科・神戸市外国語大学

#### パネル構成

		座長：林孟蓉(中国文化大学)
		司会：林孟蓉(中国文化大学)
発表1	日本のミステリー小説に見られる言語的特徴	岩男考哲(神戸市外国語大学)
発表2	漫画データベースにおける2字漢語名詞の語彙特徴 — 書き言葉との比較を通して	蔡珮菁(中国文化大学)
発表3	「微解封」からみた台湾の中国語の造語力	鍾季儒(中国文化大学)
討論：林淑璋(元智大学) 陳順益(中国文化大学)		

#### パネル概要

情報化や科学技術の進歩に伴い、近年台湾や世界中における日本語教育も変わりつつあり、進んで来ている。多くの研究学会においては、さまざまな研究アプローチや教育の実践報告が掲載され、日本語研究も多様化になりつつある。それに加え、日本語学習者の学習動機や学習ニーズも多様化になってきている。学習者ニーズに対応するには、多様化したカリキュラムが必要となる。現在台湾における各大学の日本語文学科も積極的に新しい授業科目を取り入れ、対応しようとしている。本学科(中国文化大学日本語文学科)を例として、数年前より「日本アニメとサブカルチャー」「日本ドラマと日本社会」などの科目を新設し、いずれも好評を博している。新しい授業科目を設置するにあたり、それに合わせる研究も進



まなければならぬと考えられている。アニメとサブカルチャーは最新の情報や新語などを学ぶことができ、それに対し、ドラマや小説に出てくる語彙は日常生活に欠かせない重要な基本だと言うまでもない。本セッションの発表は語彙研究を中心に、それぞれコーパス、防疫、そしてミステリー小説から日本語と台湾の中国語における語彙の言語的特徴を明らかにする。

## パネル29

### 1960年代後半の日本の市民運動のなかの「朝鮮問題」をめぐる理論と実践

戦後日本の市民運動と「朝鮮問題」

#### パネル構成

	座長: 李英美(立教大学)
	司会: 李美淑(立教大学)
発表1	市民運動としての古代史研究 — 「東アジアの古代史を考える市民の会」の実践から 山口祐香(九州大学)
発表2	日本の市民運動のなかの「朝鮮問題」 — 雑誌『朝鮮人』の刊行を中心に 李英美(立教大学)
発表3	左翼日本人法律家の在日人権論 — 「在日朝鮮人の人権を守る会」の法廷闘争を中心に 潘炯亮(ハーバード大学)
討論: 森類臣(摂南大学)	

#### パネル概要

東アジアの冷戦体制下において、とくに1960年代後半の日本では、韓国の民主化運動や在日朝鮮人差別を反対する声の高まりに接し、市民レベルで、日朝、日韓関係をめぐる歴史認識の問い直しや、学びを目的とする市民団体、研究グループの設立や、雑誌刊行が相次いだ。本パネルでは、こうした市民間の交流を軸とする東アジアにおける越境的な空間の構築から、脱植民地化の時代における「朝鮮(人)問題」の展開、市民「連帯」のあり方について検討する。

山口報告では、1970年代に活発化した、市民主体の古代史研究活動の実践と在日朝鮮人

歴史家の関わりについて論じる。主に朝鮮総連を脱退した在日朝鮮人知識人たちが展開した学術・文化領域での歴史研究の場が、日本人の歴史認識に作用することで民族差別の現状を克服する実践の一環となったことを考察していく。

李報告では、鶴見俊輔、飯沼二郎ら知識人を中心に刊行された雑誌『朝鮮人』(1969～1991)を事例に、反入管運動の文化的実践について論じる。長崎県の大村収容所の廃止を掲げてつくられた雑誌『朝鮮人』の実践から、ベ平連運動のなかの入管問題、朝鮮問題の展開について検討する。

潘報告では、1965年に設立した「在日朝鮮人の人権を守る会」の設立と活動に焦点をあて、在日朝鮮人の在留、生活、国籍問題が、日本の左翼運動における「人権」言説に与えた影響を論じる。戦後日本の左翼運動において、「人権」概念は、「在日問題」の法律理論や「法廷闘争」と深く結びついてきた。法律援助組織としての「人権を守る会」をとおして、社会党系の日本人弁護士・法学者らが、在日朝鮮人の境遇をいかに問題化し、立憲主義や国民主義を超えた人権論を理論化したのかを考察する。以上の報告をつうじて、戦後日本の市民運動における実践としての「朝鮮問題」の展開とその意義について議論していく。

## パネル30

### 映像メディアと文化ナショナルリズム

嘉泉大学アジア文化研究所

#### パネル構成

座長：任ダハム(嘉泉大学)	
司会：井口有子(仁荷大学)	
発表1	アニメーションにおけるナショナリズム〈鬼滅の刃〉を中心に 金静希(嘉泉大学)
発表2	『京城日報』の製作映画：〈死の輝き〉(1922)を中心に 任ダハム(嘉泉大学)
発表3	李学仁映画の東アジア連帯の可能性をめぐって — 「在日」自己表象の外延 梁仁實(岩手大学)
討論：趙柱喜(誠信女子大学) 李賢珍(高麗大学) 咸忠範(韓国映像大学)	

#### パネル概要

本パネルでは、近現代の日韓において、映画とアニメなどの映像メディアが国民国家、そしてナショナリズムの形成にいかに関わっているのかについて考察する。鈴木貞美が言及しているように、ナショナリズムは、政治や経済に限られた現象ではなく、むしろ文化の面において、より深く広く現れるものである。したがって本パネルでは、自己や他者のイメージ形成という視点から「文化ナショナリズム」を考え、それと映像メディアの関連性について問題提起を行うことを目指しているのである。

本パネルでは、最初に金静希(嘉泉大学)が「アニメーションにおけるナショナリズム— 〈鬼滅の刃〉を中心に」(仮)と題する発表を通して、このアニメをめぐる「右翼論議」について

検討し、ナショナリズムの「消費」という観点を導入して現代日本におけるナショナリズムの問題を考察する。つづく任ダハム(嘉泉大学)の発表「植民地朝鮮における日本映画の興行様相」(仮)においては、いままで日韓映画史研究分野においてあまり注目してこなかった、植民地朝鮮における日本映画、特に「時代劇」の製作・興行様相を、同時代の新聞・雑誌の記事を中心に綿密に検討する。よって本発表では、帝国日本が「時代劇」という映画ジャンルを、ナショナリズムを高揚するプロパガンダの装置として、いかに利用していたのかについて追及する。最後に梁仁實は、「李学仁映画の東アジア連帯の可能性をめぐって—「在日」自己表象の外延」という発表を行って、在日二世・李学仁監督の映画に現れた民族・アイデンティティをめぐる葛藤や文化的混乱を読み取ることで、「国民国家」の挟間を生きる存在である在日コリアンのアイデンティティという問題について考察する。

## パネル31

### コロナ禍における祭りと儀礼

グローバル社会における疫病—儀礼と教育の影響

#### パネル構成

		座長：タマシ・カルメン(兵庫県立大学)
		司会：タマシ・カルメン(兵庫県立大学)
発表1	コロナ時代の天神祭	タマシ・カルメン(兵庫県立大学)
発表2	パンデミックにおける新作能アマビエ	田中キャサリン(兵庫県立大学)
発表3	コロナ禍における都市祭礼の催行継続について — 西宮まつりと十日戎開門神事福男選びから	荒川裕紀(明石工業高等専門学校)
討論：ドラガン・アンジェラ(「ディミトリエ・カンテミル」キリスト教大学)		

#### パネル概要

本発表は、疫病と演劇と関西地方を中心とする祭礼のコミュニティにおける現在のパンデミックであるコロナの影響について考察するものである。

主に疫病(世界中で歴史の長いハンセン病や疫病退散として発展した天神祭や西宮神社の祭礼)の経験ある、諸コミュニティや各団体が、コロナウィルスのパンデミックに如何に反応し、対応をしたのかについて検討するものである。

タマシ・カルメンは「パンデミックの時代の天神祭」として、2年連続で中止となった天神祭の変化と進展を分析発表する。2020年7月、初めて天神祭の神事が公開され、ライブ配信された。大阪天満宮を中心とするコミュニティの反応について報告する。天神祭という、本

来は疫病退散目的の儀礼が折しもこの疫病の拡大期中止になってしまったことによる、当該地域の「祭りのない年における行事」の対応について考察する。

田中キャサリンは、小川正子のベストセラー図書が豊田四郎によって 1940年に映画化された『小島の春』について、劇中におけるハンセン病患者の「演じられ方」とハンセン病予防対策のつながりとその対抗について検討する。さらに、現在、上田敦史による新作能、『アマビエ』についての言及した上で考察する。時代や病の変遷変化がある中、疫病および病が演劇の中でどのように演じられてきたのかについて、その意味性を含め、明らかにする。

荒川裕紀が20年以上参与観察を実施しているのは、西宮神社の祭礼「十日戎開門神事福男選び」と例大祭である「西宮まつり」である。今回の発表においてはコロナ禍でどのような変容があったのかについて明らかにする。その上で、地域社会がこのパンデミックの中で、「祀る・祭る」と「継続」の2つをどのように結びつけようとしたのかを考察する。

## パネル32

### 1950～1951年刊行『日本及日本人』からみる「戦後」日本における帝国の欲望と葛藤

翰林大学日本学研究所 HK+事業団

#### パネル構成

	座長：徐禎完(翰林大学)
	司会：林聖淑(翰林大学)
発表1	『日本及日本人』を通してみる1951年日本政治の自画像 宋錫源(慶熙大学)
発表2	『日本及日本人』からみる戦後日本の「平和」と愛国 石珠熙(翰林大学)
発表3	少年サトーハチローが出会った「保守」人脈の日常像 金雄基(翰林大学)
討論：関根英行(嘉泉大学) 秋山肇(筑波大学)	

#### パネル概要

『日本及日本人』という言論雑誌は1907年から1945年まで政教社から出版され、戦後は日本新聞社により出版され2004年まで発行された。本パネルは、その中でも「戦後」5年目の1950年9月に復刊された『日本及日本人』の1950～1951年分を対象に、帝国解体後の日本において如何なる政治的想像力が浮上し、いかなるアジア観・世界観を有し、そこにはいかなる形で帝国の欲望が胎動し、過去・遺制が隠滅され、またどのような葛藤が伴われたのかを考察することを目的とする。

第2次世界大戦後、世界は大きな変換期を迎え、東アジアもグローバルな変化を余儀なくされていた。特に1950年は、日本帝国崩壊後の東アジアでは米ソ冷戦構造下の代理戦ともいべき韓国戦争勃発した年であり、その後遺症は現在にいたるまで尾を引いている。ま

た、1951年は「敗戦」後の主権を「回復」し国際舞台への復帰を目指す日本がサンフランシスコ講和条約を目前に控え、維新後のさらなる「建国」ともいべき状況の下で模索と議論が飛び交っていた。このような状況において多くの日本の政治家や知識人、作家、評論家が「日本」という国家の未来をどのように構想し論じたのかを批判的に分析したい。具体的には1950~1951年当時、「日本」という国家の自画像を描いた際、そこから抜け落ちていた帝国の過去や省察、また再軍備化を取り巻く意見の対立や葛藤、そして「日常」という場における戦争の残骸に対する感情などを取り上げ、決して「戦後」という枠に収まらない戦前や戦中が渦巻くポスト帝国の時空間についての一視点を提示することを目指す。

翰林大学日本学研究所のHK+事業団は「ポスト帝国と東アジアの文化権力」というアジェンダのもと、帝国解体後という時間軸と東アジアという空間が再編成されるありさまを分析し、その際に国民国家により構造化する権力が文化権力の形をとって作用する様相を研究してきた。この発表をつうじて「戦後」日本をポスト帝国という枠でときほどくことの有効性と新たな理論の枠組みを提示する。

## パネル33

### 米中競争時代のなかの韓国・日本外交

韓国・国立外交院日本研究センター

#### パネル構成

座長：曹良鉉(韓国国立外交院)	
司会：曹良鉉(韓国国立外交院)	
発表1	米中对立下での日米韓、日韓安全保障協力のあり方  富樫あゆみ (東洋英和女学院大学)
発表2	米中競争時代の韓日関係と韓米日協力  趙恩一(韓国国防研究院)
討論：林泉忠(武漢大学) 尹錫貞(韓国国立外交院)	

#### パネル概要

本パネルの目的は、研究者の視覚から米中競争時代における韓国・日本外交を対北朝鮮戦略も含めて議論することである。

現在、米中関係は安全保障のみならず、経済や価値をめぐる争う体制競争の時代に入った。トランプ政権のアメリカ・ファースト時代を経て、バイデン政権のアメリカは、中国を牽制するために、同盟ネットワークの復元に取り組み、東アジア地域をクアッドの枠組みを中心に、インド太平洋地域戦略に再編している。

こうしたアメリカの戦略の中で、日米同盟が強化され、日本の国際的な役割が拡大している。北朝鮮問題に関して、CVIDを追求して圧力をかけながらも、拉致問題を解決するために、韓半島情勢を見極めて北朝鮮と外交的に接触する機会を模索している。一方、韓国は北朝鮮の非核化を誘導し、南北分断構造を根本的に解体するために、韓半島平和プロセスを



積極的に推進している。そして、2021年5月の米韓首脳会談をきっかけに、米韓同盟はグローバル地域同盟としてその対応範囲を広げている。

上述の地域情勢を踏まえて、本パネルは、韓国や日本や台湾の学者が集まり、韓国と日本の外交戦略が東アジア地域にいかなる影響を及ぼすのかについて考察し、オバマ及びトランプ政権にまで遡って、現在の米中関係における韓国・日本外交の方向性を長期的な観点から捉える。さらに、お互いの外交戦略に対する比較研究を行いつつ、歴史葛藤が新しい正常状態となった韓日関係において、米中戦略競争が持つ意味合いを明らかにする。

## パネル34

### 日本古典文学の想像力II

漢陽大学 日本学国際比較研究所 II

#### パネル構成

座長：李康民(漢陽大学)	
司会：權桃楹(漢陽大学)	
発表1	秋成文学における宮木像の系譜 岳遠坤(北京大学)
発表2	浦島伝説の近世的変容：「日本意識」のあらわれ 韓京子(青山学院大学)
討論：梁誠允(高麗大学) 李市俊(崇実大学)	

#### パネル概要

周知のように、古典文学には、時代を超える普遍的な価値が込められていると言われる。そのような普遍的な価値によって、古典文学の生命力は維持されていると言えるだろう。しかしその一方、日本古典文学には、そのような普遍性ととも文化的特性による特殊性も存在していると思われる。特に、日本古典文学の場合は、時代を超えて蓄積されてきた膨大なレトリックの世界があり、そこには日本人の多様な想像力が表象されている。今回のパネルでは、日本古典文学を媒介に、日本人の喜怒哀楽、自然観、動物観、信仰や異界に関わる想像力の実体を探り、その文化史的な意味を考えてみたい。

## COVID-19と加速する危機・グローバル資本主義 ・デジタル・モノポリー

：マルクス『資本論』の読み直しにもとづく東アジアの地政学的分析の試み

東京外国語大学

### パネル構成

座長：友常勉(東京外国語大学)	
司会：友常勉(東京外国語大学)	
発表1	東アジアのグローバリゼーションと『資本論』：問題提起として 友常勉(東京外国語大学)
発表2	利子生み資本と現代資本主義 浅川雅己(札幌学院大学)
発表3	中村勝巳(中央大学)
発表4	崎山政毅(立命館大学)
発表5	スカーレット・コーネリッセン (ステレンボッシュ大学)
討論：崎山政毅(立命館大学) スカーレット・コーネリッセン(ステレンボッシュ大学)	

### パネル概要

本パネルは二つの目的を有する。一つは、「新MEGA」刊行を踏まえた世界的な「マルクス・リバイバル」の理論的達成を踏まえて、COVID-19のパンデミックを経験し、GAFAMなどデジタル・モノポリーが進行するグローバル資本主義が、東アジアの各国家・各地域、そして東アジアの地政学にもたらしている危機について、とりわけ日本と韓国の経済・社会分析

からアプローチすることである。第二に、「マルクス・リバイバル」の理論的達成を、商品論と蓄積論のあらたな展開のうちに求め、この理論的成果を検証し、共有することである。その達成の一つを、本パネルは井上康・崎山政毅『マルクスと商品語』(2017年)、同『マルクスと「価値の目印」という誤謬』(2021年)に求める。これらの二つの著作は「新MEGA」の読み直しにもとづいて、マルクス『資本論』が有する根源的な資本主義批判の射程を明るみに出した。それはグローバル資本主義の分析のために、「利子生み資本」をめぐるマルクスの研究が不可欠であることを示している。本パネルは、この理論的成果を含む「マルクス・リバイバル」が提示しているアプローチを手がかりとしつつ、日本と韓国の資本主義の現在を、移民、階級対立、経済政策などの地政学的分析によって再把握しようとするものである。それによって、COVID-19後の東アジア社会の危機の行方を見定めたいと考える。

## 100歳時代・ベビーブーマー世代の孤立と社会参加

ソウル大学日本研究所

### パネル構成

座長：趙寛子(ソウル大学)	
司会：趙寛子(ソウル大学)	
発表1	QOLの視点から高齢者の地域生活を考える～人生100年時代を迎えて～ 大和三重(関西学院大学)
発表2	取材の現場で見た韓国と日本の100歳時代 徐永娥(東亜日報)
討論：山泰幸(関西学院大学) 朴承賢(啓明大学)	

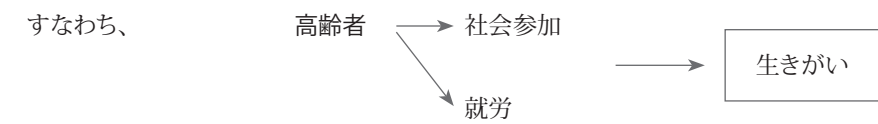
### パネル概要

日本では超少子高齢社会が進展し、高齢者の割合はすでに28.7%(2020年)で国民の約3割が65歳以上である。韓国と同じように日本は介護保険制度によって、介護が必要になった場合、制度を利用することができる。現在の利用者は高齢者のおよそ2割である。8割の高齢者は自立した生活が可能であるが、人生100年時代を迎え、老後をどのように過ごすかが重要な課題となっている。

特に高齢男性は孤立しがちなことが指摘されており、日本では2021年2月に孤独・孤立対策担当大臣が任命され英国に次いで国を挙げて孤独に取り組む姿勢が示された。換言すれば、それほど孤立する国民が多く深刻な問題となっているということである。平均寿命の延伸とともに老後の生活を生きがいをもって暮らすことができるかどうか問われている。

日本では1947年から49年生まれの人々を団塊の世代と呼び、彼らがそろって後期高齢者(75歳以上)になる2025年は高齢者政策の重要な目標となってきた。高齢者が孤独に陥らな

いために、社会参加が推奨されている。なぜなら社会参加は生きがいをもたらす1つの手段と考えられているからである。また生産労働人口の減少を補うためにも高齢者の就労促進も行われている。



### 介護予防

韓国のベビーブーマーの世代は日本と異なるが、韓国も日本と同じように介護保険制度があり、少子高齢化は急激に進展している。高齢者の生きがい創出、社会参加の促進、孤立防止、介護予防といった両国に共通する課題は多い。本パネルでは、日本と韓国における高齢者の孤立と社会参加をめぐる、それぞれの国の実態と対策についてディスカッションすることで互いに示唆を得ることを目的とする。

## 自民党一党優位再構築の光と影

ソウル大学国際学研究所

### パネル構成

座長：朴喆熙(ソウル大学)	
司会：朴喆熙(ソウル大学)	
発表1	自民党支持基盤としての保守市民社会：自民党と日本会議の関係について 具裕珍(東京大学)
発表2	政党システムの変化と自民―公明間選挙協力の変遷 孫哲衣(世宗大学)
討論：李奇泰(統一研究院) 金崇培(忠南大学) 前田健太郎(東京大学)	

### パネル概要

2009年、日本民主党が単独での政権交代を成し遂げた当時、かつての「自民党優位体制」は終焉を迎え、二大政党制による活発な競争が定着すると考えられていた。ところが2012年第二次安倍内閣の発足により自民党政治が復権すると、自民党による「一党優位の再構築」とも言える現象が顕著になっている。政治改革以降、リベラル保守の台頭と支持基盤の膠着といった危機に陥った自民党は、いかに一党優位体制を復活させたのか。この問いは、日本政治の構造・力学を歴史的に比較する意味でも、また比較政治学の視点においても、もっとも重要な論点のひとつであろう。本パネルセッションでは、自民党による一党優位体制の再確立を可能にした支持基盤の変化と政党間協力を分析することを目的とする。特に、内的要因としての保守支持層動員と、外的戦略としての公明党との連立・選挙協力について検討する。同時に、新たな自民党一党優位体制の強さの裏に垣間見える脆弱性についても議論する。

## 大正デモクラシーの制度論

清水唯一朗(慶應義塾大学)

いまから100年前、日本ではのちに大正デモクラシーと称される民主主義的な政治風土が育ち、広がった。明治天皇の死去を契機とするように、大正2(1913)年はじめには憲政擁護運動が起こり、藩閥を代表する桂太郎内閣が総辞職に追い込まれた。民衆運動が日本ではじめて政権交代を実現した画期であった。

その後、改革志向の山本権兵衛内閣、ポピュリズム的な大隈重信内閣のもとで民主主義は成長し、抑制的な軍閥の寺内正毅内閣を経て「初の本格的政党内閣」とされる原敬内閣が誕生する。原が暗殺されたあとは中間内閣が続くが、1924年に至り再度の憲政擁護運動が呼びさまされ、衆議院第一党が政権を握る「憲政の常道」が確立された(拙著『政党と官僚の近代』)。

こうした流れは、これまで藩閥・元老の衰退と政党政治の進展として論じられてきた。それは藩閥政治家と政党政治家による政局史として描かれ、争点とされたのは男子普通選挙制度の実現であった。

しかし、男子普通選挙の実現を時期尚早とした原内閣が総選挙で大勝したように、そこにはより根本的な制度が横たわっている。代表者を選ぶ区画、すなわち選挙区の問題である。

1890年の帝国議会創設以来、10年間は小選挙区制度が採用されていた。1900年に大選挙区が導入されたことが、日清・日露戦争を経て富裕層が増え、国民意識が高まったことと相俟って多様な政治意思が発露された(拙稿「日本の選挙区はどうつくられたか」)。

20年にわたる大選挙区時代は、第一次世界大戦による思想変化に対応するかたちで小選挙区制度に戻された。デモクラシーは停滞し、中選挙区制という妥協的な解によって「憲政の常道」にいたる。こうした制度状況は、日本の民主主義の発展にどのような貢献し、疎外したのか。本報告ではこの「大選挙区制の20年」におけるデモクラシーの発展を制度から論じ、日本の民主主義の原型を捉えたい。



## 戦前期における日本～朝鮮半島を結ぶ航路形成 : 京都府・舞鶴港を中心に

長沢一恵(天理大学)

1889(明治22)年に海軍「鎮守府」が置かれたことにより、東湾の舞鶴軍港に新舞鶴町・中舞鶴町が、西湾の舞鶴港(商港)に舞鶴町がそれぞれ形成されて発展した。第一次世界大戦後の軍縮により舞鶴軍港が「要港部」へ格下げされるに伴い、経済救済策として民間貿易が模索されて港湾工事や航路形成の誘致活動が展開される。この中では地域社会レベルで独自に「日本海沿岸港湾共栄会」を結成して日本沿岸および朝鮮半島沿岸の諸港が合同して航路開通を計画し、北海道、七尾、敦賀、舞鶴、新舞鶴、境港、そして元山、城津、清津などが参加する北海道－日本沿岸－朝鮮半島を結ぶ対岸航路が形成されている。また、朝鮮総督府が朝鮮での貿易促進や米輸送に使用する船舶の確保などを目的に補助金を下付して運営させた「命令航路」に日本沿岸および朝鮮半島沿岸を経由する航路も指定されて、本国と植民地間で活発な植民地貿易が行われた。

近代の舞鶴については、「軍港」や「引揚港」としての役割や、それらの歴史遺産を活用したツーリズム観光文化や地域復興プロジェクトなどをテーマとした研究が進んでいるのに比べて、外地や植民地との関連での実態についての研究は数少なく、全貌は明らかになっていない。本報告では、戦前期には朝鮮や樺太など帝国内各地、さらにシベリアや北米といった帝国外の地域と広い交流が存在した歴史を明らかにし、近代の舞鶴と植民地や外地との関わりについて考察することを課題としたい。

## 〈日の丸の下で働きたい〉 : 戦前・終戦直後のブラジル日系社会の言論界における 「大東亜共栄圏再移住論」の言説と南米永住論を中心に

ソアレス モッタ フェリッペ アウグスト(大阪大学)

1908年から1941年までブラジルはおよそ20万人の日本移民を受け、南米における最大の日系コミュニティを形成していた。ブラジル日系社会において早い段階から日本語新聞や日本語の雑誌が刊行され、活発な言論界を誇っていた。また、現地の報道に並び日本のニュースが各新聞のページを占めおり、大日本帝国の非勢力圏にありながらブラジルの日系社会は「祖国」を強く意識していたことがわかる。この発表では、移民知識人と日本語での言論界に焦点を当て、ブラジルにおいて「大東亜共栄圏」がどのように考えられたかを探る。

1930年代のブラジルにおけるナショナリズムの高騰に伴って日系移民をターゲットとする同化政策が漸次的に施行され、日本移民の入国が減少し、在ブラジル日系コミュニティに対する制約が多くなっていった。戦時中、ブラジルは連合国に参加し、日系移民は「敵国民」とされ、弾圧の対象となった。それに呼応して、現地の日本語の言論界において大日本帝国の勢力圏内、要するに新しく獲得された東アジアの領土への再移住論が唱えられるようになった。日系ブラジル移民が熱帯気候に慣れており、海南島や東南アジアに容易く適応できると掲げ、ブラジルで培った経験を帝国のために活かし、「日の丸の下で働きたい」というスローガンが日本語新聞やその他の出版物に見られるようになった。それに対抗するのは、南米への永住を訴え、ブラジルにいながら日本民族であり続けれると主張した論陣である。

本発表では、「祖国」、「民族」と「弾圧」をキーワードにブラジル日系社会の言論界における「大東亜共栄圏」をめぐる言説を取り上げ、戦前・終戦直後に在ブラジル日系社会と「祖国」との関係がどのように意識されたかを分析する。

## コッコジ(韓国いけ花)の成立 : 日韓文化交流の視点から

小林善帆(立命館大学)

朝鮮戦争後の韓国において、コッコジとは当初、日本の「いけ花」を指す言葉であった。それは近代、帝国日本が朝鮮半島において植民地支配を行うなかで、同地でも日本人により「いけ花」が行われたことに始まる。当該期の朝鮮人に対しては、特に高等女学校において、日本人女性としてあるために教えられることがあり、さらに朝鮮人女性が来日し生活するなかで、日本人女性の嗜みであった「いけ花」を学び、帰国後教えた場合もある。また朝鮮戦争後、日本人女性が韓国人男性との結婚のため韓国に居住し、「いけ花」を「コッコジ」として教えた事例もある。

このように多くの場合、日本の「いけ花」を学んだ韓国人女性が教えたのであるが、朝鮮戦争後の韓国においてメディアにのせるため、この「いけ花」に「コッコジ」という韓国語の名称がつけられた。講習会がひらかれ、雑誌に作品が連載され、女子の学校教育にも取り入れられ、「コッコジ」は韓国人女性の人気を得て広まった。それからすでに60余年の歳月が過ぎ、「コッコジ」は確実に「いけ花」とは異なる道を歩んでいる。その理由として「コッコジ」には家元制度がないこと、日本と居住空間等が異なり、置くべき場所が異なることなどが挙げられる。

しかし同じように帝国日本の植民地としてあった台湾の場合は、戦後、「中国插花」がつくられたものの、多くの場合いけ花の習得は、日本の流派に所属することにより活動している。

以上のように発表者は、「いけ花」と「コッコジ」の関係様相の大筋を明らかにしてきたが、これをふまえ本発表では、朝鮮戦争後の韓国で韓国人により作成された韓国語の「いけ花」のテキストの考察を中心に、日韓の文化交流を考える。

## 讃歌と異音 : 満洲国作家爵青の現代詩を中心に

王晴(一橋大学)

1932年、日本は中国東北部に「満洲国」を建国し、満洲国は「王道」を実践し、五族協和を行政方針として掲げたのである。しかし、時が経つにつれ、その日本統治は徐々に拡大していき、同化政策の方向性が明確になり、全体的な政策が植民地的な性質に近づいていたと思われる。こうした状況の下で、多くの研究では、満洲国を日本の傀儡政権とし、植民地統治の類似性に注目しているのであるが、政治的な支配の及ばない「間」の空間が実際に存在することが見逃してしまったのである。その「間」の空間では、満洲国の文化的な表現の多様性を提示する個人の声が、微かであるが確かに聞こえているのである。

本発表では、建国10周年記念活動に捧げられた詩に焦点を当て、「間」の空間に存在し、完全に覆いをすることができない個人の声を、詩の文学的表現を通して説明することを試みていく。研究対象は、後に「漢奸作家」と見做される爵青の詩作である。彼は満洲国時代に活躍した作家であり、最初は詩人として、登場したが、その後彼の小説、評論文なども注目されたのである。また、1940年頃に満洲国の重要文化機関(満日文化協会、満洲文藝家協会など)に入職したことで、彼の文学活動の時期は満洲国時代と重なり、満洲国に育てられた文学者と言える。本発表は、彼の初期(1930年代)の詩における文学的表現と、満洲国建国10周年(1940年代)に捧げられた詩と比較することで、彼の詩的表現のジレンマを明らかにし、これを通して、満洲国という「間」の空間における個人の声とその文化的深意をさらに探求しようとするものである。

## 1923年朝鮮人虐殺事件に対するプロ作家の文学的対応

金麗真(高麗大学)

1923年9月1日に発生し、東京・神奈川県など帝国日本の首都圏を襲った関東大震災は、10万人を超える死傷者と被災者を出した。3.11東日本大震災を除いて日本近代史上最大の規模であった関東大震災は、地震発生直後に起きた火災で多くのものが焼失し、首都はまるで文明以前の時期に戻ったかのように荒廃した。

日本内閣は、地震発生翌日の9月2日に治安維持の名目で東京に、3日には東京一帯および神奈川県に戒厳令を発布した。1日の夕方から広がった〈不逞鮮人〉のデマ(朝鮮人が井戸に毒をまく、防火や暴動を起こすなど)と災難という例外状態—非常事態—に対応するためであった。その後、民衆によって構成された自警団と青年団、そして警察・軍隊によって数千人以上と推定される被害者を出すことになる朝鮮人虐殺事件が起こり、反動分子とされた社会主義者、アナーキスト、中国人も虐殺された。

その中でも断然被害を受けたのは在日朝鮮人だった。地震発生直後、不逞鮮人の暴動および朝鮮人による放火、略奪などのデマが関東全域に広がり、3・1運動以後、朝鮮人を暴力的な民族と認識していた日本民衆はこのデマを盲信した。軍・警・民衆が一体となって犯した朝鮮人虐殺事件は、まだ多くの研究課題を残しており、関東大震災を言及する際に絶対に欠かせない民族ジェノサイド事件であるのだ。

植民地被支配階級である朝鮮人との階級的連帯を図っていたプロ作家らは、関東大震災と朝鮮人虐殺事件に対して当時の文人らの認識とは少し異なるまなざしを持っていたと思われる。本発表では、朝鮮人虐殺事件に対するプロレタリア系作家の作品を通して、他民族を虐殺するという理解しがたい状況を、日本文人はどのように認識していたのかを調べる。

## 戦時下における抒情

佐藤元紀(千葉大学)

「日本詩壇」(昭和8年12月～昭和19年4月)は、吉川則比古を編集として創刊された詩誌である。「詩神」、「詩人時代」の後継として詩壇の公器的特徴を持ち合わせて始まった同誌は、日本出版文化協会が成立した昭和15年前後から「戦争詩篇号」(昭和13年11月)や「愛国詩篇」(昭和18年1月)などの特集を組むようになり、時局に従うような形で発刊を続けた。

その創刊号から参加し、「日本詩壇」を主たる作品発表のメディアとしていた詩人に岡本彌太がいる。継続発行のために時局の要請に応じた内容へと誌面を変化させつつあった

「日本詩壇」において、そこに掲載されている岡本彌太の詩篇は、戦場美化や国体賛美といった傾向を作って行った文学のルポルタージュ化に迎合するものとは異なるように見受けられる。特に、「琴歌四種」(昭和10年11月)、「琴歌抄」(昭和11年10月)、「琴歌抄」(昭和16年12月)の三回に渡って「日本詩壇」に掲載された文語定型詩の「琴歌」は、同時代の世相とは距離を置いて抒情した詩篇であり、特徴を成す取り組みであると言える。ここでは、盧溝橋事件や真珠湾攻撃が差し迫った同時代において文語定型を用いて抒情する行為が、抒情詩に飢えた読者を単に満足させるだけではなく、戦場の報告としての機能を強く打ち出す〈戦争文学〉を介して絶対化されてゆく戦場が見せる現実を相対化し得る試みとなり得たことを確認する。

また、雑誌の統廃合から逃れるための「日本詩壇」の編集方針とは距離を置いていると捉えることができる岡本彌太の詩篇を掲載し続けた編集者吉川則比古との関係も看過することはできない。両者の関係性も視野に入れつつ、岡本彌太の「琴歌」が持ち得た同時代的意義を明らかにしたい。



## 新型コロナウイルス対策の評価と影響 : 追跡能力不足と日本の政策選択

徐博晨(東京大学)

2019年末から流行した新型コロナウイルスの流行は世界に甚大な被害をもたらした。このウィルスの特徴と改めて整理すると、高い伝染力と発症前に感染する「ステルス性」を有し、また重症化・死亡のリスクも高く各国の医療システムを極限までに圧迫するなどが挙げられる。この危機に対処するために、パンデミック初期から「抑制(Suppression)戦略」と「緩和(Mitigation)戦略」の議論が存在していた。抑制戦略は病気の流行を一時的に遮断し、伝染上限に到達させない戦略のに対し、緩和戦略は病気の流行は不可避と判断し、できるだけ病床数などを拡充し死亡者の波を最小限にするという方針だった。

本研究は、各国のコロナ対策が制定された過程を分析し比較することで、既存の政治制度及び政府能力が、各国の施策を制限するメカニズムを解明する。具体的には、社会が実行できるアプローチを「能動的に追跡」と「広範囲行動制限」に分けて、コロナの感染者数を減少傾向に転じさせるのに必要な政策の規模を割り出す。経済的被害が最小となるシナリオを最適解とし、日本にどれほどの改善点があるかを評価する。さらに、第三の要素として東アジアの国際政治を考慮することで、「日本モデル」に拘り寄り道を進んだ原因を検討する。ワクチン接種が普及する中、各国とも出口戦略を模索し始めている時にこそ、新型コロナウイルスをコントロールする可能性が出てきている。本研究は今までの対策を見直し、未来に向けての議論に貢献したい。

## 大阪市の公害問題対策

リョウ キンイ(東京外国語大学)

公害問題は自然環境破壊問題として認識されることが多いが、それは資本主義的生産によって生み出されるものである。エンゲルスは著作『イギリス労働者階級の状態』(1845年)の中でマンチェスターとその周辺都市の都市労働者の生活状況を論じていた。住宅、上下水道、道路の劣化及び大気汚染問題は深刻であった。ブルジョワジーは汚染された環境に住まず、結局公害問題の被害者は労働者となった<sup>3)</sup>。

日本の公害問題史では明治期の足尾鉍毒事件をはじめ、水俣病やイタイイタイ病などが注目されてきた。戦前の公害問題を遡ると、日本一の工業都市の大阪はイギリスと同じく、都市近代化につれて、重化学工業による公害問題も激化した。大気汚染、騒音問題、水質汚濁などの公害に関する世論が高まっていた。

例えば、1932年6月に日本最初の煤煙防止法規として煤煙防止規則(大阪府令)が発布された。これは1931年10月5日に大阪都市協会会長(大阪市長)関一の名で、内務大臣、大阪府知事、大阪府警察部長に建議書を提出し、煤煙防止規則の制定を主張した成果である。その上、関市長の下で、藤原九十郎がリードした大阪市立衛生試験所は詳細な煤煙実態調査を行っていた。

一方、関は公害対策を講じると同時に、都市整備の視点からも階級問題を考慮していた。関は「保健、衛生、快適、経済等の点から見て住み心地よく安全にして能率の高き都市」<sup>4)</sup>の建設を目指していた。先行研究として、芝村篤樹<sup>5)</sup>、小田康徳<sup>6)</sup>は煤煙防止規則の

3) 小田康徳『近代日本の公害問題——史的形成過程の研究——』、世界思想社、1983年4月20日。

4) 関一『都市政策の理論と実際』、三省堂、1936年、148頁。

5) 芝村篤樹『日本近代都市の成立——1920・30年代の大阪——』、松籟社、1998年。

6) 前掲著書『近代日本の公害問題——史的形成過程の研究——』。



問題点を指摘したが、公害対策がどれほど大阪の都市計画と関わっていたかはそれほど論じられていない。本報告では、藤原九十郎らの煤煙防止運動とともに、関は田園都市の建設によって、都市公害問題の改善のみならず、都市秩序の再編を図っていたことを検証する。

### 分科12-3

## 自己責任ディスコースをめぐる政治的・文化的実践 記号イデオロギーに着目した言語人類学的分析

青山俊之(筑波大学)

本発表では、言語人類学的な観点から日本社会における自己責任ディスコースの再生産に寄与する政治的・文化的実践に着目し、そこに暗黙理に関与する日本的な「自己観」と「責任観」の記号イデオロギーの一端を分析する。日本社会で、リスク管理の失敗などといった他者の不用意さを批判する言論は「自己責任論」と呼ばれる。特に「自己責任論」の中でも代表的な事例が2004年イラク日本人人質事件で、人質とその家族の「自己責任」が問われ、社会的・政治的に大きな議論を巻き起こした。被害者に対する過剰なバッシングを行う「自己責任論」に対し、人文社会科学の学術的議論に限らない批判的な議論が展開されてきた。政治・経済・教育・リスク管理などといったジャンルで幅広く「自己責任」ということばは用いられ、日常に浸透している。「自己責任論」の主張やその批判に対し議論されるのが、「自由な行為とその因果を引き受ける責任」の成り立たなさや新自由主義や能力主義をはじめとした政治的・社会的イデオロギーに対する問題である。しかしながら、2015年ISIS日本人人質事件における「自己責任論」に関して日本の国内外に拡散したブログ記事を分析した青山(2021)の分析から、自己責任を問い立てる主体の文化的規範として社会関係的立場・役割意識を指標する「迷惑(をかけない)」ことが際立っていたことを明らかにした。この分析結果から、日本社会における「自己責任論」の生成・再生産過程には、日本語話者に通底する言語イデオロギーと政治的・社会的イデオロギーが複合的に関与していると考えられる。本発表では、日本社会における政治的・文化的実践である「自己責任論」には、ポスト／近代化の過程の中で、複合的な記号イデオロギーが通底していることを論じる。

## 参考文献

青山俊之(2021)「自己責任ディスコースの詩的連鎖—ISIS日本人質事件におけるブログ記事に着目して—」『社会言語科学』23(2)p.19-34

## 分科12-4

### 2010年から2020年までの日フィリピン貿易のマクロ評価

Ms. Ivan Kaye F. Bantigue(サントトマス大学)

国際貿易は、人々の中のギャップを埋め続けています。貿易は長い間存在しており、国の歴史的発展は、物理的、道徳的、知的両方のニーズを保障した結果です。余剰品と希少な財の交換は、生活水準を確保するためにすべての材料と人材にアクセスできる国がないため、不可欠な慣行となっています。社会的・国際関係の促進に貢献する点で非常に重要であると考えられています。

フィリピンと日本の経済関係は、アジア太平洋地域で最もダイナミックで活気に満ちた国の一つです。日・フィリピン経済連携協定は、日本とフィリピン、特にインフラ部門の形成を更に支援することが期待されます。輸出量は、市場の競争力、特に日本人の貿易・ビジネスの円滑化を反映しています。

フィリピンと日本は2008年に自由貿易協定を締結した。PJEPAはフィリピンの唯一の二国間自由貿易協定であり、とりわけ、商品の貿易、サービス貿易、投資、自然人の移動、知的財産、通関手続、ビジネス環境の改善、政府調達をカバーしています。

日本はフィリピンのトップ貿易相手国であり、2012年のフィリピン貿易総額の14.3%が日本からの貿易です。2012年のフィリピンと日本の累計は163億5,000万ドルでした。日本への輸出額は98億8,100万ドル、輸入額は6,467億ドルでした。日本への輸出総額の26.9%の大型電子製品は26億5,500万ドルの価値があり、ウッドクラフトと家具は121億5,000万ドルの支援を受けています。一方、日本の輸入は2,400億ドル、輸送機器は9億7,542万ドルでした。

2019年と比較すると、フィリピンは108億ドルを日本に輸出しました。フィリピンが日本に輸出した主な製品は、12億9,000万ドル、木工品、8億3,000万ドル相当の木材、7億6,400万ドル相当のバナナ絶縁電線でした。一方、日本はフィリピンに103億ドルを輸出したが、フィ

リピンに輸出される日本のトップ製品は、7億7900万ドル相当のバス、5億5900万ドル相当の集積回路、4億5500万ドル相当の配送トラックである。

過去24年間のフィリピン向け輸出は、1995年の69億4000万ドルから2019年には103億ドルに年率1.66%増加し、フィリピン対日本輸出は年率5.08%増の1995年の32億9000万ドルから108億ドルに増加した。

この調査では、2010年から2020年までのフィリピンの日本への輸出、特に市場シェアと成長率を示しています。また、指定された時間枠のデータを使用して、フィリピンの輸出の比較優位性に関するデータを提供します。また、2002年に署名された日フィリピン経済連携(JPEP)と2009年に署名された日フィリピン経済連携(JPEPA)の設立を通じて、フィリピンと日本の外交関係が両国間の経済連携をどのように反映しているかについても洞察が得られた。

また、知的財産、競争政策、ビジネス環境の改善、人材育成、情報通信技術、二国間協力など、総合的な経済連携の推進を目指した。本協定締結後、本契約は、日本とフィリピンの相補的な関係を最大限に活用し、既存の二国間経済関係を一層強化することに貢献するものと期待される。

情報通信技術、科学技術、知的財産、人材育成、及び適切な競争政策を設計する国の能力の向上における能力構築のための技術支援と開発協力の潜在的な経済的利益は、この協定から明らかである。これらの内部要因により、フィリピンの輸出業者は、中国や近隣の東南アジア諸国との厳しい競争や日本市場の継続的な保護と規制に対して脆弱になります。

## 分科13-1

### 戦後日本における地域の軍事化と警察の社会史

渡邊啓太(東京外国語大学)

本研究は、軍事化された地域における政治警察と市民警察の動態を総合的に分析することとで、政治警察を中心にして構築されてきた戦後日本の警察についての認識枠組みを転換し、戦後日本の警察をより多角的にとらえる視座を提示することを目的とする。

戦前・戦中から「帝都防衛」のため軍事化された地域であった立川地域は、日本の敗戦後も東アジア冷戦構造のなか米軍によって再軍事化されていく。1955年から数年に渡って基地拡張を目論み土地収用を行おうとする米軍および日本政府と、それに反対し抵抗する住民や支援者が対峙し、強制測量が進められようとするたびに警官隊と住民・支援者が激しく衝突するという事態が起こることになる。1957年にはいわゆる「砂川事件」が起き、この時期から米軍・日本政府の戦略の転換もあって闘争の場が法廷に移っていく。

このように歴史を辿っていくなかで、立川地域における警察を論じようとする際に真っ先に目につくのは、人びとの抵抗を暴力的に鎮圧していった政治警察としての警備警察の存在であろう。砂川闘争におけるこのような警察の実力行使は、警察庁・警視庁のみならず、日本政府と米政府までもが一体となって推進したものであった。

一方で、1950年代後半から1960年代前半は、交通や防犯といった市民警察に属する事象について警察組織が全体として大きな関心を寄せ、対策を試みていった時期でもあった。そして立川地域は、基地売買春の問題が風紀の問題としてとりあげられていたり、少年非行の増加が大きな問題とされたりしていた。つまり立川地域は「基地の街」であるがゆえに、政治警察・市民警察双方にとって重要な問題を抱えていたと考えることができる。

以上を踏まえて、本稿では1950年代後半から1960年代前半の東京の砂川町・立川市という地域に定位して、警察と人びとの重層的な権力関係を分析していく。

## 沖縄への自衛隊移駐期における自衛隊支援活動に関する一考察 ：沖縄県防衛協会の設立を中心に

中原雅人(神戸大学)

戦後の日本社会では、自衛隊に対する否定的な認識が広く共有されてきたと言われることが多い。とはいえその事は、当時において自衛隊に肯定的な認識を持った人々が存在しなかった事を意味しない。例えば、内閣府による世論調査は、少なくとも1960年代から2020年現在まで、自衛隊に対して肯定的な認識を持つ国民が一定数いたことを示している。

同様に、戦後の早い時期から自衛隊を支援する動きも存在した。その代表例が1960年代に全国各地で民間の自衛隊支援団体である防衛協会・自衛隊協力会が設立されたことである。そして、そうした動きは、とりわけ反軍・反自衛隊思想が強いとされてきた沖縄においても見られた。それが、1972年3月の沖縄県防衛協会の設立である。それでは、沖縄県防衛協会はどのような経緯で、また、どんな人によって設立されたのだろうか。この様な疑問に基づき、本研究では、それが設立されるまでの経緯を明らかにする。

まず、防衛協会・自衛隊協力会は、自衛隊支援と防衛思想の普及を主な目的とする民間の任意団体であった。1960年頃から駐屯地周辺の地域で設立が始まり、1960年代後半にはすでに全国で1,000以上の協会数と約60万人の会員数を擁する団体に発展していた。同時に、1960年代は、退職自衛官によって設立された隊友会や、自衛隊員の家族によって設立された家族会などの自衛隊支援団体の設立と発展が加速していた時期でもあった。

そうした状況の中で、沖縄出身の退職自衛官である石嶺邦夫が中心となり、沖縄への自衛隊移駐に先駆けて、1969年に隊友会と家族会を設立した。さらに、その過程で民間側からの自衛隊支援の必要性を認識し、防衛協会・自衛隊協力会の設立を目指した。その際、東京都防衛協会等の既存の団体から設立に関するノウハウを学びつつ、國場幸太郎(那覇商工会議所会長)といった沖縄の有力財界人の支持を取り付けることによって、1972年3月31日に沖縄県防衛協会を設立させたのであった。

## 対米バンドワゴニング政策？ 日本の戦略選択に影響を与える要因分析

奄斐婷(国立政治大)

中国の経済的・軍事的台頭に直面し、日本はどう対応するか？普遍的な価値観を深化しようとするインド太平洋構想と米国との安全保障協力を重視する戦略から見れば日本は中国にバランス、米国にバンドワゴニング戦略をとっている。なぜ日本は米中間に中間位置を取ろうとするヘッジング戦略ではなく米国にバンドワゴニング戦略をとったか？国際関係論における「分析的折衷主義(Analytic Eclecticism)」を用いて日本の安全保障戦略はいかに戦後国際経済的・外交的構造や日本国内の安全保障の構造に規定されるのを分析する。本稿では日本の安全保障戦略に影響する三つの要因を検証する。第一、リアリズム(特に脅威の均衡の理論)から見れば中国が軍事力が向上し尖閣諸島周辺での活動を一段と活発化させている今、1952年から締結された日米同盟はますます強化する。第二、リベラリズムから見れば日本は戦後に西側陣営の国際経済的・外交的レジームや米国を中心とした軍事同盟体制に参加するだけでなく主要なアクターにもなったためリベラル体制を維持したい。第三、社会構成主義から見れば戦後に民主主義や普遍的な価値観などのリベラル体制を内面化(Internalize)している日本は中国がリベラル体制を動揺するように見えるので米国に支持する。

### キーワード

：分析的折衷主義(Analytic Eclecticism)、日本の安全保障戦略、日米関係、バンドワゴニング政策、バランス政策



